

財團法人八尾市文化財調査研究会報告61

- I 小阪合遺跡（第26次調査）
- II 東郷遺跡（第44次調査）
- III 中田遺跡（第26次調査）
- IV 中田遺跡（第30次調査）
- V 東弓削遺跡（第7次調査）
- VI 八尾南遺跡（第21次調査）

1998年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

財團法人八尾市文化財調査研究会報告61

- I 小阪合遺跡（第26次調査）
- II 東郷遺跡（第44次調査）
- III 中田遺跡（第26次調査）
- IV 中田遺跡（第30次調査）
- V 東弓削遺跡（第7次調査）
- VI 八尾南遺跡（第21次調査）

1998年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、平成5年度～7年度に発掘調査を実施した小阪合遺跡・東郷遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・八尾南遺跡の遺物整理等が完了し、調査報告書を刊行する運びとなりました。これらの調査では、古墳時代を中心に、弥生時代から近世までと、さまざまな時代の遺構・遺物が検出されており、各時代の人々の生活が窺える資料であります。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査成果の報告書を収録したものである。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
 1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成10年3月31日をもって終了した。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・II・IV・VIが坪田真一、IIIが岡田清一、Vが成海佳子で、全体の構成・編集は坪田が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図（昭和61年8月発行・平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）を使用した。
 1. 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
 1. 本書で用いた方位は、座標北及び磁北である。
 1. 遺構は下記の略号で示した。

| | | | | | | | | | |
|-------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|--------|-------|
| 掘立柱建物 | - S B | 井戸 | - S E | 土坑 | - S K | 溝 | - S D | ピット・小穴 | - S P |
| 落ち込み | - S O | 土器集積 | - S W | 不明遺構 | - S X | 自然河川 | - N R | | |
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

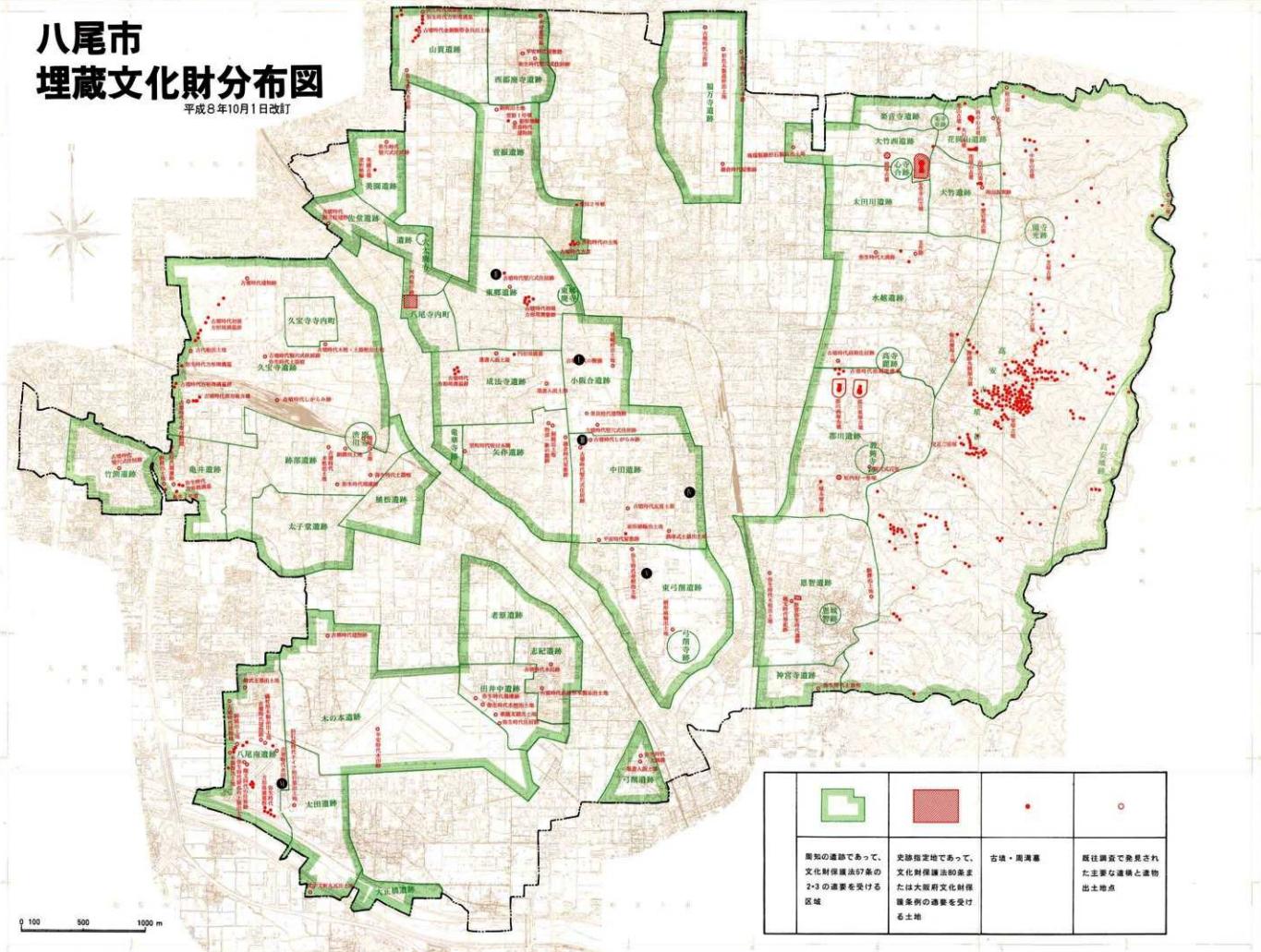
序

八尾市埋蔵文化財分布図

| | |
|----------------------------------|-----|
| I 小阪合遺跡第26次調査 (K S 93-26) | 1 |
| II 東郷遺跡第44次調査 (T G 93-44) | 41 |
| III 中田遺跡第26次調査 (N T 94-26) | 89 |
| IV 中田遺跡第30次調査 (N T 95-30) | 107 |
| V 東弓削遺跡第7次調査 (H Y 94-7) | 127 |
| VI 八尾南遺跡第21次調査 (Y S 94-21) | 157 |
| 報告書抄録 | |

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



0 100 500 1000 m

I 小阪合遺跡第26次調査 (K S 93-26)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市青山町2丁目219番地で実施した共同住宅建設に伴う小阪合遺跡第26次調査（KS93-26）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第32号 平成5年6月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が清水幸男氏から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成5年9月1日に着手し、同年10月4日に終了した。調査面積は約420m²である。
1. 現地調査には、至田桂子・柴田達弥・浜田千年・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、森本めぐみ（当調査研究会）・岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。
1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。

本 文 目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第1章 はじめに..... | 1 |
| 第2章 調査概要..... | 3 |
| 第1節 調査方法..... | 3 |
| 第2節 基本層序..... | 4 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物..... | 6 |
| 第3章 まとめ..... | 37 |

挿 図 目 次

| | |
|-------------------------------------------|----|
| 第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000)..... | 2 |
| 第2図 地区割図 (S = 1 / 400)..... | 3 |
| 第3図 基本層序 (S = 1 / 40)..... | 4 |
| 第4図 第1次面平面図 (S = 1 / 150)..... | 5 |
| 第5図 S E 101平面・断面図 (S = 1 / 20)..... | 6 |
| 第6図 S E 102平面・断面図 (S = 1 / 20)..... | 7 |
| 第7図 S E 103平面・断面図 (S = 1 / 20)..... | 8 |
| 第8図 S E 104平面・断面図 (S = 1 / 20)..... | 9 |
| 第9図 S E 106平面・断面図 (S = 1 / 20)..... | 10 |
| 第10図 第1次面井戸出土遺物 (S = 1 / 4)..... | 11 |
| 第11図 第1次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4)..... | 12 |
| 第12図 S P 112平面・断面図 (S = 1 / 5)..... | 13 |
| 第13図 S W 101平面図 (S = 1 / 5)..... | 14 |
| 第14図 第4層出土遺物 (S = 1 / 4)..... | 15 |
| 第15図 第2次面平面図 (S = 1 / 150)..... | 16 |
| 第16図 S B 201平面・断面図 (S = 1 / 50)..... | 17 |
| 第17図 S B 202平面・断面図 (S = 1 / 50)..... | 18 |
| 第18図 S B 203平面・断面図 (S = 1 / 50)..... | 19 |
| 第19図 S K 209平面・断面図 (S = 1 / 30)..... | 20 |
| 第20図 S K 209出土遺物① (S = 1 / 4)..... | 22 |
| 第21図 S K 209出土遺物② (S = 1 / 4)..... | 23 |
| 第22図 S K 209出土遺物③ (S = 1 / 4)..... | 24 |
| 第23図 S K 209出土遺物④ (S = 1 / 4)..... | 25 |
| 第24図 S K 209出土遺物⑤ (S = 1 / 4)..... | 26 |
| 第25図 S K 209出土遺物⑥ (S = 1 / 4)..... | 27 |
| 第26図 第2次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4)..... | 28 |
| 第27図 第5層出土遺物① (S = 1 / 4)..... | 33 |
| 第28図 第5層出土遺物② (S = 1 / 4)..... | 34 |
| 第29図 第3次面平面図 (S = 1 / 150)..... | 35 |
| 第30図 S K 301・N R 301出土遺物 (S = 1 / 4)..... | 36 |
| 第31図 調査地周辺の関連遺構 (S = 1 / 10000)..... | 38 |

表 目 次

| | | |
|----|--------------------------|----|
| 表1 | 周辺の調査一覧表 | 1 |
| 表2 | 第1次面土坑（S K101～114）法量表 | 12 |
| 表3 | 第1次面溝（S D101～107）法量表 | 13 |
| 表4 | 第1次面ピット（S P101～115）法量表 | 14 |
| 表5 | 第2次面土坑（S K201～209）法量表 | 29 |
| 表6 | 第2次面溝（S D201～206）法量表 | 29 |
| 表7 | 第2次面ピット（S P201～255）法量表 | 30 |
| 表8 | 第2次面ピット（S P256～2110）法量表 | 31 |
| 表9 | 第2次面ピット（S P2111～2142）法量表 | 32 |

図 版 目 次

| | |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 図版1 | 第1次面全景（北から） S P112（北から） SW101（北から） |
| 図版2 | S E101南壁 S E101全景（北から） S E102南壁 S E102断割り（北から） S E103南壁 S E103断割り（南から） |
| 図版3 | S E104東壁 S E103全景（北から） S E104全景（西から） S E106石材出土状況（北から） S E106全景（西から） |
| 図版4 | 第2次面全景（北から） S B201周辺（北から） S B202・203周辺（北から） |
| 図版5 | S K209全景（西から）・（南東から）・（南から）・（北から） |
| 図版6 | S K209南部遺物出土状況（東から） S P2118（南西から） S P2123（北から） N R301内土器(332) 出土状況（北から） 第3次面全景（北から） |
| 図版7 | 出土遺物 S E101・S E102・S E103・S E104・S E106・S P110 |
| 図版8 | 出土遺物 S P112・第4層・SW101 |
| 図版9 | 出土遺物 第4層・S K209 |
| 図版10 | 出土遺物 S K209 |
| 図版11 | 出土遺物 S K209 |
| 図版12 | 出土遺物 S K209 |
| 図版13 | 出土遺物 S K209 |

- 图版14 出土遗物 S K209
- 图版15 出土遗物 S K209
- 图版16 出土遗物 S K209
- 图版17 出土遗物 S K209
- 图版18 出土遗物 S K209
- 图版19 出土遗物 S P261 · S P287 · S P2139 · 第5層
- 图版20 出土遗物 第5層
- 图版21 出土遗物 第5層 · S K301 · N R301
- 图版22 出土遗物 N R301

第1章 はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7~8丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

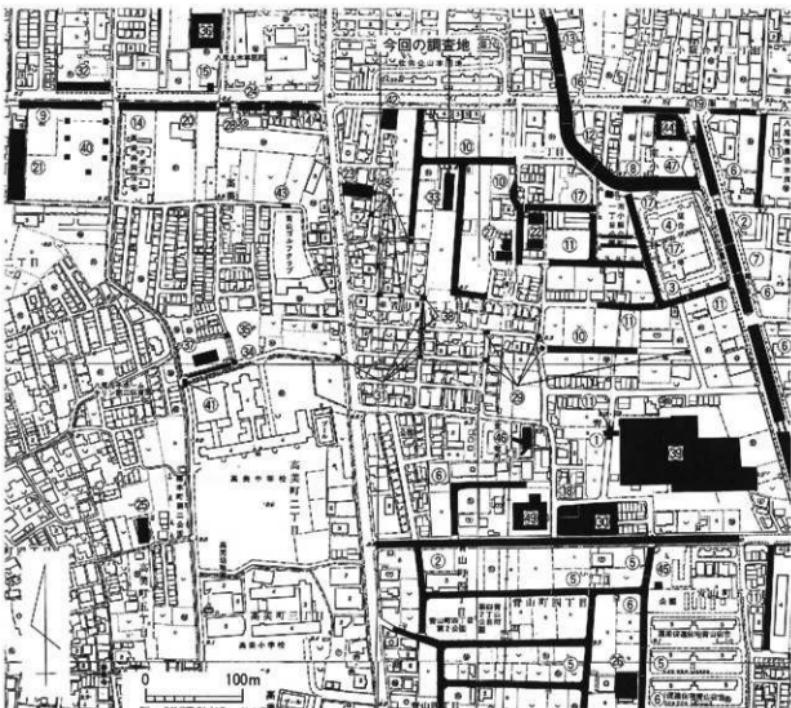
当遺跡は昭和30年、若草町における大阪府住宅供給公社建設工事の際に、古墳時代の遺物が出土したことにより認識された遺跡である。そして昭和57年度~63年度には、八尾都市計画事業南小阪合地区画整理事業や寝屋川南部流域下水道整備に伴い、当調査研究会により発掘調査が実施された。この調査は計画道路部分や水路部分といった線的な調査が主であったが、総面積は約10,000m²、南北約900m・東西約500mの範囲に及ぶものである。さらに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、これらの調査成果から、

| 番号 | 調査主体・遺跡 | 調査年月 | 調査原因 | 文 献 | 登録年 |
|----|--------------------|----------------|-----------|----------------------------|------|
| 1 | 市教委 | 昭和49年7月~9月 | 遺跡判明確認 | 「中田遺跡」中田遺跡調査報告書Ⅱ | 1975 |
| 2 | 研究会・第1次 (KSB2-01) | 昭和50年11月~58年3月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告10 | 1987 |
| 3 | 研究会・第2次 (KSB3-02) | 昭和58年6月~7月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告11 | 1987 |
| 4 | 市教委・小阪合 | 昭和59年9月~59年3月 | ポンプ場設置 | | |
| 5 | 研究会・第3次 (KSB3-03) | 昭和59年10月~59年2月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告11 | 1987 |
| 6 | 研究会・第4次 (KSB4-04) | 昭和59年6月~11月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告15 | 1988 |
| 7 | 市教委・小阪合 | 昭和59年9月~11月 | 幹線下水道 | | |
| 8 | 研究会・第5次 (KSB4-05) | 昭和60年1月~3月 | 地下水水位監査 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告8 | 1986 |
| 9 | 市教委・成法寺 | 昭和60年7月~10月 | 府道改修 | 「成法寺遺跡発掘調査概要」Ⅰ | 1987 |
| 10 | 研究会・第6次 (KSB6-06) | 昭和60年8月~12月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告26 | 1990 |
| 11 | 研究会・第10次 (KSB7-10) | 昭和60年8月~12月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告26 | 1990 |
| 12 | 研究会・第11次 (KSB7-11) | 昭和62年8月~9月 | ポンプ場設置 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告16 | 1988 |
| 13 | 研究会・第12次 (KSB7-12) | 昭和62年10月~63年1月 | ポンプ場設置 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告16 | 1988 |
| 14 | 市教委・成法寺 | 昭和63年1月 | 府道改修 | | |
| 15 | 東急電鉄新規 (T688-26) | 昭和63年3月 | 地下施設建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告16 | 1988 |
| 16 | 研究会・第13次 (KSB8-15) | 昭和63年5月~10月 | ポンプ場設置 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 |
| 17 | 研究会・第15次 (KSB8-16) | 昭和63年7月~8月 | 南小阪合地区画整理 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告26 | 1990 |
| 18 | 研究会・第17次 (KSB8-17) | 昭和63年8月~12月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 |
| 19 | 市教委・小阪合 | 昭和63年10月~12月 | 府道改修 | 小阪合地区画整理報告書要、Ⅱ~八尾市南小阪合町所附~ | 1989 |
| 20 | 市教委・成法寺 | 昭和63年10月~12月 | 府道改修 | 「成法寺遺跡発掘調査概要」Ⅳ | 1989 |
| 21 | 成法寺第4次 (KSB8-4) | 昭和63年11月~12月 | 事務所建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告16 | 1991 |
| 22 | 研究会・第18次 (KSB8-18) | 平成元年9月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告28 | 1990 |
| 23 | 市教委・小阪合 (SBK-25) | 平成元年9月 | 共同往宅建設 | 八尾市文化調査報告20 | 1990 |
| 24 | 市教委・成法寺 | 平成元年9月~10月 | 府道改修 | 「成法寺遺跡発掘調査概要」Ⅴ | 1990 |
| 25 | 成法寺第6次 (SBK6-06) | 平成元年2月~3月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告33 | 1991 |
| 26 | 研究会・第19次 (KSB9-19) | 平成元年10月~11月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告41 | 1993 |
| 27 | 研究会・第20次 (KSB9-20) | 平成元年4月~5月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告41 | 1993 |
| 28 | 成法寺第41次 年度別調査 | 平成元年6月 | 府道改修 | 「成法寺遺跡発掘調査概要」Ⅵ | 1994 |
| 29 | 研究会・第23次 (KSB9-23) | 平成元年9月~11月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告39 | 1993 |
| 30 | 研究会・第24次 (KSB9-24) | 平成元年11月~12月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告39 | 1993 |
| 31 | 研究会・第25次 (KSB9-25) | 平成元年4月~7月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| 32 | 市教委・成法寺 (T693-1) | 平成元年7月~6年1月 | 府道改修 | 「成法寺遺跡発掘調査概要」Ⅶ | 1994 |
| 33 | 研究会・第26次 (KSB9-26) | 平成元年9月~10月 | 共同往宅建設 | 今後の調査 | |
| 34 | 成法寺第10次 (SBK7-10) | 平成元年11月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| 35 | 成法寺第11次 (SBK7-11) | 平成元年11月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告43 | 1994 |
| 36 | 京瀬第42次 (T693-42) | 平成元年12月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告48 | 1995 |
| 37 | 成法寺第12次 (SBK7-12) | 平成元年3月 | 共同往宅建設 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| 38 | 研究会・第27次 (KSB9-27) | 平成元年5月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告50 | 1996 |
| 39 | 研究会・第28次 (KSB9-28) | 平成元年6月~7年3月 | 総合体育館建築 | 平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1995 |
| 40 | 市教委・成法寺 (SBK-30) | 平成元年8月 | 店舗建設 | 八尾市文化調査報告31 | 1995 |
| 41 | 成法寺第14次 (SBK7-14) | 平成元年11月~7年1月 | 公共下水道 | 財團法人八尾市文化財調査研究会報告51 | 1996 |
| 42 | 市教委・小阪合 (95-104) | 平成元年6月~7月 | 診療所・住宅建設 | 八尾市文化調査報告33 | 1996 |
| 43 | 成法寺第30次 (SBK7-16) | 平成元年7月 | 公共下水道 | 平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1996 |
| 44 | 研究会・第30次 (KSB9-30) | 平成元年1月 | 共同往宅建設 | 平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1996 |
| 45 | 研究会・第31次 (KSB9-31) | 平成元年1月~2月 | 防火水槽 | 平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1996 |
| 46 | 研究会・第32次 (KSB9-32) | 平成元年7月 | 電気設備増設 | 平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1997 |
| 47 | 研究会・第33次 (KSB9-33) | 平成元年11月 | 人孔・立坑設置 | 平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1997 |
| 48 | 研究会・第34次 (KSB9-34) | 平成9年1月~2月 | 公共下水道 | 平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1997 |
| 49 | 研究会・第35次 (KSB9-35) | 平成9年3月~6月 | 老人センター等建設 | 平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1997 |

表1 周辺の調査一覧表(番号は第1図に対応)

当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地⑩周囲の道路部分では、区画整理事業に伴う調査⑩が実施されている。この調査では、古墳時代前期以降の各時代にわたる遺構が検出され、近世に至るまで連続と集落が営まれていることが確認されている。この東方の②では、当遺跡内では唯一の弥生時代中期の集落域が確認されている。弥生時代中期では西の成法寺遺跡域の②で方形周溝墓が、その南西部④で濃密な遺物包含層が確認されており、集落の中心部と想定されている。続く弥生時代後期では、②で水田面が、また当地北西部の⑫や⑬では、溝・ピット等の集落遺構、西部の③では遺物包含層が確認されている。古墳時代前期では、東部⑦で埋没河川から布留式期新相の土器を伴って漆塗木製横櫛が出土しており、国内最古例の一つとして注目されている。西部⑨では古墳時代前期の方形周溝墓があり、また古墳時代中期では東部⑥で埴輪円筒棺が、南西部④では古墳の存在を示唆する埴輪がまとまって出土し、各時期の墓域が想定されている。奈良～平安時代では当地周辺や南部の⑩・⑤・②等に集落遺構がみられ、南西部⑩の井戸からは墨書き人面土器が出土している。鎌倉～室町時代ではほぼ全城で生産遺構・集落遺構がみられ、南西部⑤では屋敷地を区画するような溝が検出されている。



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

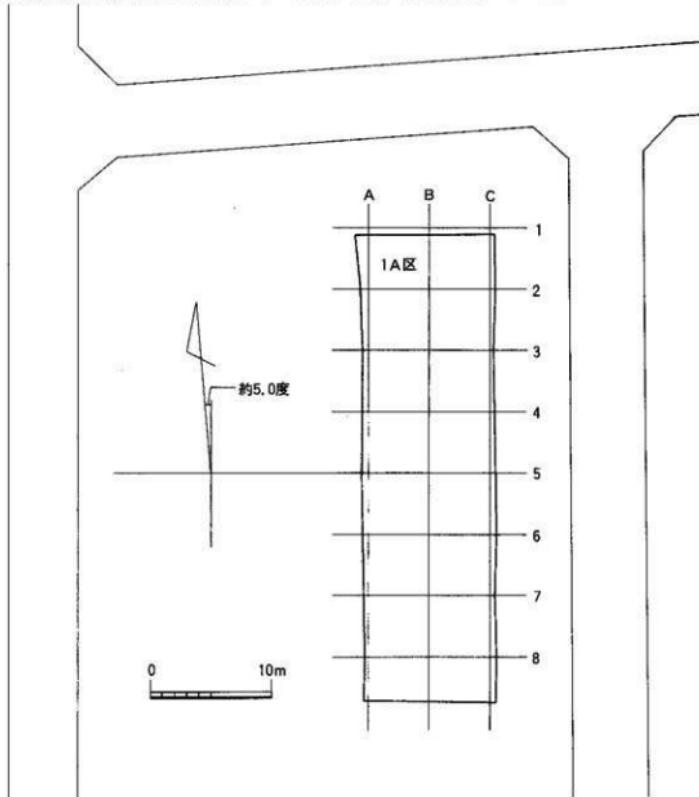
第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第26次調査である。調査区平面形は南北に長い長方形（南北約38m・東西約11m）を呈している。

調査にあたっては周辺の調査成果を参考にして、まず現地表下約0.8mまでを機械掘削し、以下の約0.7mを人力掘削により実施した。また調査区の北部・中部・南部で機械掘削による下層確認調査を実施した。

地区割については調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。そして東西ラインに数字（北から1～8）、南北ラインにアルファベット（西からA～C）を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの南北ラインは北から東に約5.0度振っている。

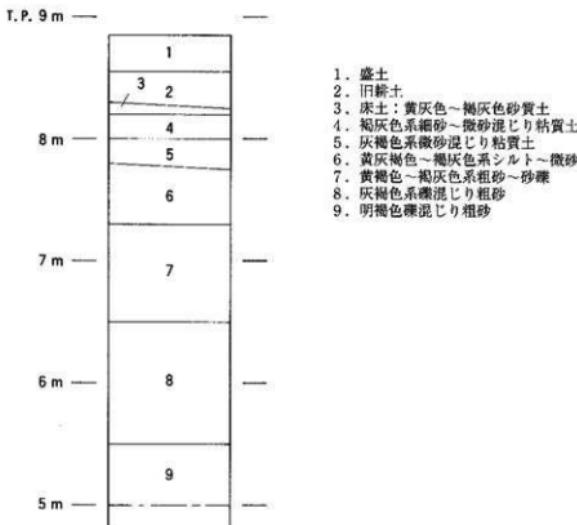


第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

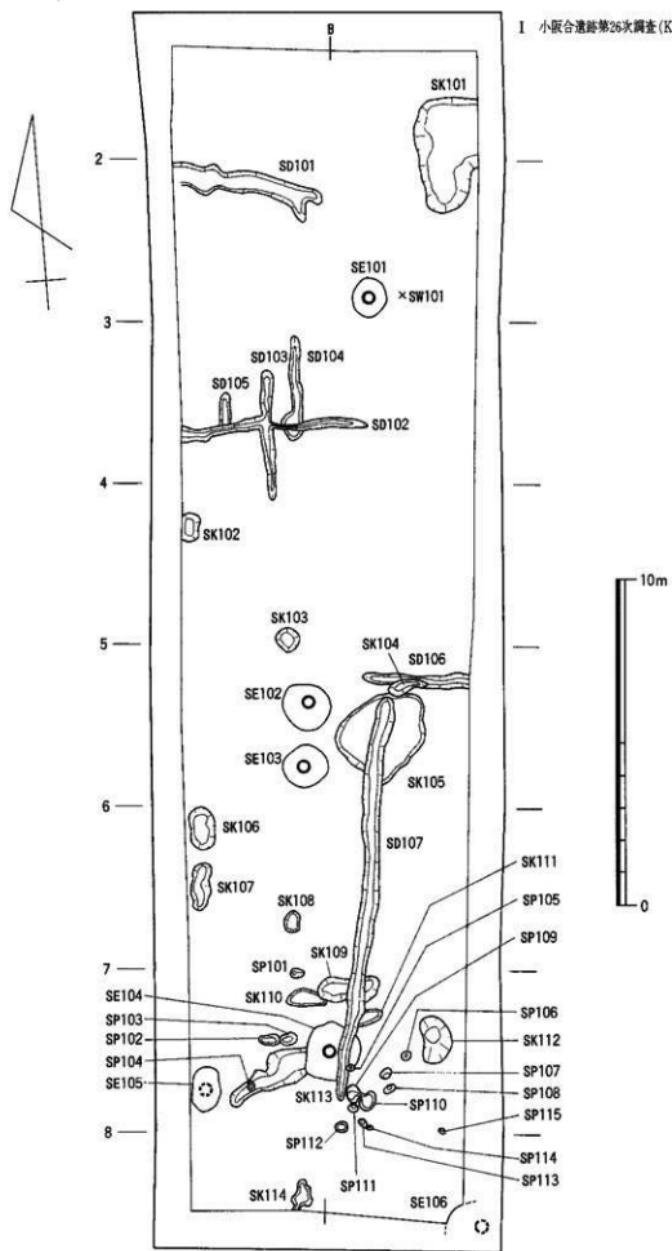
第2節 基本層序

第1層は盛土である。層厚約30cm。第2層は旧耕土で、区画整理直前までの耕作土にあたり、数層に分層が可能である。層厚約30cm。調査地南部にみられる第3層は第2層に伴う床土と捉えられ、砂粒を多く含む。層厚5cm～20cm。第4層は平安時代を主として古墳時代中期以降の土器を含んでいる。層厚約20cm。第5層は古墳時代中期から奈良時代頃の土器を含み、この上面が第1次面で標高約8.0mを測る。層厚約20cm。なお第4層上面からの遺構も含んでいる。第4・5層は層相が類似しており、出土遺物の時期幅を考え合わせると、両層とも攪拌された整地層と捉えられる。おおむね第4層が平安時代、第5層が奈良時代頃の整地層と考えられよう。第6層は古墳時代前期までの土器を含んでおり、この上面が第2次面で標高約7.8mを測る。第6層以下は水成堆積が続いており、河川堆積の様相である。この河川最終堆積部分にあたる第6層は、層厚30cm～60cmを測る粘質シルト～微砂層を基調とする滞水堆積層で、この部分が第3次面N R 301上層にあたる。第7層以下は粗砂層で、西部では上部は砂疊層となっており、下層確認調査の結果、標高約5.0mまで粗砂層が続いている。

なお西部の市教委調査地②では鎌倉時代の遺構面2面、古墳時代中期の遺構面2面を捉えている。当調査地でも第4層は上下2層に分層が可能で、第5層も細分されるのかもしれない。



第3図 基本層序 (S = 1/40)



第4図 第1次面平面図 (S = 1 / 150)

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1次面〉

第5層上面で井戸6基（S E 101～106）・土坑14基（S K 101～114）・溝7条（S D 101～107）・ピット15個（S P 101～115）・土器集積1基（S W 101）を検出した。遺構は南部に多くみられ、調査区東壁中にも南部にピット状の遺構掘方が多く認められる。これらの遺構の時期は平安時代後期から鎌倉時代に比定される。なお第4層上面からの遺構も含んでいる。

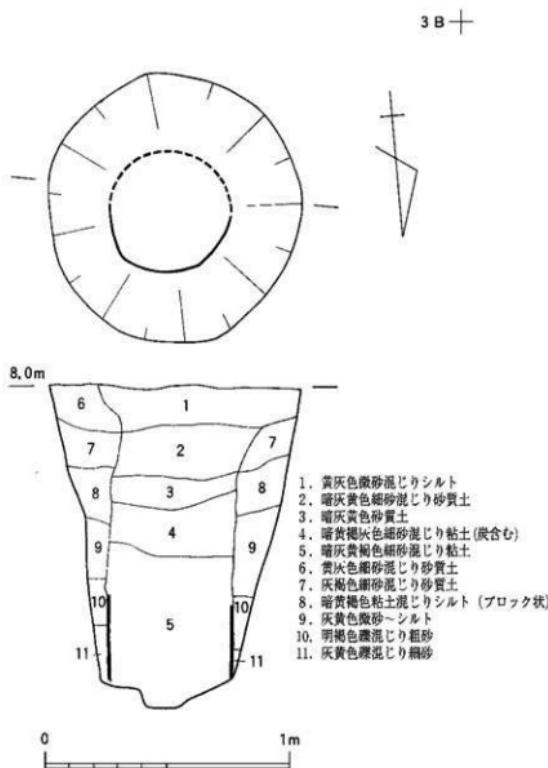
井戸（S E）

S E 101

2B区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約8.0mである。掘方平面形はほぼ円形で、直径は約1.0mを測る。掘方断面はV字に近い逆台形を呈し、検出面からの深さは約1.3mを測る。曲物は上面から約0.9mの深さで検出され、掘方のほぼ中央に位置している。直径約50cm・高さ25cm以上を測るもので、最下段のみが遺存している。

掘方埋土は上から黄灰色細砂混じり砂質土・灰褐色細砂混じり砂質土・暗黄褐色粘土混じりシルト（ブロック状）・灰黄色微砂～シルトである。柱内埋土はほぼ水平堆積で、おおまかに上部が灰黄色系砂質土、下部が暗黄褐色系細砂混じり粘土である。柱内第3層には曲物の残片がみられた。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器があり、土師器皿（1・2）・土師器羽釜（6～8）・瓦器碗（3～5）を図化した。瓦器碗（4）は見込みの暗文模様や体部内面のヘラミガキが細いという特徴から大和型と考えられる。5は底部に粘土接合痕がみられ、この部分の内側が盛り上がっている。これらの土器の時期は12世紀後半から13世紀初頭に比定されよう。



第5図 S E 101平面・断面図 (S = 1/20)

S E 102

5 A 区に位置し、検出面の標高は約7.9mである。掘方平面形は偏円形で、規模は東西約1.5m・南北約1.4mを測る。検出面からの深さは約1.3mを測る。掘方断面の形状は逆凸形を呈し、深さ約1.1mまでをほぼ垂直に掘り、底部は曲物を設置する部分を直径約0.6m、深さ約0.2mにさらに掘り下げている。曲物は中央よりやや北東部に位置し、最下段のみが遺存している。直径約40cmで、上部は欠損し、底から約10cmが残存している。

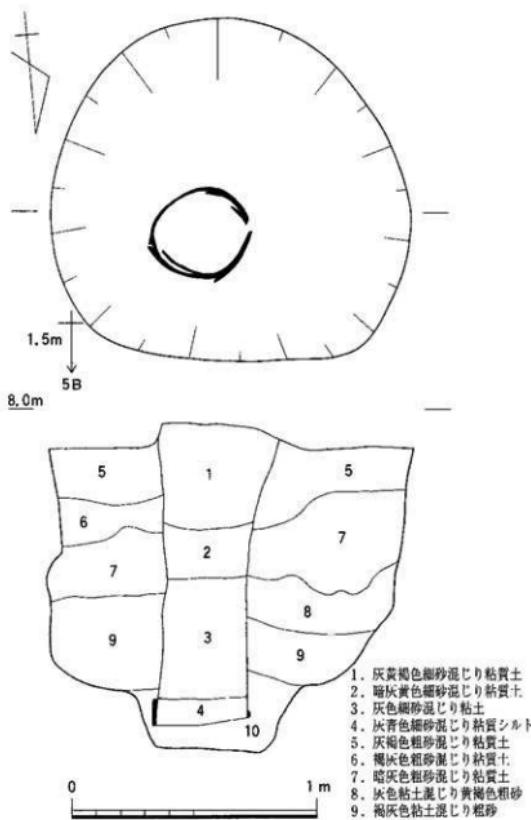
掘方埋土は上部が灰褐色系粗砂混じり粘質土、下部が褐灰色系の粘土ブロックを含む粗砂、最下部が灰青色細砂である。枠内埋土は上部が暗灰黃褐色系細砂混じり粘質土、下部が灰色系細砂混じり粘土～粘質シルトで、ほぼ水平堆積である。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器があり、土師器皿(9)・瓦器椀(10)・土師器羽釜(11)を同化した。口縁部が広がる土師器羽釜(11)は口縁部ヨコナデ、体部内面ナデで、外面全面に炭化物が付着している。長原遺跡土器溜¹や、当地の南東約70mの当遺跡第20次調査 S E 1²に類例がある。土師器皿(9)は退化した「て」の字状口縁を呈するもので、瓦器椀(10)とともに時期は12世紀初頭頃に比定される。

S E 103

5 A 区、S E 102の南約0.5mに近接して検出された曲物井戸である。掘方平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約1.35mを測る。検出面の標高は約7.95mで、検出面からの深さは約1.3mである。掘方断面はV字に近い逆台形を呈し、これはS E 101に類似する。曲物は掘方のほぼ中央に位置し、最下段のみが遺存している。直径約37cmを測り、上部は欠損して底から約13cmが残存している。

埋土の上部は、井戸廃絶後の埋め戻しに伴うと考えられる部分で、上から暗灰黄色細砂混じり



第6図 S E 102平面・断面図 (S = 1/20)

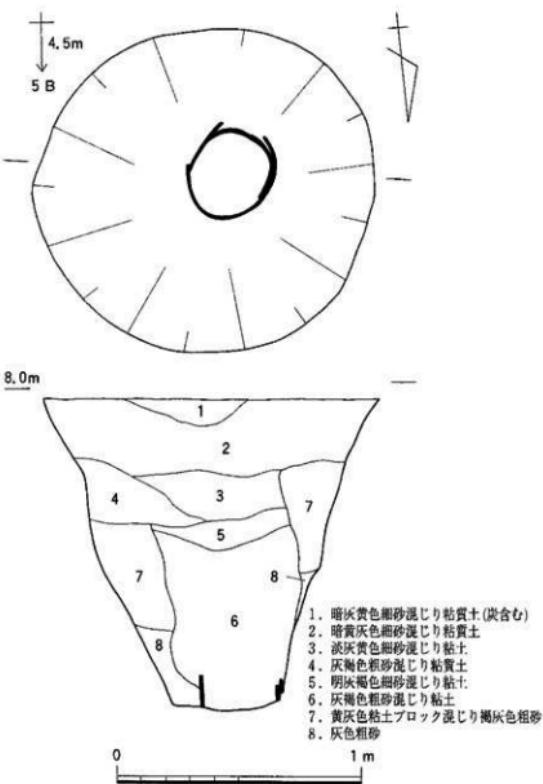
粘質土（炭含む）・暗黃灰色細砂混じり砂質土・淡灰黃色細砂混じり粘土・灰褐色粗砂混じり粘質土である。掘方埋土は上部が黄灰色粘土ブロック混じり褐灰色粗砂、下部が灰色粗砂である。柱内埋土はおおまかにみて灰褐色系砂混じり粘土である。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・平瓦があり、土師器皿（12）・瓦器椀（13）・平瓦（15）を図化した。土師器皿（12）は完形で、淡灰褐色を呈する。瓦器椀（13）は外面明灰色、内面黒灰色を呈する。平瓦（15）は須恵質で、調整は凹面布目、凸面縄目タタキである。これらの土器の時期は12世紀前半頃までに比定されよう。他に古墳時代の須恵器甕（14）がある。

S E 104

7 A～B 区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約7.9mである。掘方平面形は偏円形で、規模は直径約1.6m～1.7mを測る。断割りの際、底部が崩壊したため明確ではないが、検出面からの深さは約1.2mを測る。掘方は二段掘りで、深さ約0.3mまでを皿状に掘り、さらに曲物設置部分を掘り下げている。曲物は掘方のほぼ中央に位置し、直径約40cmを測るもので、最下段のみが遺存している。埋土はおおまかにみて、掘方は灰褐色系砂混じり砂質土、柱内は上部が黄灰褐色系細砂混じり砂質土、下部が暗灰黃褐色系粘土～粘質シルトで、水平堆積である。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・瓦があり、土師器皿（16～18）・瓦器椀（19～21）・瓦器皿（22）・黒色土器椀（23）・土師器甕（24・25）・丸瓦（26）・土師器壺（27）を図化した。土師器皿は16・17が淡灰褐色、18が灰白色を呈する。黒色土器椀（23）はA類で、外面は口縁部の上から約1cmが黒色を呈している。10世紀代に比定されるものであろう。瓦器椀（19）は、直立する口縁部から尖り気味の端部という形態の特徴からみて楠葉型かも知れない。丸瓦（26）の調整は凹面布目で側部付近に縦痕がみられ、凸面縄目タタキのナデ消しである。焼成は不良で、凹面灰褐色、凸面明褐色を呈する。これらの土器の時期は12世紀前半頃までに収ま



第7図 S E 103平面・断面図 (S = 1 / 20)

るものである。

S E 105

7 A 区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約7.9mである。掘方平面形は橢円形で、規模は東西約0.85m・南北約1.4mを測る。なお当初は土坑であると認識しており、この時点では断面逆台形で、深さは0.8m、埋土は暗灰黄色粗砂～礫混じり砂質土の単一層というものであった。その後の断ち割りの結果、下部で曲物の存在を確認したものの直後に崩壊してしまい、図面作成・写真撮影等は実施できなかった。曲物は他の井戸と同様最下段のみが遺存していた。

出土遺物には時期不明の土師器片がある。

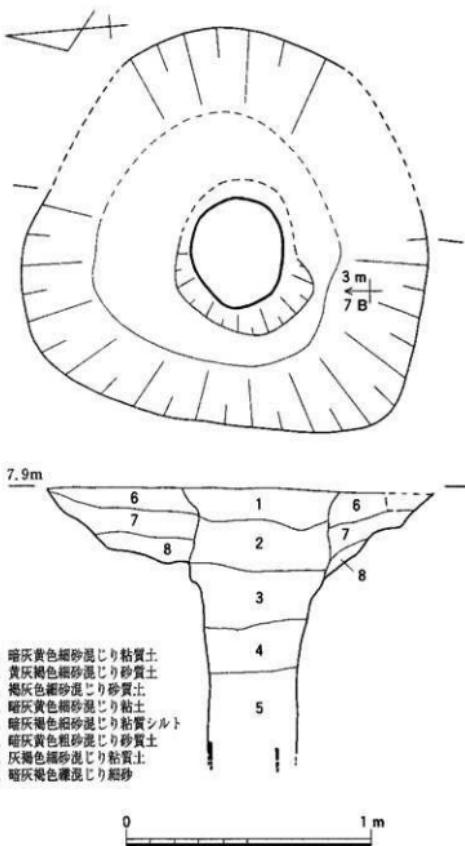
S E 106

8 B 区、調査区南東角で掘方の一部を検出した曲物井戸で、断面観察で標高約8.2mの第4層上面から掘り込まれていることが確認できる。掘方平面形は検出部分の形状からみて円形を呈すると考えられ、規模は曲物の位置を中心として直径1.8m程度に復元できる。掘方は二段

掘りで、検出面からの深さは約1.5mを測る。深さ約1.1mまでを断面逆台形に掘り、さらに曲物設置部分を掘り下げるもので、S E 102に類似している。曲物は直径30cm以上、高さ約30cmを測るもので、最下段のみが遺存している。

埋土は最下層の淡灰黄色粗砂混じり粘土が本来の掘方埋土である。上部は井戸廃絶後の堆積土と捉えられ、下位は傾斜堆積が認められる。なお埋土中の第5～6層の曲物上位に拳大～人頭大の石が多く含まれており、井戸枠上部が石組み構造であった可能性が考えられよう。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・綠釉陶器があり、土師器皿(28)・瓦器椀(30・31)・瓦器皿(29)・綠釉皿(32)・須恵器鉢(33)・須恵器杯身(34)を図化した。瓦器椀(30)は



第8図 S E 104平面・断面図 (S = 1/20)

体部～口縁部間外面に沈線が巡り、また端部内面にも沈線が巡る可能性がある。緑釉皿(32)は高台端面のみ無釉である。

なお第14図の瓦器碗・白磁碗・須恵器甕(52～54)は調査区南東角での側溝掘削時出土で、当井戸の遺物と考えられる。これらの土器の時期は12世紀中葉までに比定される。他に須恵器鉢(33)は飛鳥～奈良時代、須恵器杯身(34)は6世紀代のものである。

これら6基の井戸についてまとめておく。いずれも井戸枠として曲物が使用されているもので、共通する特徴としては最下段の曲物のみが遺存していること、また井戸底部の標高が約6.7mを測ることがいえる。上部の曲物は井戸廃絶の際に取り除かれたものか、あるいは腐食により検出されなかったものもあると考えられる。掘方断面の形状をみるとS E 101とS E 103、S E 102とS E 106が類似しており、井戸構築に際する技法の違いが明確であるといえよう。この構築技法の違いは井戸の時期差や工人の違いを反映しているのかもしれない。

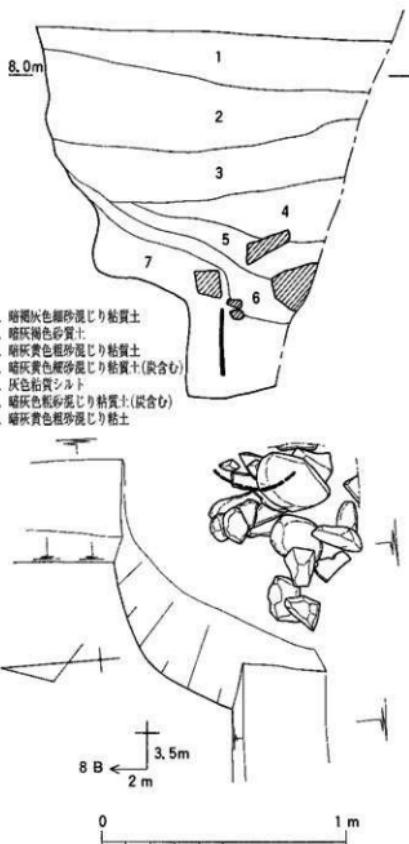
土坑(S K)

主に調査区南半で検出した。平面形では長円形を呈するものが多い。法量等の詳細は表2にまとめた。

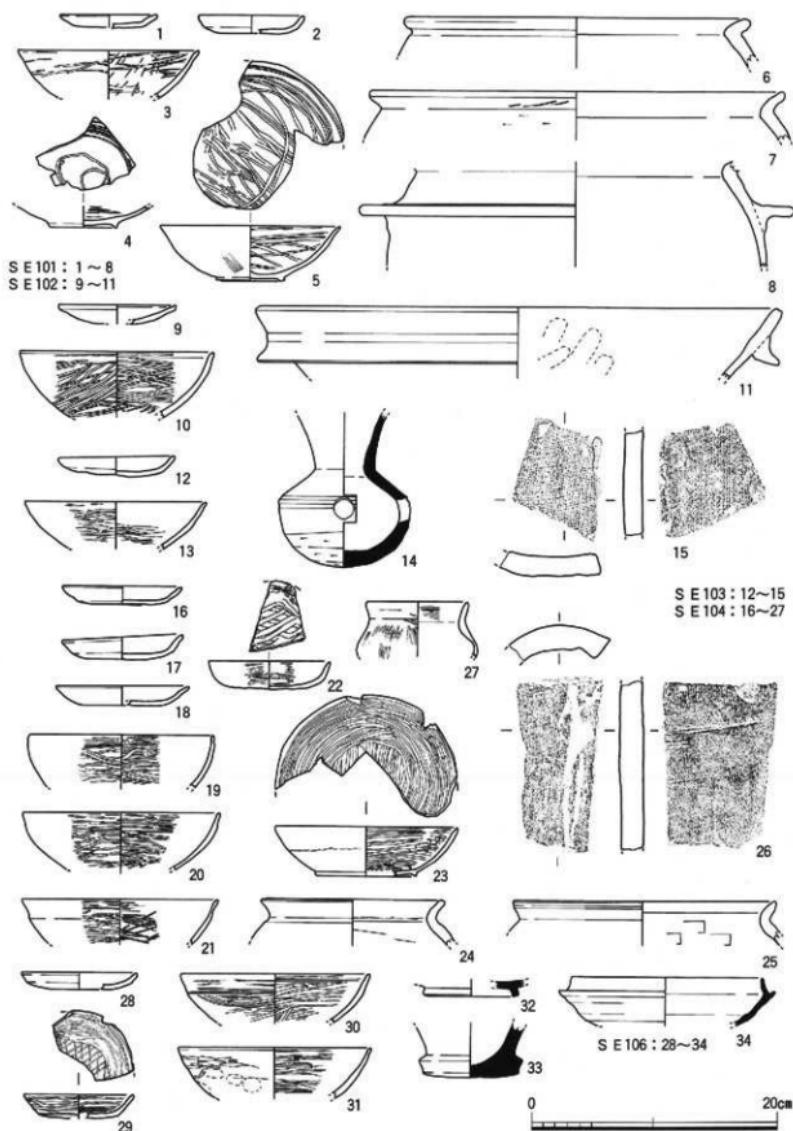
出土遺物には5世紀末頃から平安時代末頃にわたる土器があるが小片が多く、団化したものはS K 105からの製塩土器(39)、S K 106・107からの須恵器甕(35～38)のみである。製塩土器(39)は後述するS K 209出土品での分類の1A類にあたり、内面調整は横方向の板ナデである。須恵器甕(36)の天井部外面上には平行線状のヘラ記号が施されている。

溝(S D)

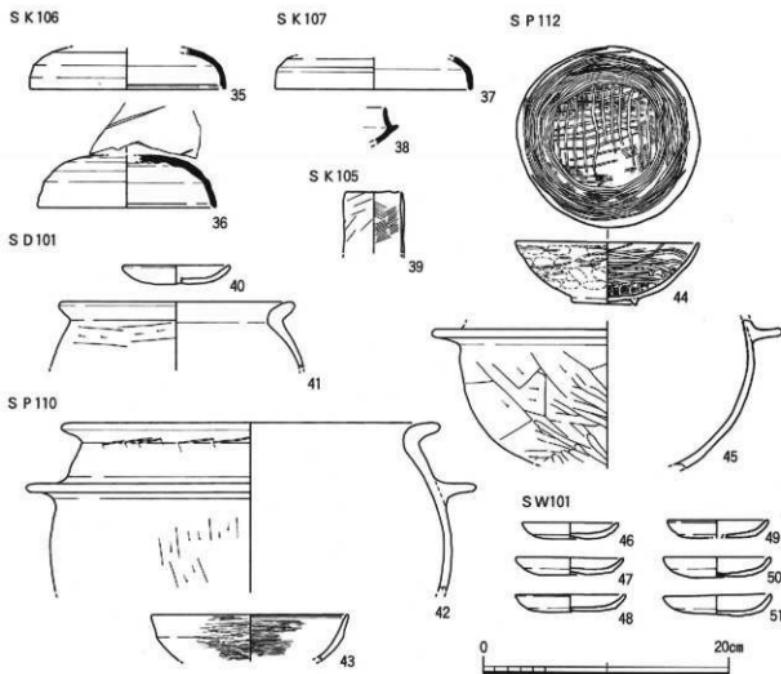
S A区では南北・東西方向の直線的に伸びる交差する溝(S D 102～105)がみられ、埋土や方向性・規模等からS D 106も同じ性格の溝と考えられる。S D 101・107はやや方向が異なり、他



第9図 S E 106平面・断面図 (S = 1/20)



第10図 第1次面井戸出土遺物 (S = 1 / 4)



第11図 第1次面遺構出土遺物 (S=1/4)

の溝とは時期差があるのであろう。S D 107はS E 104・S K 105等を切るものである。出土遺物は小片が多く、図化したものはS D 101の土師器皿(40)・羽釜(41)のみである。

法量等は表3にまとめた。

| S K | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 埋 土 | 遺 物 |
|-----|-----------|-----|-----------|----|-------------------------|---------------------------|
| 101 | 1 B ~ 2 B | 不定形 | 190以上×356 | 24 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器(~飛鳥) |
| 102 | 4 A | 不定形 | 52以上×89 | 33 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器 |
| 103 | 4 A ~ 5 A | 円 形 | 80×73 | 23 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器鉢 |
| 104 | 5 B | 不定形 | 119×38 | 8 | 暗黄灰色粘質土 | |
| 105 | 5 B | 不定形 | 280×220 | 21 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器・製塙土器・平安末瓦器輪39 |
| 106 | 6 A | 長円形 | 131×73 | 19 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器(5~6 C) 35・36 |
| 107 | 6 A | 長円形 | 145×47 | 34 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器・製塙土器(5~6 C) 37・38 |
| 108 | 6 A | 横円形 | 67×47 | 19 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・瓦器 |
| 109 | 7 B | 長円形 | 193×65 | 62 | 暗黄黄色砂礫混じり粘質土 (ブロック状) | 土師器・須恵器・瓦器・瓦(平安末) |
| 110 | 7 A | 長円形 | 121×55 | 9 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器 |
| 111 | 7 B | 長円形 | 90×43 | 9 | 暗黄灰色粘質土 | |
| 112 | 7 B | 不定形 | 143×83 | 48 | 暗黄黄色細砂混じり粘質土 (炭含む) | 土師器・須恵器・瓦器 |
| 113 | 7 A | 不定形 | 251以上×110 | 16 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器(6 C) |
| 114 | 8 A | 不定形 | 99以上×60 | 15 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・瓦器 |

表2 第1次面土坑(S K 101~114)法量表(cm)

I 小坂合遺跡第26次調査 (K S 93-26)

| S D | 地区 | 長さ | 幅 | 深さ | 堆 土 | 遺 物 |
|-----|-----------|-------|--------|----|--------------|-----------------------|
| 101 | 2 A | 485 | 51~105 | 15 | 灰褐色砂混じり粘質土 | 土師器羽釜・須恵器 (平安末) 40・41 |
| 102 | 3 A ~ 3 B | 570以上 | 10~44 | 17 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 103 | 3 A ~ 4 A | 400 | 25~37 | 9 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器 (5 C ~奈良) |
| 104 | 3 A | 320 | 32~66 | 12 | 暗黄灰色粘質土 | 土師器・須恵器 (7 ~8 C) |
| 105 | 3 A | 99 | 30~34 | 12 | 暗黄灰色粘質土 | 須恵器 |
| 106 | 5 B | 325以上 | 20~46 | 9 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | |
| 107 | 5 B ~ 7 B | 1245 | 32~57 | 8 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 (~平安) |

表3 第1次面溝 (S D 101~107) 法量表 (cm)

ピット (S P)

土坑と同様の状況で、調査区中央から北部にはみられず南部で検出した。建物を構成するよう規則性は見いだせないが、S E 104の周辺に集中していることから、有機的に関連していたピットもある可能性がある。法量・出土遺物等は表3にまとめた。

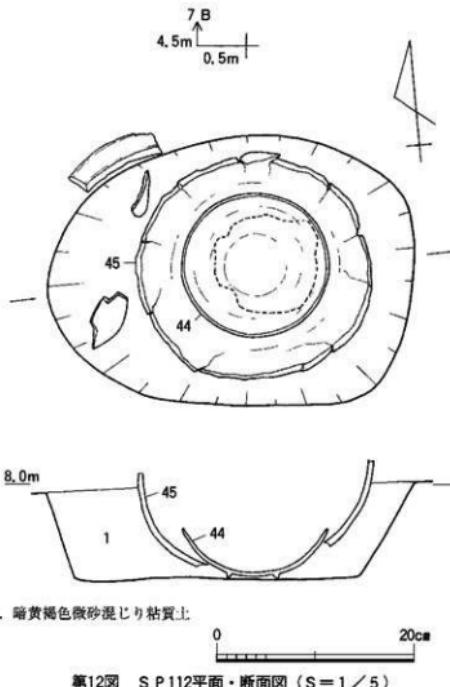
出土遺物は後述するS P 112のもの以外は小片がほとんどで、図化したのはS P 110の土師器羽釜・瓦器椀 (42・43) のみである。瓦器椀 (43) は口縁端部内面に沈線が巡り、内面の圈線状ヘラミガキは細く規則的に平行に施されるもので、大和型の特徴を備えている。時期は12世紀前半頃に比定されよう。

S P 112

7 B 区に位置する土器埋納ピットで、検出面の標高は約8.0mを測る。掘方平面形は37cm×28cmの稍円形を呈し、検出面からの深さ約26cmを測る。断面逆台形で、埋土は褐灰色細砂混じり粘質土である。

内部には口縁部から鍔部、及び底部中央を直径約10cmの円形に欠く小形の土師器羽釜 (45) が正位で納められ、またその中には完形の瓦器椀 (44) が正位で据えられている。羽釜の鍔部は一部分のみがやや離れて出土しており、このことから口縁部については不明であるが、少なくとも鍔部は埋納時には遺存しており、後世に削平されたということが窺えよう。遺構の性格は地鎮祭祀に関連するものと考えられる。

瓦器椀 (44) は直径14.9cm・器高5.0cmを測る。調整は内面にハ



第12図 S P 112平面・断面図 (S = 1/5)

ケが残り、見込み格子状暗文で、内面の圈線状ヘラミガキはやや粗くなっている。外面のヘラミガキも粗である。色調は淡灰色を呈する。土器器羽釜(45)は底体部外面に煤が付着している。土器の特徴から時期は平安時代末に比定されよう。

| S P | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 裡 土 | 遺 物 |
|-----|-----|-----|-------|----|-------------------|-------------------|
| 101 | 7 A | 偏円形 | 42×31 | 19 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器 |
| 102 | 7 A | 長円形 | 65×28 | 19 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・瓦器(平安末) |
| 103 | 7 A | 偏円形 | 54×34 | 16 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器 |
| 104 | 7 A | 稍円形 | 31×24 | 8 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器 |
| 105 | 7 B | 円 形 | 27×23 | 22 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土(炭含む) | 土器器・須恵器・瓦器 |
| 106 | 7 B | 円 形 | 31×27 | 53 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・須恵器・瓦器 |
| 107 | 7 B | 円 形 | 40×28 | 11 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・瓦器 |
| 108 | 7 B | 稍円形 | 40×24 | 16 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・瓦器 |
| 109 | 7 B | 偏円形 | 55×45 | 13 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・丸器 |
| 110 | 7 B | 稍円形 | 65×42 | 27 | 黃灰色微砂混じり粘質土 | 土器器羽釜・大和型瓦器碗42・43 |
| 111 | 7 B | 偏円形 | 33×28 | 12 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器 |
| 112 | 7 B | 偏円形 | 37×28 | 26 | 褐灰色細砂混じり粘質土 | 土器器羽釜・瓦器44・45 |
| 113 | 7 B | 偏円形 | 30×22 | 12 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器皿 |
| 114 | 7 B | 偏円形 | 21×15 | 8 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土器器・焼土 |
| 115 | 7 B | 稍円形 | 23×16 | 13 | 暗褐色微砂混じり粘質土 | 瓦器 |

表4 第1次面ピット(S P 101~115)法量表(cm)

土器集積(SW)

SW101

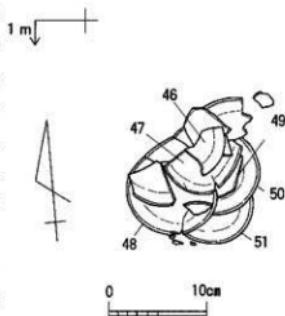
2B区、SE101掘方の東約0.5mで検出した土器器小皿の集積である。土器器小皿6枚(上から46~51)を正位で積み重ねたもので、掘方はみられない。層位的には第5層上面から第4層下部のもので、検出レベルは標高約8.1mを測る。南に約26m地点のS P 112と同じく地鎮祭祀に関連するものと考えられ、SE101構築に伴うものである可能性もある。

46~51は口径7.8cm~9.0cm、調整は口縁部~内面ヨコナデ、底部外面ナデア、49は底部内面にナデを加えている。色調は46・48・49が淡褐色系、他が明褐色系を呈する。

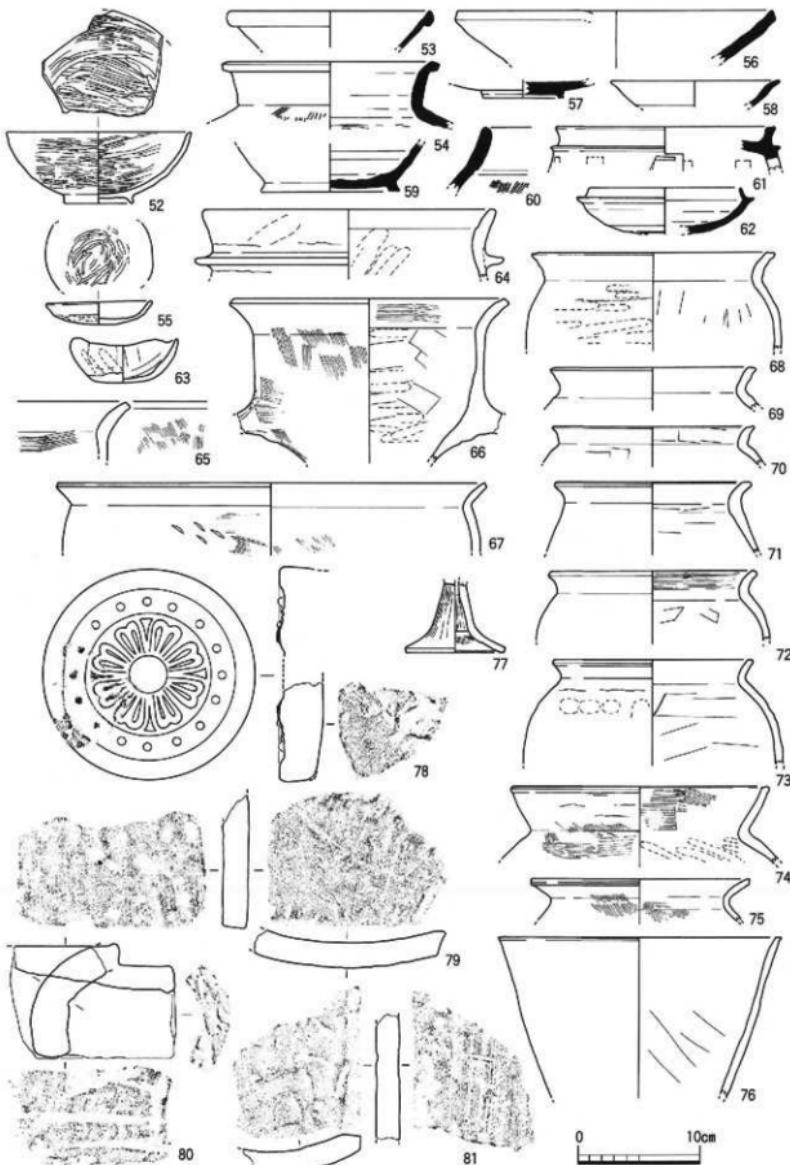
周辺での類例としては、南東約80mの第20次調査におけるSW1がある。これは同様に土器器小皿4枚を正位で重ねたもので、掘方はみられず、検出レベルはやや低く標高約7.6mを測る。また小皿の調整・色調等の特徴も類似している。

第4層出土遺物

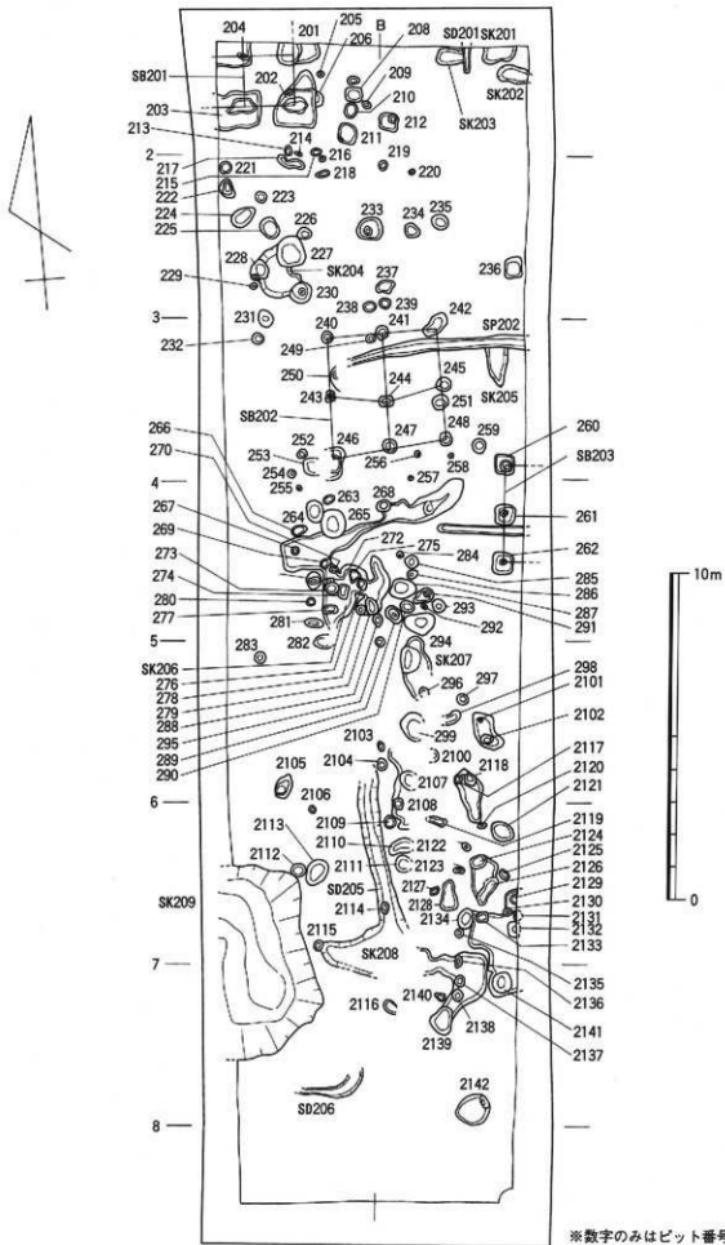
古墳時代中期から平安時代の遺物が出土している(52~81)。なお52~54はSE106の遺物の可能性がある。瓦器碗(52)は内外面を密に、見込みも一方向に密にヘラミガキし、11世紀末葉に比定されるものである。東播系鉢(56)は片口を有する。綠釉陶器皿(57)は底部が分厚く、見込みに1条の沈線が巡る。釉は淡灰緑色で薄く、底部高台際は無釉である。須恵器壺(59)は底部中央に糸切り痕が残る。高台外面には白色~明青色の濁った釉が溜っている。須恵器内面鏡(61)は圈足鏡に分類され、長方形のスカシを有し、堤の有無は不明である。土器器小鉢(63)



第13図 SW101平面図(S=1/5)



第14図 第4層出土遺物 (S=1/4)



*数字のみはピット番号

第15図 第2次面平面図 ($S = 1/150$)

は手づくね成形で、外面に径2cm程度の黒斑を有する。土師器把手付鍋(66)は口縁部の残存が極小で、形態的には傾きにやや疑問が残る。土師器羽釜(64)とともに生駒西麓産の胎土である。土師器甕は、67~73が奈良~平安時代、74・75が古墳時代のもので、外面調整は前者がナデ、後者がハケである。72・73は同一個体の可能性がある。軒丸瓦(78)は複弁八葉蓮華文軒丸瓦に分類されるもので、瓦当径約17.6cm、珠文16個に復元される。二次焼成を受けているようである。特徴的なこととして撮形の間弁を蓮弁一つおきに配していると思われること、また瓦当裏面の中央に布目が認められることが挙げられ、これらの特徴から京都府栗柄野瓦窯出土品と同意匠である可能性がある。

(第2次面)

第5層上面で、掘立柱建物3棟(S B 201~203)・土坑9基(S K 201~209)・溝6条(S D 201~206)・ピット142個(S P 201~2142)を検出した。これらの遺構の時期は、古墳時代中期後半から後期、平安時代に比定される。

掘立柱建物(S B)

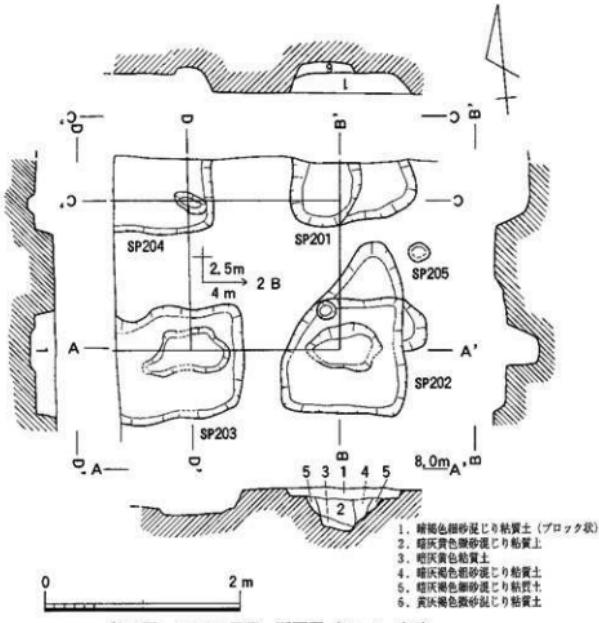
ピットの配置等から建物を復元したのはS B 201~203の3棟である。3棟はいずれもほぼ方位に沿って構築されているといえるが、柱掘方の規模や形状等の様相は異なっている。なお全容のわかるものはS B 202のみである。また4A~B区や6B区のようにピットの集中する部分があり、これらの中には建物を構成していた柱穴もあると思われるが(S P 2111~2119-2122-2125~2127-2134等)。

明確にはできなかった。

S B 201

調査区の北西角、1A区で建物南東部を検出した。検出レベルは標高約7.8mを測る。S P 201~204で構成され、総柱の建物と考えられる。建物の方向はN-2°-Eで、柱掘方は平面ほぼ方形を呈し、一辺約1.2m・深さ約0.4mを測る大規模なもので、柱間距離は約1.7mを測る。

遺物はS P 201・202・203から古墳時代中期末~後期に比定される土師器・須恵器片が出土している。図化したものはS P 201・203からの須恵



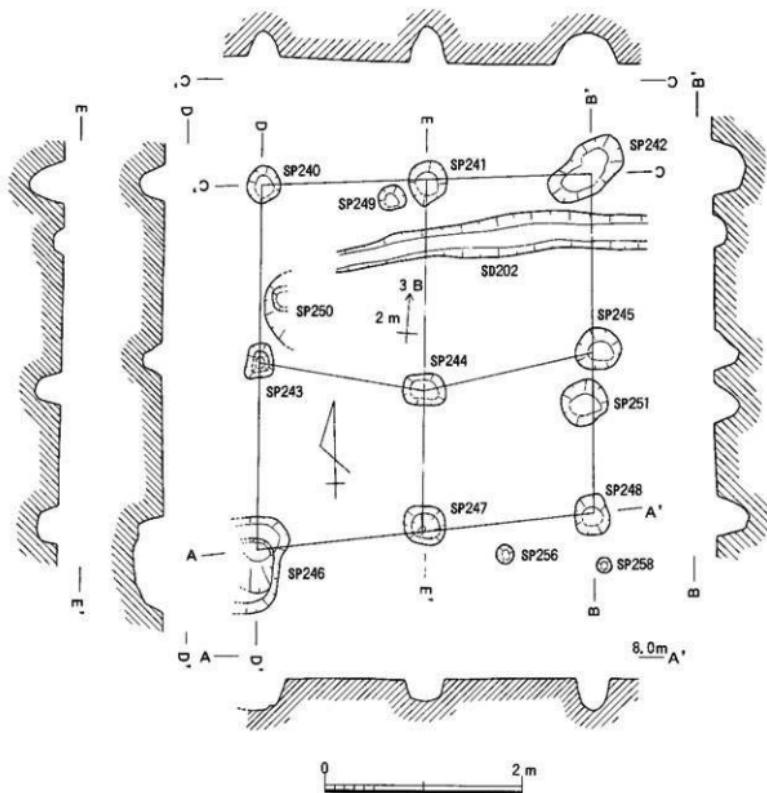
第16図 S B 201平面・断面図 (S = 1/50)

器杯（247～249）があり、いずれも6世紀末頃に比定されるものである。249は底部外面に自然釉がかかる。

S B 202

3 A～B区で検出した2間×2間の総柱の建物で、検出レベルは標高約7.8mを測る。S P 240～248で構成され、建物の方向はN-1°-Eである。規模は南北約3.6m・東西約3.4mを測る。柱掘方は径約0.4mの円形からやや方形に近いものもあり、柱間距離は約1.7mを測る。中央のピット（S P 244）は中心よりやや南寄りに位置し、南西角がやや鋭角気味である。

遺物はS P 242・244・246・247・248から土師器・須恵器片が出土しているが、図化したものはS P 246からの土師器壺（252）のみである。口縁端部形態は布留式壺の系譜上のものと思われ、古墳時代中期頃に比定されよう。



第17図 S B 202平面・断面図 (S = 1/50)

SB 203

3~4B区で建物西辺を検出した。検出レベルは約7.8mを測る。SP 260~262で構成され、南北は2間(約3.0m)、東西の規模は不明である。建物の方向はN-6°-Eである。柱掘方は平面隅丸方形を呈し、規模は一辺約0.6mで規格性がある。深さは北西角にあたるSP 260が浅く約15cm、他は約40cmを測り、柱間距離は約1.5mを測る。各ピットから古墳時代中期末~後期の土師器・須恵器片が出土しているが、図化したものはSP 261からの須恵器短頸壺(253)のみである。内面および口縁部~肩部に灰がかかる。

土坑(S K)

S K 202・209は埋土中に炭・焼土を多量に含んでいる点で共通するが、規模等から性格は異なるものであろう。S K 204・206はピットが密集する部分に重複する位置関係にあり、土坑というよりはピットの掘削・廃絶時に地面が改変を受けた部分と捉えられよう。S K 208は東側でSD 205に連続しており、埋土も同一のもので、溝であった可能性がある。

法量等は表4にまとめた。

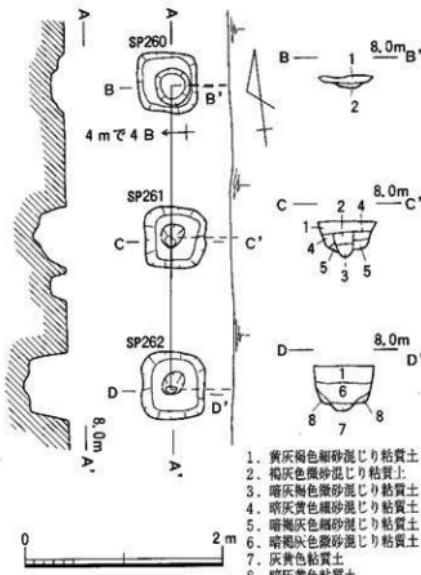
遺物は古墳時代中期末~後期の土器が出土している。SK 204からの土師器鉢(241)は明褐色を呈し、底部外面をヘラケズリしている。SK 206からの壺(242)は須恵器と考えられるが、砂粒を多く含む胎土で、時期的には古墳時代を下るものであろう。SK 208からの土師器壺(244)は、頸部の長さからみるとSK 209出土の長頸壺・短頸壺の中間的なものである。

SK 209

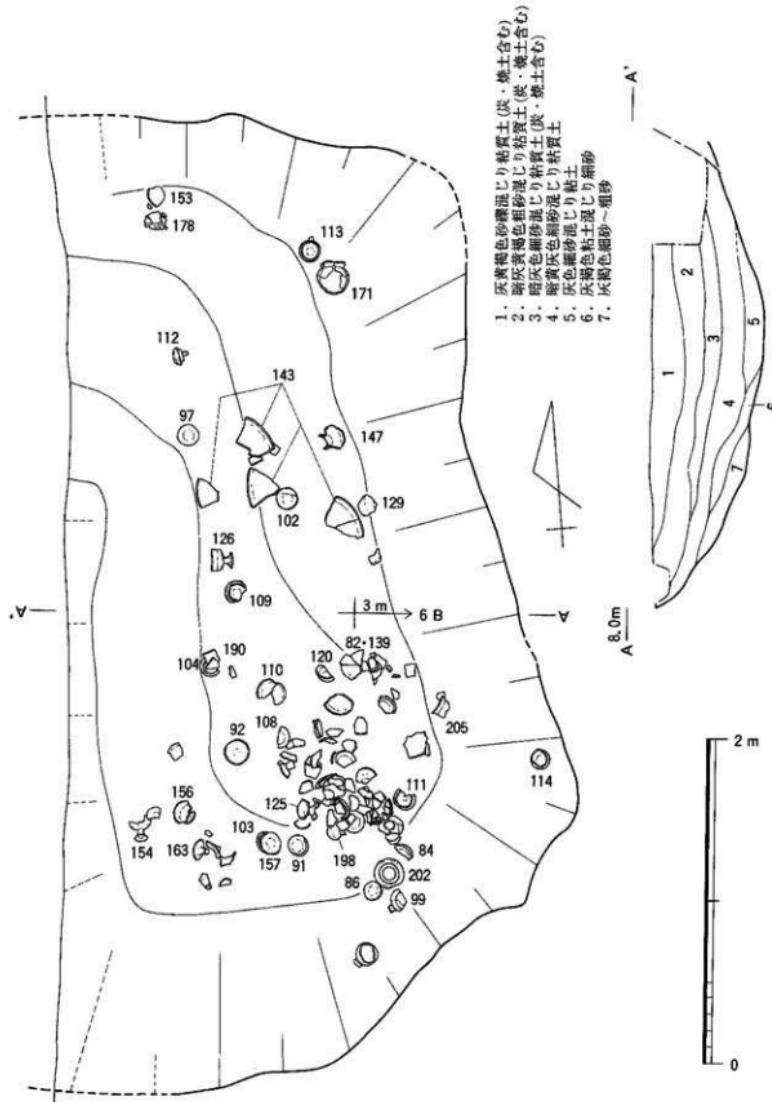
調査区の南西部、6~7A区で検出した。規模は南北約6.0m・東西3.2m以上・深さ約0.7mを測る。西部は調査区外に至るが、底面の傾斜状況からみて東西幅は4.0m程度と考えられ、平面形は長方形に近いものと思われる。断面形状は皿状を呈し、埋土は大まかには上層が灰黄褐色~暗灰色の粗砂混じり粘質土、下層が黄灰色~灰色の細砂混じり粘土で、上層には炭・焼土塊が多く含まれている。

遺物の出土状況は底部の傾斜に沿っており、南部では集中する部分も認められた。古墳時代中期後半頃に比定される土器が多量に出土している。なお動物の骨も数点みられた。

出土遺物には須恵器・土師器・製塙土器・石器がある(82~240)。器種別の様相としては、須恵器では杯類の占める割合が高く、完形品やそれに近いものも含まれている。これに対して甕や



第18図 SB 203平面・断面図 (S=1/50)



第19図 SK 209平面・断面図 ($S = 1/30$)

壺は破片が多く、また口縁部の破片に比して体部の破片は非常に少ない。土師器は多器種にわたり、壺が多いという量的な片寄りは一般的なものと思われる。

須恵器杯蓋（82～102）は、82のみが口縁端部を丸く收め、他は内面に段を有するものや、平面・凹面を成すものである。天井部の回転ヘラケズリは稜付近まで及んでいる。焼成は84がやや不良で、色調では86が灰褐色、102が灰白色を呈しており、これら3点を除いて天井部に灰がかかっている。86・92・97がほぼ完形品である。

杯身（104～118）は、103・104が底部の平坦な形状を呈し、やや古い様相を呈しているといえる。103は外面の回転ヘラケズリに一部ノッキングが認められる。104は口縁端部内面に凹線を巡らせる。色調では110が内面褐灰色を呈し、104・115の底部外面には火襷が認められる。口縁端部を分類すると、内傾する面を成すもの（105～109）、丸く收めるもの（110～112・118）、内傾する段を成すもの（103・113～117）がある。口縁部の形状では直線的なもの（105等）、外湾気味なもの（108等）、屈曲するもの（116）がある。105・113がほぼ完形品である。

高杯は有蓋高杯（119～122）、有蓋高杯（123）、無蓋高杯（124～126）、脚部（127）、大型高杯（130・131）がある。有蓋高杯は確認できたものが1点（123）のみであった。蓋をして焼成している。蓋（119～122）はいずれも天井部に灰がかぶり、119・122は焼成時に別個体を上に重ねている。122はその天井部の自然釉の掛かり方からみて、127のような3方向にスカシを有する高杯を重ねていたことが窺える。無蓋高杯では124のみが杯部内面に灰がかぶる。125・127は3方向にそれぞれ円形スカシ・長方形スカシを有する。大型高杯（130・131）も杯部内面に自然釉が掛かり、131は同一形態の高杯を重ねて焼成したと考えられる。131は3方向に長方形スカシを有し、スカシ窓の縁は面取りされている。灰黒色を呈し、焼成時の歪みが大きい。

把手付椀（128）・大型椀（129）は、いずれも体部下位静止ヘラケズリで、底部はナデあるいは未調整である。

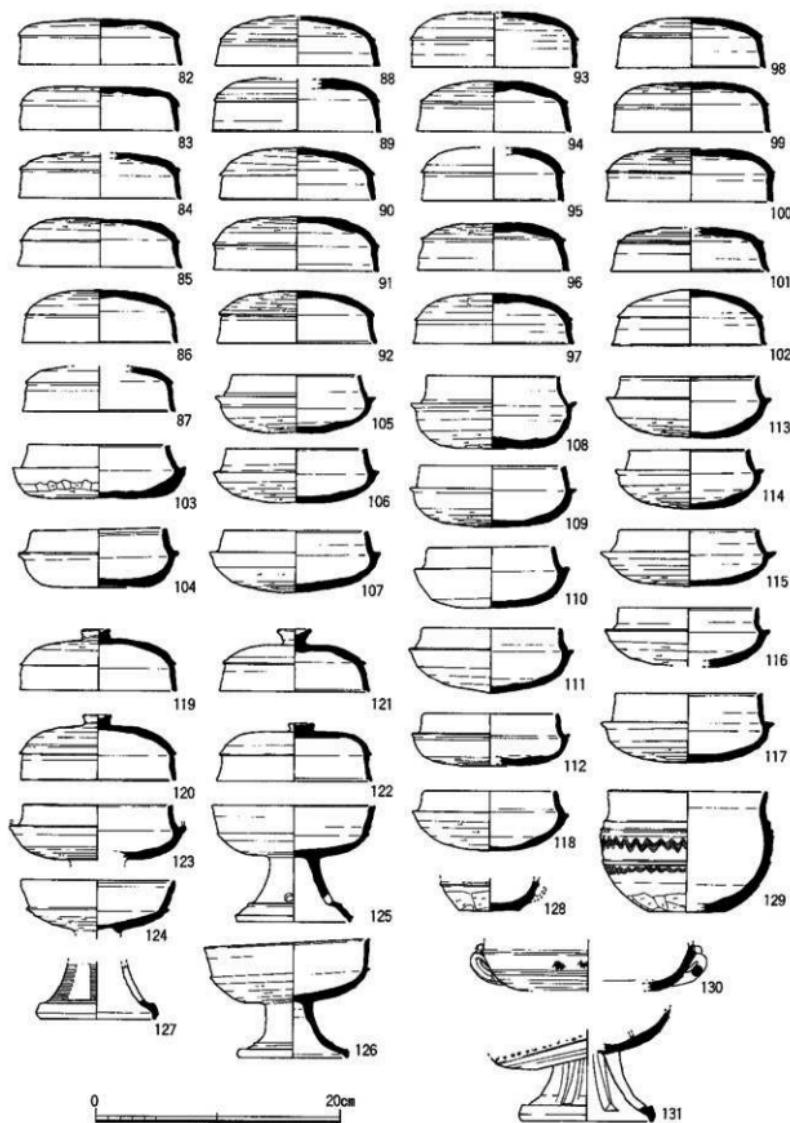
132・133は趣とを考えられる。明確に趣体部といえる個体は出土していない。

広口壺（135～140）はいずれも口縁部に波状文を施す。139・140は底体部平行タタキで、上位はナデ消している。141・142は口縁部外面に灰がかぶる。

器台（143）は杯部のみがほぼ完存するものである。脚部の破片は一点も出土しておらず、また杯底部外面が摩耗していることから、脚部が欠損したのち杯部のみで使用していたのかもしれない。内面も摩耗し、口縁端部には細かい欠けが多く認められる。杯底部の調整は、外面平行タタキ、内面同心円タタキである。外面の装飾は上位が4段の波状文、下位が櫛状工具による4段の刺突文である。波状文は非常に纖細で、上段から下段に、向かって右から左に螺旋状に一気に施されている。脚接合部分には接合強化のため、圓錐状及びX印状のヘラによる沈線がみられる。

土師器壺（144～148）は、144～147が長頸壺、148が短頸壺に分類しえる。長頸壺4点はほぼ同一形態で、法量的にも近似するものである。色調は明褐色～褐色であるが、やや頸部径の小さい144のみ淡褐色を呈し、赤色酸化粒を多く含んでいる。外面調整は144がヘラミガキ、146・147がハケ、145はハケ後口縁部にジグザグ状のヘラミガキを加えている。体部内面は下位ヘラケズリ、上位ナデである。146は外面がやや焼けている。短頸壺（148）は、口縁部外面ハケで、内面に2条の凹線が巡る。色調は明褐色を呈する。

高杯（149～166）は杯部形態から3類に分類できる。1類は体部から内湾して直立する口縁部

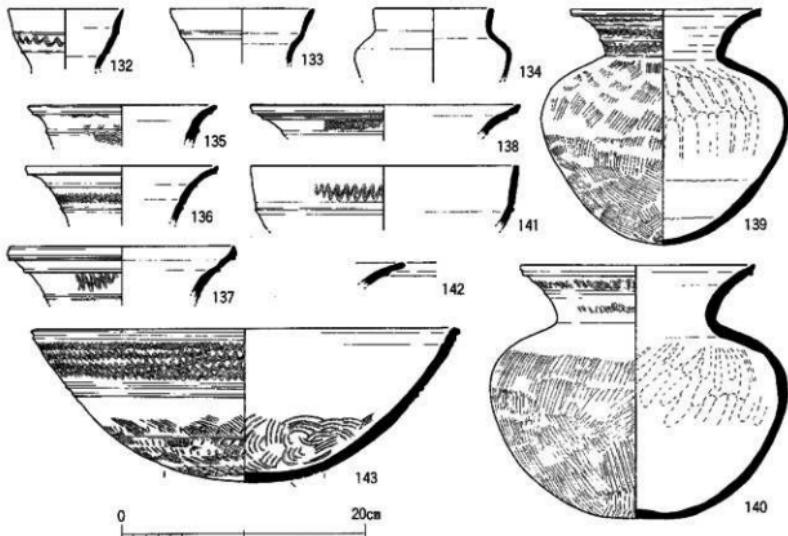


第20図 SK 209出土遺物① (S = 1/4)

に至るもの（149～157）で、さらに体部が直線的なもの（149）と丸味をもつもの（150～157）に分けられる。2類は体部から口縁部が上外方に開くもの（158・166）である。166は典型的な古墳時代前期の高杯で、混入と考えられる。3類は1類・2類の口縁端部が短く外上方に開くものと捉えられ（159～161）、体部～口縁部の器形的には159・161は1類、160は2類である。数量的には1類が多くを占める。口縁端部は丸く收めるものが多く、156のみが凹線を施している。調整は、杯部ではハケ・ナデがあり、1・2類には内面に放射状暗文を施すものがある。脚柱部はいずれも外面が面取りされているようである。内面は未調整でしぼり目が明瞭に残るものや、ナデしているがしぼり目が残るというものが多く、やや趣を異にする165のみヘラケズリが施される。裾部はナデで、内面ハケのものが多い。脚部にスカシを施すものは少なく、図化した157の他に1点が確認されたのみであり、出土量全体からみると1割程度と思われる。157の円孔スカシは二方向で、一方は貫通していない。色調は壺と同様に明褐色～褐色で、やや口径の大きい153のみが淡褐色を呈し赤色酸化粒を多く含むもので、長頸壺（144）に類似している。154・160は口縁部外面に黒斑を有し、150・152の杯部内面は煤の付着により全体に暗褐色を呈している。

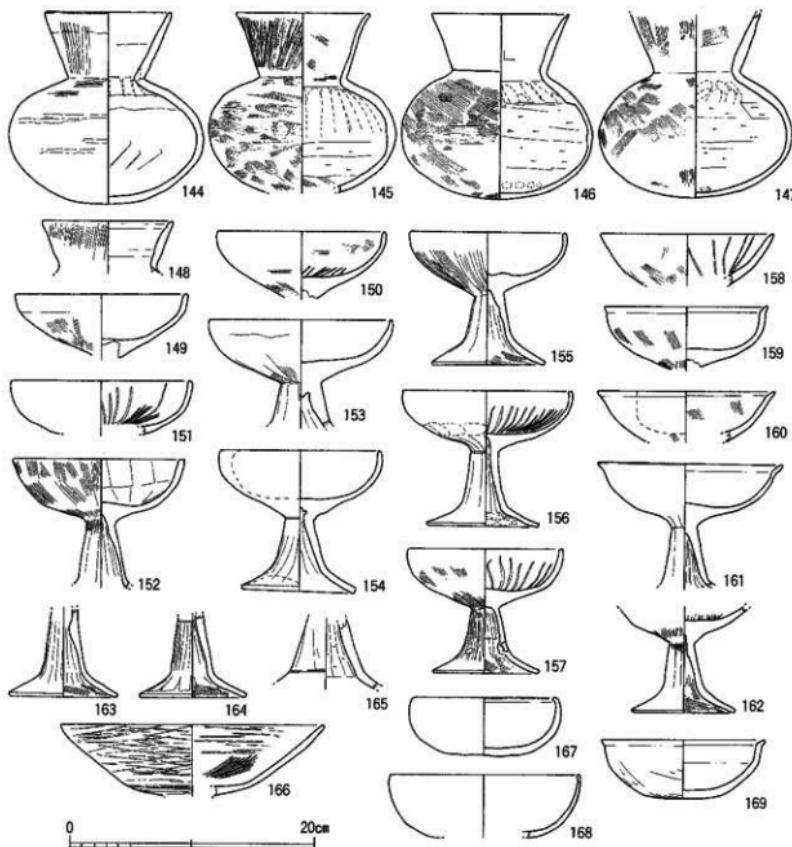
杯（167～169）は、高杯の杯部と共に通する形態を呈するものであり、167・168が1類、169が3類といえよう。169は底体部外面ヘラケズリである。色調は167・169が高杯と同等に明褐色、168は淡灰褐色である。

壺（170～208）は全容を知れるものが少ないが、体部外面はハケのものがほとんどで、187は下半が平行タタキである。また172もハケに先行する平行タタキが認められる。196・202は板ナデ、小型の192のみがナデで、201もナデであるが肩部にハケが残る。177・178のハケは平行タタ

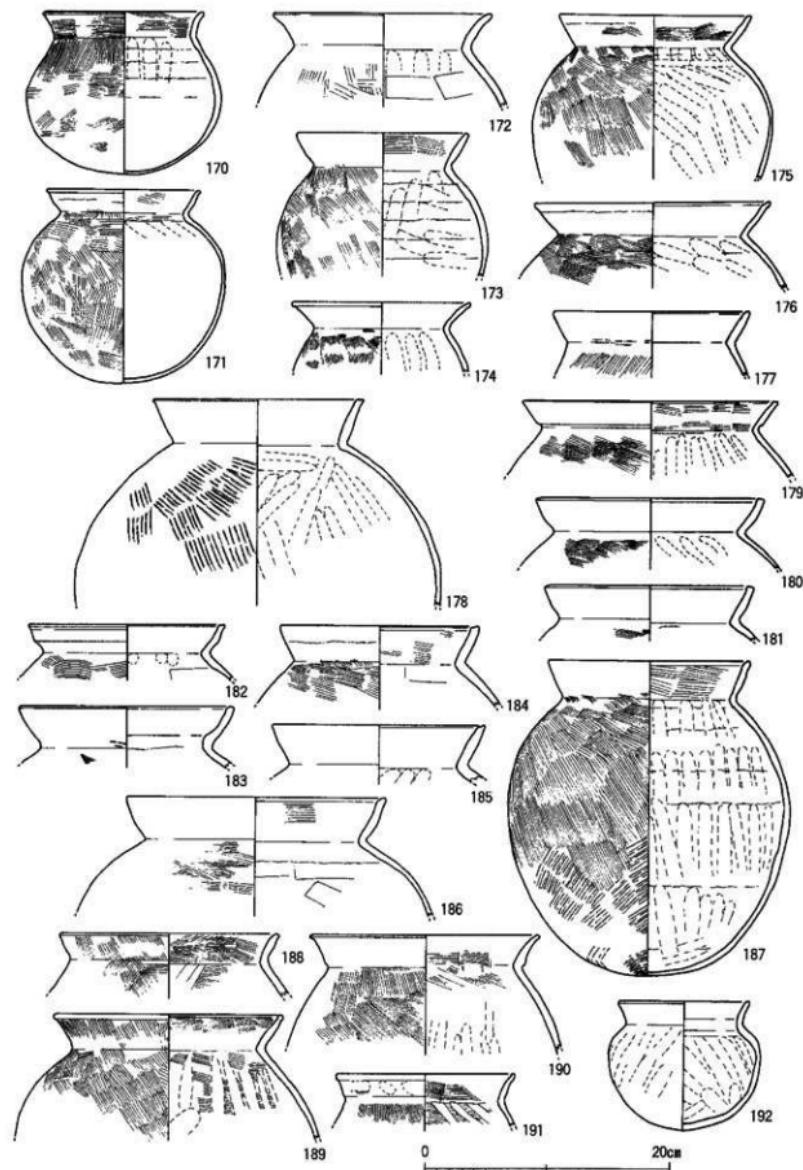


第21図 SK 209出土遺物② (S = 1/4)

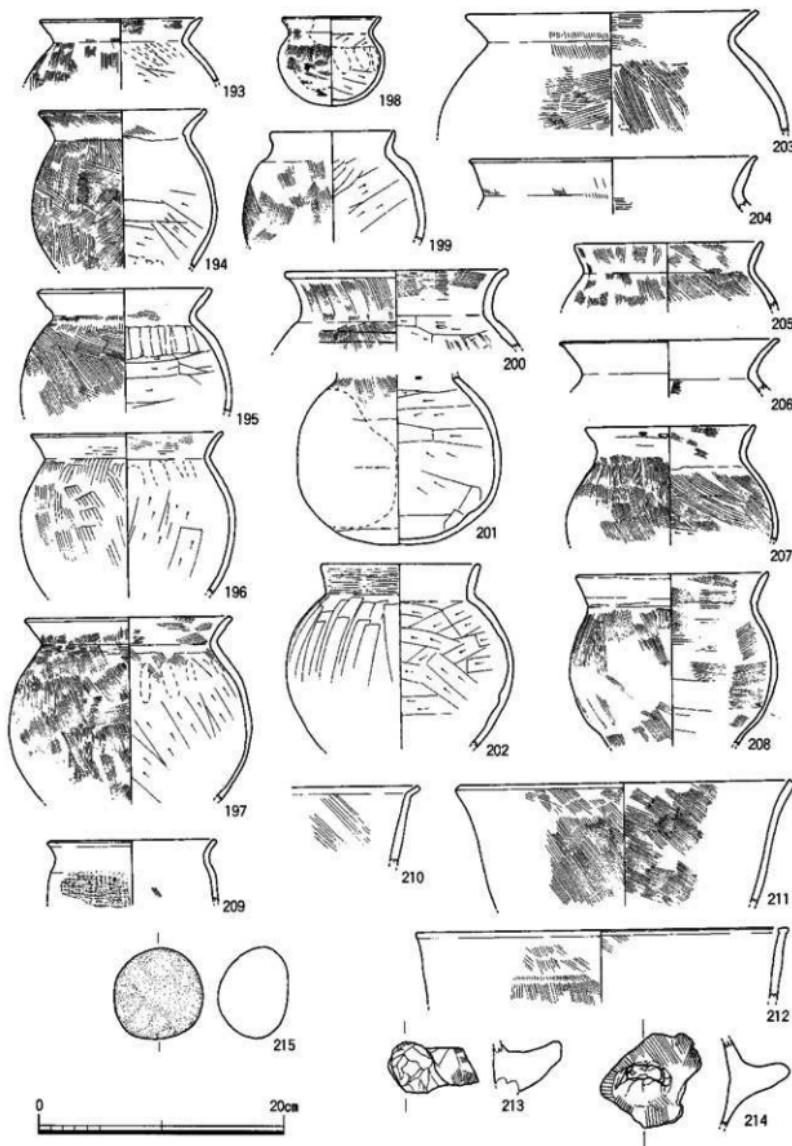
キである可能性もあるが明確に判別できない。内面の調整は1類：ナデあるいは板ナデ（170～192）、2類：ヘラケズリ（193～202）、3類：ハケ（203～208）に分類できる。1類のうち188～191はナデに先行するハケが認められ、また2類のうち193～196は上位がナデ、197はハケである。口縁部の調整はハケ、ナデがあり、ハケをナデ消したものもある。口縁端部の形態は、丸く収まるもの、面を持つもの、内側・外側・内外に肥厚するものと様々である。端部が内側に肥厚して内傾する端面を成す、いわゆる布留式壺の系譜上にあると考えられるものが1類にのみ認められる（182～187）。法量的には口径約8cm～11cmの小型（192・198・199）、13cm～19cmの中型、21cm～24cmの大型（179・186・203）の3種類に分けることができ、中型が多い。調整との関連では2類のものには中型壺が多いといえる。色調は褐色～淡褐色を呈するものが多く、170・176・



第22図 SK209出土遺物③ (S=1/4)



第23図 SK 209出土遺物④ (S=1/4)



第24図 SK 209出土遺物⑤ (S = 1 / 4)

180・181・187・202が灰黄色～淡灰褐色の白っぽいものである。二重口縁状の182は外面淡黄褐色、内面暗褐色を呈し、胎土は他のものに比して砂粒が多く含む胎土である。173は暗褐色を呈し生駒西麓産と考えられるもので、内面には粘土紐接合痕が明瞭に認められる。170・171・198・201の外面には黒斑が認められる。なお180・181は同一個体の可能性がある。

209は韓式系土器の可能性があり、外面に格子タタキを施すものである。

瓶(210～212)はいずれもハケ調整で、口縁部の形態はいずれも異なる。213・214は鍋の把手と考えられ貼り付けによる。213は焼成が非常に硬質である。

215は磨石と思われるが、使用痕は明瞭ではない。

製塙土器はすべていわゆる丸底I式に分類されるものである。1mm～2mmの器壁をもち、口径4cm～6cm、器高は10cm程度までのものであろう。総破片数は800点以上を数えるが、ほとんどが細片であるため個体数の算出や統計処理等は不可能と思われ実施していない。完形に復元されるものではなく、図化したものは25点である(216～240)。形態では1・2の二類に、また胎土等の特徴からはA～Cの三類に分類でき、数量的にはA類が約9割を占め、B類が約1割、C類は総破片中の13点に過ぎない。

[1 一體部から口縁部がほぼ直立するもの。

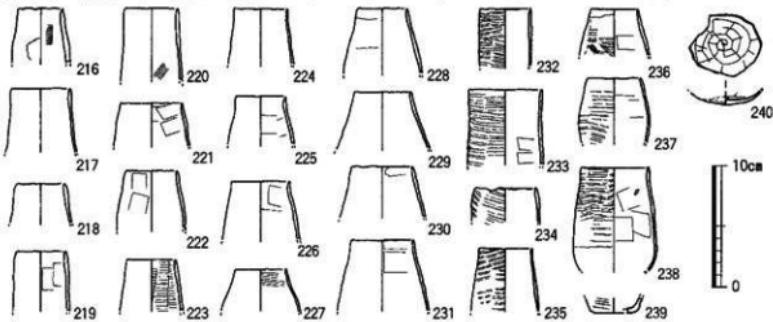
[2 一體部から口縁部にかけてすぼまるもの。口縁が短く直立するものもある(225・226)。

A-胎土は精良で、含有する砂粒は極小粒で、肉眼ではあまり認められない。色調は灰色～灰黄色で部分的にピンク色を呈する。他に黄褐色を呈するものも相当数あるが、胎土は同様と捉えられ分類はしなかった(220～231・233～240)。

B-砂粒を含み、やや厚手のものもあり、灰白色のものと褐色のものがある(216・217)。

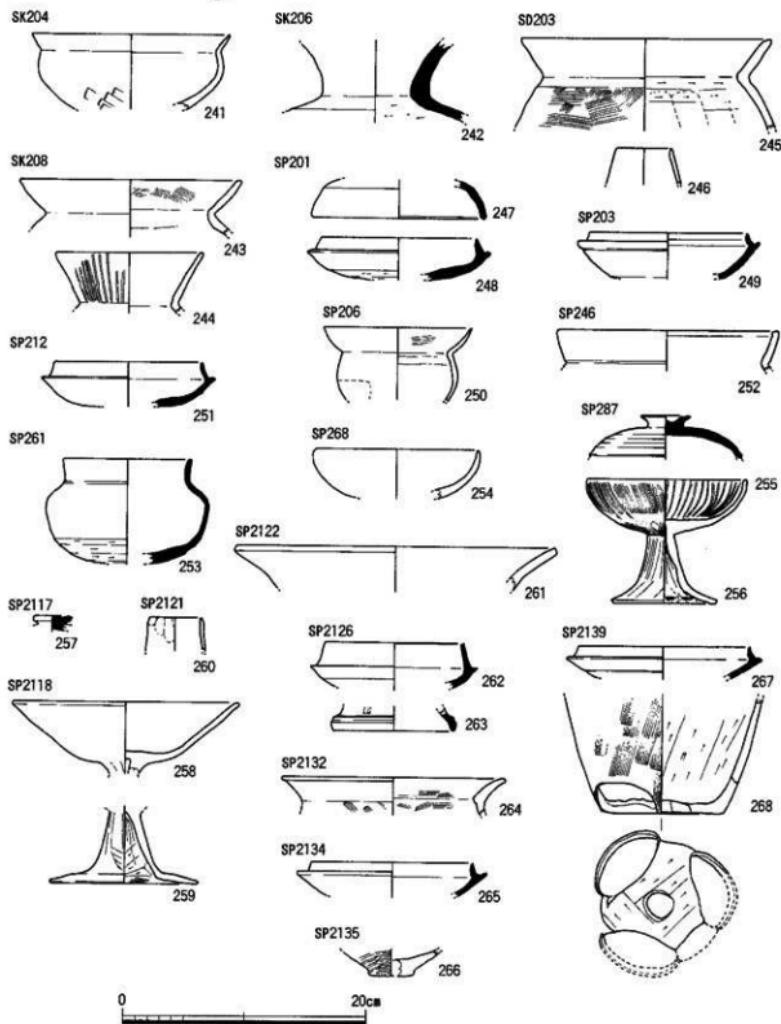
C-砂粒を多く含み、非常に硬質で、色調は灰色～灰褐色を呈する(218・219・232)。

外面調整はナデ・平行タタキがあり、ナデのものが多い。ナデのものには指紋や掌紋が明瞭に認められるものがあり、これらは未調整ともいえよう。平行タタキは下半をナデ消すもの(238)と全面に施すものもあるようである。器形が歪んだものや、器壁が面をもち、横断面が多角形を呈するものもあるが、これはタタキ調整に起因するものであろう。平行タタキの方向は水平からやや右上りのものが多い。左上りのものは1点あり(234)、これは同一個体と考えられる破片から推察して器高の低い椀状の形態を呈すると思われる。なおB類にはタタキを施すものはない。



第25図 SK 209出土遺物⑥ (S=1/4)

内面調整はナデあるいは板ナデで、貝殻によるナデと考えられる横方向の条痕が認められるものがある。240の底部内面には螺旋状の板ナデの痕跡が明瞭に観察できる。これら丸底I式の製塙土器の产地については、ナデ調整のものが紀淡海峡地域、タタキ調整のものが備讃瀬戸地域である可能性が指摘されている。^{註9}



第26図 第2次面遺構出土遺物 (S = 1/4)

これらSK 209出土土器の時期については、須恵器の型式ではTK 208形式～TK 23形式を中心とするものであろう。土師器については大阪市長原遺跡での変遷案に照らし合わせてみた。おおまかにはTK 208型式～TK 23型式の須恵器に併行するようである。壺には平行タタキ(187)や格子タタキ(209)を施すものがあり、これらはやや古い様相といえる。しかし壺においては内面ハケ調整のものが相当数認められ、また布留式壺の系譜上にある壺(178～187)では、内面ヘラケズリのものはみられない。また高杯3類とした口縁端部が外反するもの(159～161)や、同形態の底体部ヘラケズリを施す杯(169)は新しい様相といえる。

| SK | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 壺土 | 遺物 |
|-----|------|-----|-----------|----|----------------------|---------|
| 201 | 1B | 不明 | 51以上×100 | 33 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 202 | 1B | 長円形 | 91以上×51 | 27 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土(炭・焼土多い) | |
| 203 | 1B | 長円形 | 84以上×50 | 30 | 暗灰黄色細砂混じり粘質土 | |
| 204 | 2A | 不定形 | 152×101 | 13 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 241 |
| 205 | 3B | 不定形 | 122以上×72 | 16 | 暗灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 242 |
| 206 | 4A | 不定形 | 204×90 | 11 | 暗灰黃褐色細砂混じり粘質土 | |
| 207 | 5B | 不定形 | 175以上×95 | 30 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 208 | 6A～B | 不定形 | 226以上×146 | 25 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | 243・244 |
| 209 | 6～7A | | | | 本文参照 | |

表5 第2次面土坑(S K 201～209)法量表(cm)

溝(S D)

S D 203を除いてほぼ方位に沿った直線的な溝である。法量等は表5にまとめた。

溝からの出土遺物は少量で、図化したのはS D 203からの土師器壺・製塩土器(245・246)である。245は体部内面上位をヘラケズリしている。246はSK 209出土品の分類では2A類にある。

| SD | 地区 | 長さ | 幅 | 深さ | 壺土 | 遺物 |
|-----|-------|-------|--------|----|-------------|------------|
| 201 | 1B | 80以上 | 16～19 | 20 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | |
| 202 | 3A～B | 502 | 20～40 | 11 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | |
| 203 | 4A～B | 594 | 14～100 | 15 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器245・246 |
| 204 | 4B | 261以上 | 26～30 | 14 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | |
| 205 | 5A～7B | 502以上 | 49～149 | 26 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 206 | 7A | 222 | 13～43 | 8 | 淡褐色細砂混じり粘質土 | |

表6 第2次面溝(S D 201～206)法量表(cm)

ピット(S P)

調査区の全域で検出され、4A～B区では密集する状況もみられる。ピットからは古墳時代中期～後期までの土器が出土している。法量等は表7にまとめた。

S P 287の須恵器杯蓋(255)は、つまみが特異な形状を呈している。天井部外面に灰がかぶるが、つまみ上面は褐色を呈し灰がかぶらない。土師器高杯(256)は、SK 209出土の1類と同一規格のもので、杯部内面がやや煤けている。S P 2118の土師器高杯(259)は脚柱部内面をヘラケズリしている。S P 2139の土師器瓶(268)の底部蒸気孔は、中央に円孔、その周開3方に梢円孔というもので、梢円孔の縁部は二段に面取りされている。

| S P | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 地 上 | 產 物 |
|-----|-------|-----|------------|----|--------------|-----------------------|
| 201 | 1 A | 方 形 | 139×60以上 | 33 | 第16回参照 | 土師器・須恵器 (6 C) 247・248 |
| 202 | 1 A | 方 形 | 176×117 | 45 | 第16回参照 | 土師器・須恵器 |
| 203 | 1 A | 方 形 | 130以上×110 | 26 | 第16回参照 | 土師器・須恵器 (5~6 C) 249 |
| 204 | 1 A | 方 形 | 105以上×79以上 | 19 | 褐灰色細砂混じり粘質土 | |
| 205 | 1 A | 円 形 | 21×19 | 20 | 灰褐色粘質土 | |
| 206 | 1 A | 楕円形 | 48以上×29以上 | 20 | 灰褐色粘質土 | 土師器・須恵器・布留式 250 |
| 207 | 1 A | 椭円形 | 39×28 | 20 | 灰褐色粘質土 | |
| 208 | 1 A | 方 形 | 52×44 | 24 | 灰褐色粘質土 | |
| 209 | 1 A | 偏円形 | 31×24 | 12 | 灰褐色粘質土 | |
| 210 | 1 A | 椭円形 | 49×38 | 14 | 灰褐色粘質土 | |
| 211 | 1 A | 方 形 | 71×58 | 11 | 灰褐色粘質土 | |
| 212 | 1 B | 方 形 | 67×58 | 40 | 灰褐色粘質土 | 土師器・須恵器 (6 C末) 251 |
| 213 | 1 A | 偏円形 | 27×21 | 20 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 214 | 1 A | 椭円形 | 24×12 | 17 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 215 | 1 A | 偏円形 | 30×23 | 15 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 216 | 2 A | 円 形 | 19×18 | 11 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 217 | 2 A | 不定形 | 87×25 | 23 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 (5~6 C) |
| 218 | 2 A | 不 明 | 41×19 | 22 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 219 | 2 B | 円 形 | 32×27 | 34 | 灰褐色粘質土 | 土師器 |
| 220 | 2 B | 円 形 | 20×17 | 13 | 灰褐色粘質土 | |
| 221 | 2 A | 椭円形 | 38×35 | 14 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 222 | 2 A | 偏円形 | 59×41 | 20 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 (5 C)・布留式 |
| 223 | 2 A | 偏円形 | 35×34 | 18 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 224 | 2 A | 椭円形 | 78×53 | 29 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器・板塼土器 |
| 225 | 2 A | 椭円形 | 66×50 | 17 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 226 | 2 A | 不定形 | 43×35 | 17 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 227 | 2 A | 方 形 | 96×82 | 33 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 228 | 2 A | 不定形 | 65×53 | 14 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 229 | 2 A | 円 形 | 21×20 | 20 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 230 | 2 A | 偏円形 | 72×67 | 29 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 231 | 2~3 A | 偏円形 | 58×45 | 21 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 232 | 3 A | 円 形 | 37×34 | 21 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 233 | 2 A | 偏円形 | 79×68 | 46 | 灰褐色粘質土 | 土師器 |
| 234 | 2 B | 偏円形 | 45×42 | 34 | 灰褐色粘質土 | |
| 235 | 2 B | 不定形 | 49×47 | 25 | 灰褐色粘質土 | 土師器 |
| 236 | 2 B | 方 形 | 62×51 | 25 | 灰褐色粘質土 | |
| 237 | 2 B | 不定形 | 60×44 | 12 | 灰褐色粘質土 | |
| 238 | 2 A | 偏円形 | 40×32 | 25 | 灰褐色粘質土 | 土師器 |
| 239 | 2 B | 偏円形 | 36×32 | 20 | 灰褐色粘質土 | |
| 240 | 3 A | 円 形 | 39×34 | 26 | 褐色粗砂混じり粘質土 | |
| 241 | 3 B | 円 形 | 46×38 | 39 | 褐色粗砂混じり粘質土 | |
| 242 | 3 B | 椭円形 | 87×47 | 26 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 243 | 3 A | 偏円形 | 39×27 | 20 | 褐色粗砂混じり粘質土 | |
| 244 | 3 B | 不定形 | 43×32 | 19 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 245 | 3 B | 円 形 | 46×43 | 25 | 褐色粗砂混じり粘質土 | |
| 246 | 3 A | 円 形 | 58×47 | 34 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 252 |
| 247 | 3 B | 円 形 | 44×43 | 22 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 248 | 3 B | 円 形 | 54×35 | 27 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 249 | 3 A | 円 形 | 29×26 | 38 | 褐色粗砂混じり粘質土 | |
| 250 | 3 A | 不 明 | 21×18以上 | 21 | 暗灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 251 | 3 B | 偏円形 | 48×21 | 21 | 褐色粗砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 252 | 3 A | 椭円形 | 30×29 | 20 | 暗灰褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 253 | 3 A | 不 明 | 51×30以上 | 14 | 灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 254 | 3 A | 円 形 | 26×25 | 10 | 暗灰褐色細砂混じり粘質土 | |
| 255 | 4 A | 円 形 | 14×13 | 12 | 暗灰褐色微砂混じり粘質土 | |

表7 第2次面ピット (S P 201~255) 法量表 (cm)

| S P | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 堆 土 | 遺 物 |
|-----|-------|-----|-----------|----|---------------|----------------------|
| 256 | 3 B | 偏円形 | 19×18 | 14 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 257 | 3 B | 円 形 | 16×16 | 11 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 258 | 3 B | 円 形 | 16×15 | 9 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 259 | 3 B | 円 形 | 45×43 | 16 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 260 | 3 B | 方 形 | 60×59 | 13 | 第18回参照 | 土師器・須恵器 |
| 261 | 4 B | 方 形 | 62×60 | 37 | 第18回参照 | 土師器・須恵器 (5~6 C) 253 |
| 262 | 4 B | 方 形 | 69×60 | 46 | 第18回参照 | 土師器・須恵器 |
| 263 | 4 A | 楕円形 | 36×26 | 13 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 264 | 4 A | 楕円形 | 68×48 | 39 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 265 | 4 A | 偏円形 | 88×71 | 20 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 266 | 4 A | 楕円形 | 48×32 | 4 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 267 | 4 A | 円 形 | 34×31 | 14 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 268 | 4 B | 円 形 | 40×37 | 15 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 (高杯 5 C) 254 |
| 269 | 4 A | 偏円形 | 34×25 | 10 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 270 | 4 A | 円 形 | 29×21 | 23 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 271 | 4 A | 偏円形 | 55×47 | 33 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 272 | 4 A | 不 明 | 35以上×10以上 | 9 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 須恵器 |
| 273 | 4 A | 偏円形 | 50×48 | 28 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器・製塗土器・焼土 |
| 274 | 4 A | 不 明 | 45×26以上 | 9 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 275 | 4 A | 不定形 | 46×36 | 23 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 276 | 4 A | 偏円形 | 35×30 | 20 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 277 | 4 A | 楕円形 | 45以上×27 | 25 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 278 | 4 A | 不定形 | 33×31 | 31 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 279 | 4 A | 楕円形 | 53×34 | 30 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 280 | 4 A | 偏円形 | 27×26 | 23 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 281 | 4 A | 楕円形 | 60×28 | 14 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 282 | 4~5 A | 不 明 | 44×32以上 | 5 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 283 | 5 A | 円 形 | 39×36 | 35 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 284 | 4 B | 円 形 | 22×21 | 9 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 285 | 4 B | 円 形 | 43×40 | 12 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 286 | 4 B | 楕円形 | 34×29 | 12 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 287 | 4 B | 不定形 | 84×62 | 33 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 (高杯 5 C) 255・256 |
| 288 | 4 A~B | 楕円形 | 43×31 | 7 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 289 | 4 B | 不定形 | 60×43 | 15 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 290 | 4 B | 偏円形 | 45×41 | 14 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 291 | 4 B | 偏円形 | 65×41 | 23 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 292 | 4 B | 円 形 | 19×15 | 9 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 293 | 4 B | 偏円形 | 43×40 | 15 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 294 | 4 B | 不定形 | 93×71 | 32 | 灰黄色微砂混じり粘質土 | |
| 295 | 4~5 B | 円 形 | 30×29 | 10 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 296 | 5 B | 不 明 | 30×15以上 | 7 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 297 | 5 B | 円 形 | 35×33 | 8 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 298 | 5 B | 不定形 | 48以上×30 | 10 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 299 | 5 B | 偏円形 | 80×58以上 | 35 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 300 | 5 B | 不 明 | 43×16以上 | 10 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 301 | 5 B | 円 形 | 12×12 | 14 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | |
| 302 | 5 B | 偏円形 | 39×31 | 24 | 暗灰黄褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 (高杯) |
| 303 | 5 B | 楕円形 | 34×22 | 12 | 灰黄色微砂混じり粘質土 | |
| 304 | 5 B | 円 形 | 36×22以上 | 11 | 灰黄色微砂混じり粘質土 | |
| 305 | 5 A | 不定形 | 75×47 | 20 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 306 | 6 A | 偏円形 | 25×22 | 11 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・製塗土器 |
| 307 | 5 B | 円 形 | 59以上×37 | 41 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | |
| 308 | 5~6 B | 円 形 | 33以上×35 | 33 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 309 | 6 B | 円 形 | 42×37 | 12 | 灰黄褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 |
| 310 | 6 B | 楕円形 | 68以上×45 | 14 | 灰黄色微砂混じり粘質土 | 土師器 |

表8 第2次面ピット (S P 256~210) 法量表 (cm)

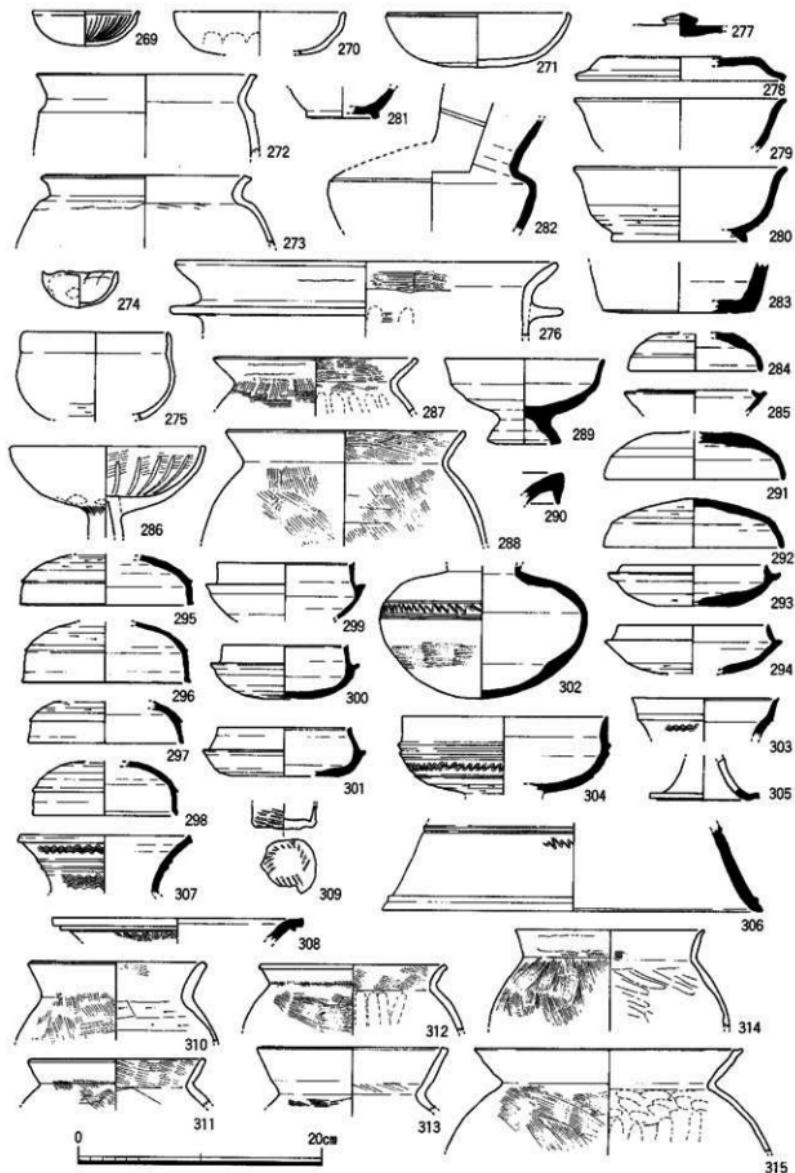
| S P | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 種 土 | 遺 物 |
|------|-----|-----|-----------|----|---------------|------------------------|
| 2111 | 6 B | 不定形 | 42以上×51 | 16 | 灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 2112 | 6 A | 円 形 | 43×41 | 17 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・製塙土器 |
| 2113 | 6 A | 不定形 | 83×64 | 19 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・製塙土器 |
| 2114 | 6 B | 橢円形 | 36×26 | 16 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 2115 | 6 A | 偏円形 | 33×26 | 15 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器 |
| 2116 | 7 B | 不 明 | 34以上×37 | 21 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 257 |
| 2117 | 5 B | 円 形 | 22×20 | 24 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器・布留式 258・259 |
| 2118 | 5 B | 円 形 | 41×28 | 13 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器・布留式 258・259 |
| 2119 | 6 B | 不定形 | 55以上×24 | 7 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | |
| 2120 | 6 B | 不定形 | 38×17 | 5 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | |
| 2121 | 6 B | 橢円形 | 76×58 | 11 | 灰黃褐色細砂混じり粘質土 | |
| 2122 | 6 B | 円 形 | 31×22 | 12 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器・製塙土器 261 |
| 2123 | 6 B | 橢円形 | 31×19 | 16 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 楕石 |
| 2124 | 6 B | 偏円形 | 52×49 | 33 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2125 | 6 B | 橢円形 | 39×25 | 9 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2126 | 6 B | 不定形 | 80以上×32以上 | 18 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 262・263 |
| 2127 | 6 B | 不定形 | 33×23 | 8 | 灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2128 | 6 B | 不定形 | 95×41 | 10 | 灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2129 | 6 B | 不 明 | 90×30以上 | 26 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2130 | 6 B | 円 形 | 25×24 | 9 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2131 | 6 B | 円 形 | 30×25 | 7 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器・製塙土器 |
| 2132 | 6 B | 不 明 | 28以上×52 | 29 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器・製塙土器 264 |
| 2133 | 6 B | 橢円形 | 31以上×38 | 23 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2134 | 6 B | 橢円形 | 61×46 | 12 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 須恵器 (6 C末) 265 |
| 2135 | 6 B | 円 形 | 31×30 | 10 | 灰黃色微砂混じり粘質土 | 荒生 266 |
| 2136 | 6 B | 橢円形 | 40×34 | 43 | 灰黃色微砂混じり粘質土 | |
| 2137 | 7 B | 円 形 | 36×34 | 27 | 灰黃色微砂混じり粘質土 | |
| 2138 | 7 B | 偏円形 | 36×35 | 14 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |
| 2139 | 7 B | 不定形 | 83×66 | 46 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 土師器・須恵器 (5~6C) 267・268 |
| 2140 | 7 B | 不定形 | 35×26 | 9 | 灰黃色微砂混じり粘質土 | |
| 2141 | 7 B | 円 形 | 62×60 | 42 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | 須恵器 |
| 2142 | 7 B | 偏円形 | 107×95 | 12 | 暗灰黃褐色微砂混じり粘質土 | |

表9 第2次面ピット (S P 2111~2142) 法量表 (cm)

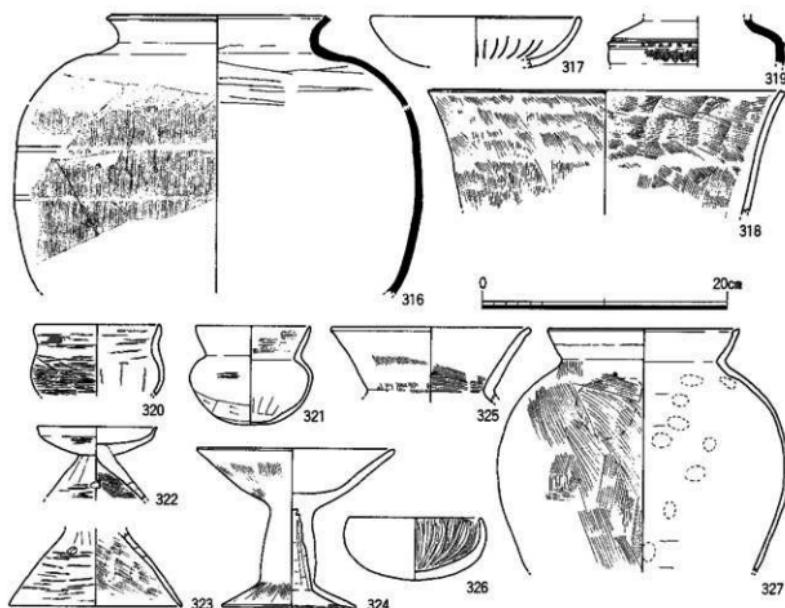
第5層出土遺物

古墳時代中期～後期を中心として、古墳時代前期から奈良～平安時代にわたる土器が出土している (269~327)。269~285が飛鳥時代～平安時代、286~294が古墳時代後期、295~319が古墳時代中期、320~327が古墳時代前期におおむね比定される。

土師器杯 (269) は平城杯Cにあたり、径高指数は33で、飛鳥II期頃に比定されよう。土師器杯 (271) の底部には円盤状の粘土接合痕が残る。時期不明の土師器小型鉢 (274) は製塙土器と考えられ、底体部には黒斑を有する。奈良時代の須恵器杯蓋 (278) は天井部内面が非常に平滑になっており、覗として転用されていた可能性がある。須恵器杯身 (279・280) は、平城杯Fにあたるいわゆる佐波理碗模倣須恵器で、奈良時代前半、730年頃を指標とする平城II期には出現するとされる器種である。須恵器壺 (302) は口頭部を欠くが、体部は完存する。須恵器器台 (306) は内外面に灰がかぶる。須恵器壺 (307・308)・土師器壺 (310~315) は西側溝南部の出土であり、おそらくSK 209の遺物であろうと思われる。製塙土器 (309) は南側溝からの出土で、出土層位は不明である。SK 209出土品にはみられなかった特異な底部形態で、やや厚い底部外



第27図 第5層出土遺物① (S = 1 / 4)

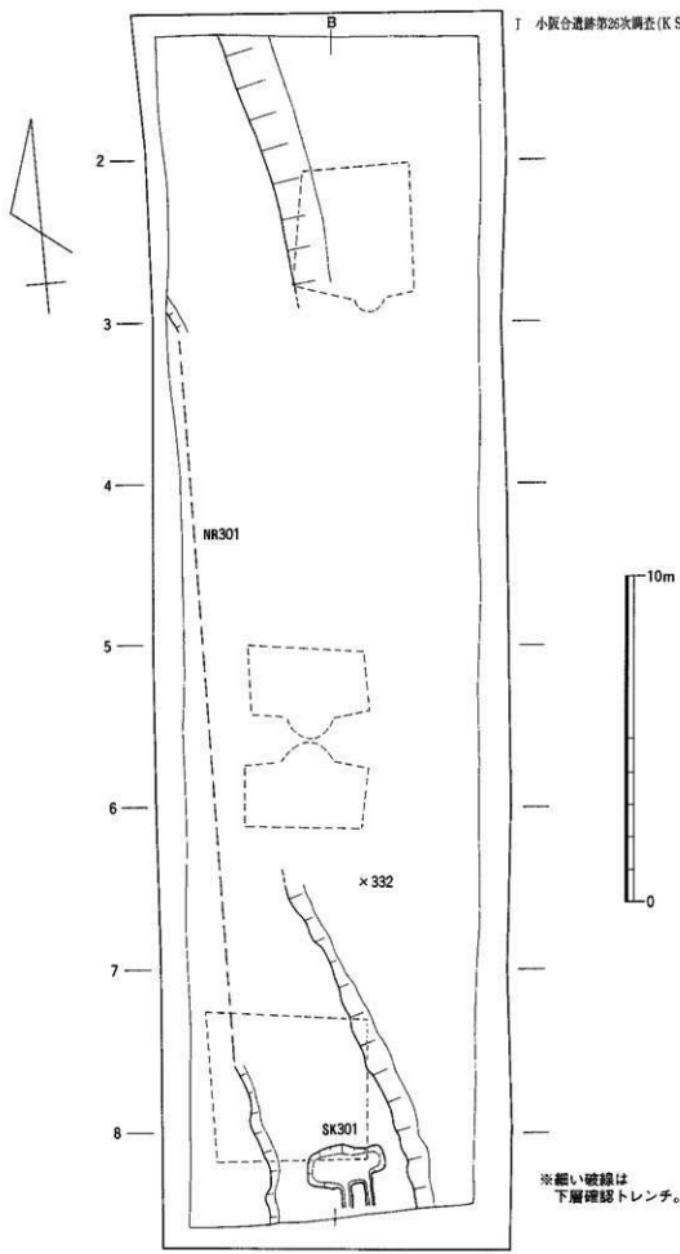


第28図 第5層出土遺物② (S = 1 / 4)

面にもタタキと思われる工具痕が認められる。

316～319は2B区南部の第2次面直上でまとまって出土したもので、SK209と同時期頃の土器集積とも捉えられよう。須恵器甌(319)は肩部に緑灰色の自然釉がかかる。土師器甌(316)は内外面ハケで、口縁部内面が黒灰色を呈する。陶質土器甌(316)は全体の1/5程度の破片があり、図上で復元したもので、口径18.4cmを測る。調整は口縁部から体部上位外面ヨコナデ、中位縦方向の繩席文タタキ(6～7本/1cm)、体部内面はナデで、上位は横方向の板ナデである。外面の繩席文後に沈線を施すもので、沈線は体部中位に二段が確認できるが、螺旋状に施されているのかどうかは不明である。またこの沈線は浅く、ヘラミガキ状である。器壁は薄く焼成時の歪みが大きい。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質、色調は灰色～黄灰色で、外面は一部褐色を呈し光沢がある。朝鮮半島南部地域に系譜をもつとされる韓式系土器で、須恵器とは趣が異なり明らかに舶載品と思われる。

320～327を古墳時代前期布留式期の土器としたが、甌(327)は古墳時代中期のものかもしれない。土師器鉢(326)は内面に放射状のヘラミガキを施す。非常に硬質で、底部にはひび割れがみられ、二次焼成あるいは火にかけての使用が考えられる。

第29図 第3次平面図 ($S = 1/150$)

〈第3次面〉

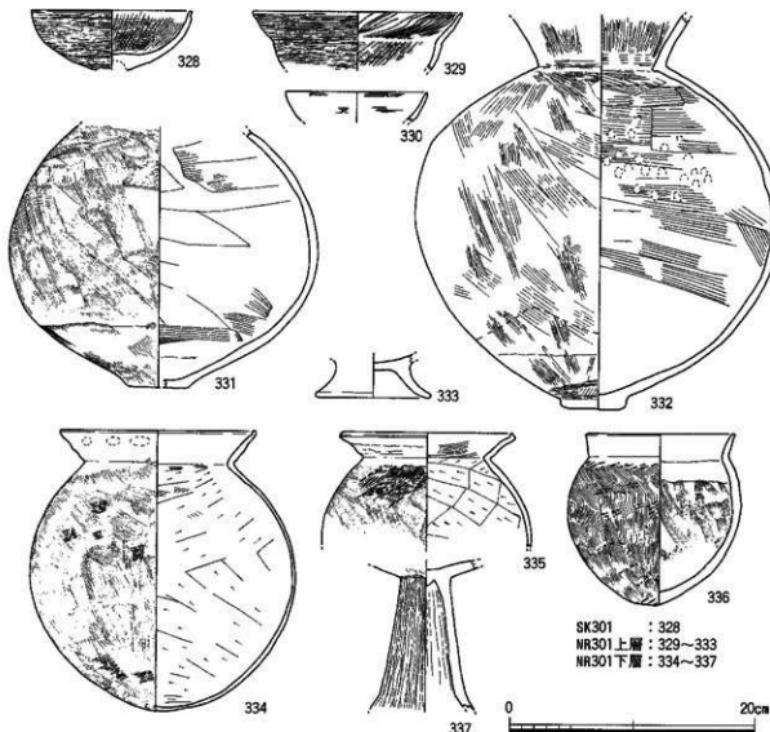
調査区の北部・南部で調査を実施し、第6層中で土坑1基（SK 301）を検出した。また河川堆積の状況を示すと考えられる砂と粘土の互層が確認された（NR 301）。

SK 301

8 A～B区に位置し、後述のNR 301上層にあたる第6層を少し掘り下げたレベルで検出された。平面形は東西約2.4m・南北約1.3mの東西に長い長方形を呈し、深さ約23cmを測る。南辺には2条の溝が接続した状況である。埋土は灰褐色微砂混じり粘質土である。古墳時代前期の土師器高杯（328）の他、古墳時代中期頃の土師器・製塩土器片が出土しており、第2次面からの遺構かも知れない。328は内外面をヘラミガキする高杯で、時期は庄内式期新相に比定される。

NR 301

第2次面のベースとなる第6層以下は、ほぼ調査区全域にわたって西から東に向かって下がる水成層の堆積状況で、調査地の西に西肩をもつ南北方向の河川流路が想定され、これをNR 301



第30図 SK 301・NR 301出土遺物 (S=1/4)

とした。埋土は上部の0.5m～0.6mは微砂～シルト・粘土の複雜な互層状堆積、下部は疊混じり粗砂である。そして調査区北部と南部で上層部分の掘削を実施し、下部については調査区内4箇所に設定した下層確認トレンチ（第1次面で検出した井戸の断ち割りを兼ねている）を重機により掘削した。この調査によると、地表下約3.9m（標高約5.0m）までこの粗砂の堆積が続いている。またこの粗砂からの湧水は著しいものであった。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期（布留式期古相）の土器が出土している（上層：329～333、下層：334～337）。小型鉢（329）・小型壺（330）は布留式期古相に比定されるものである。壺（331）は底体部がやや焼けている。壺（332）は外面ハケ後、おそらく全面ヘラミガキであろう。底体部外面に黒斑を有する。出土状況から同地点で潰れたことが窺える（図版6）。333は弥生時代の台付き器種の脚台部と考えられる。かなり摩滅しており河川上流から運ばれてきたものであろう。壺（334～336）は庄内式期新相～布留式期古相に比定される。いずれも外面はタタキ後ハケである。336は底体部外面に黒斑を有する。高杯（337）は弥生時代後期初頭に比定されよう。

第3章 まとめ

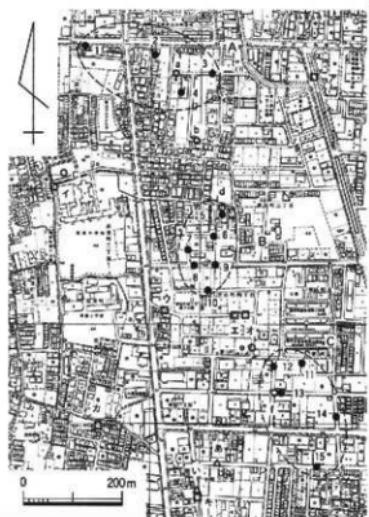
今回の調査では、周囲の区画整理事業に伴う調査と同様、主に古墳時代中期から平安時代の遺構・遺物を検出した。また下層からは弥生時代～古墳時代前期の土器も出土している。

N R 301の検出により、当地は古墳時代前期頃には河川流路域であったことが確認され、標高約7.7m以下、約5.0mまでは砂の堆積が続く状況であった。当調査地から南東約100m地点の第18次調査（表1-22）では、標高6.6m～7.0mで弥生時代後期の水田面、5.5m～6.0mで弥生時代中期の井戸・溝等の集落遺構が確認されている。これら弥生時代の集落域は当地まで拡がらないか、あるいはこの河川により削平されているようである。弥生時代後期では、西部の調査地（表1-23・42）でも集落遺構や遺物包含層が確認されていることから、後者の可能性が考えられ、この場合、周囲の調査成果も考え合わせて、当調査地の東側を中心とした幅100m程度の南北方向の河川流路域が想定できよう。

古墳時代中期～後期では、集落遺構として土坑や多量のビットが検出され、掘立柱建物は3棟が確認できた。周囲の調査では調査区が狭長なこともあり建物の確認等は困難であったが、多量のビット等は同様の状況である。古墳時代中期の遺構が顕著に認められる地域としては、当調査地周辺（第31図-A地域）及び南へ約300mのB地域、さらにそこから南東に約400mのC地域（中田遺跡）があげられる。そしてこれらの集落は上記の南北方向の河川流域に営まれているといえる。その顕著な例としては、当調査地南東約70mの第20次調査（表1-26）では、この河川堆積土上層から古墳時代中期の土器が多く出土している。河川左岸にあたる今回検出された遺構群との有機的な関係が窺えるもので、河川上面と当地遺構面の標高を比べると当地が約0.5m高く、微高地に集落が展開していたと考えられる。これらの集落に共通する特徴としては、続く古墳時代後期では遺構が希薄になっており、奈良時代頃にふたたび遺構が多く認められる。これ

は河川の氾濫等の活動に関係するのかもしれない。またB・C地域の集落は、古墳時代前期布留式期古相段階から中期まで連続と続いているよう、それは遺構が重複する例や、溝の上層・下層出土遺物の時期差等からも看取される。これらA～C地域を同一の集落域として捉えるのは規模的にみてやや無理があると思われ、河川流域に集落が点在していたのであろう。なお墓域としてはA地域東部（河川対岸か？）では埴輪円筒棺（□ア）、B～C地域間・C地域西部では弥生時代後期から古墳時代中期にわたる方形周溝墓・古墳や、その存在を示唆するような土器・埴輪の出土状況が認められている（□イ～キ、△あ・い）。またA地区西部（●1・2）では須恵器筒形器台・装飾付器台、そして●2、及び●5付近では、滑石製玉未製品・石製模造玉類といった祭祀色の強い遺物が出土しており注目される。

土坑SK209からは多量の土師器・須恵器・製塙土器が出土しており、これらの土器群は5世紀末・須恵器の型式ではTK208形式～TK23型式を中心とする時期の良好な一括資料と捉えられよう。周辺の遺構では、出土遺物の時期からみて、北東約70mで検出された第8次調査SK11（●3）と並行関係にあると考えられ、また製塙土器を含むという器種構成においても共通性が認められる。なお遺構の様相や出土遺物の器種構成の点でSK209に類似する遺構が、八尾市の南に接する大阪府藤井寺市津堂遺跡において検出されており注目される。「大土壙A・B」と称される遺構で、遺物は杯類を主体とする須恵器の他、土師器・製塙土器が多量に出土している。



| 調査名 | 遺構 | 備考 | 文献 |
|---------------|----------------|-----------------|-------|
| 1 聖教委祇寺 | 墓穴住居・他 | 筒型合・瓦筒合 | 表1-24 |
| 2 小塚合(95-104) | 土坑・溝・ピット | 筒型合 | 表1-42 |
| 3 小塚合第8次 | 土坑 SK11 | 製塙土器 | 表1-10 |
| 4 小塚合第25次 | 土坑 SK209 | 製塙土器 | 表1-33 |
| 5 小塚合第3次 | 舟型 | | 表1-46 |
| 6 小塚合第4次 | 土坑・他 | | 表1-6 |
| 7 小塚合第4次 | 唐 SD1 | | 表1-6 |
| 8 小塚合第1次 | 唐 SD17-18 | | 表1-1 |
| 9 小塚合第1次 | 土坑 SK14 | 織式系土器 | 表1-1 |
| 10 小塚合第1次 | 埴輪凹A・他 | | 表1-1 |
| 11 小塚合第13次 | 土坑 SK13 | 製塙土器 | 註30 |
| 12 小塚合第9次 | 唐 SD1 | | 表1-6 |
| 13 中田原35次 | 唐 | 製塙土器 | 註21 |
| 14 中田原35次 | 唐 | 製塙土器 | 註22 |
| 15 中田〈南区〉 | 唐・土坑 | 製塙土器 | 註23 |
| a 小塚合第6次 | 唐 SD5-6 | 奈良時代 | 表1-10 |
| b 小塚合第8次 | 土坑 SK3-7・溝 SD3 | 飛鳥時代 | 表1-10 |
| c 魔法守12次 | 舟型 SD201 | 惡者人面土器 | 註24 |
| d 小塚合第32次 | 輪板底舟型 | 轆轤土器。平安時代初期 | 表1-46 |
| e 小塚合第9次 | 輪板底舟型 SE10 | 奈良時代痕跡 | 表1-5 |
| f 中田原33次 | 輪板底舟型 | 奈良時代 | 註25 |
| ア 小塚合第9次 | 埴輪円筒棺 | 円筒・帆船形埴輪。4C末頃 | 表1-6 |
| イ 戒法守第11次 | 唐 SD-3 -他 | 円筒・帆船形埴輪。5C中葉頃 | 註26 |
| キ 小塚合第3次 | 唐 SD303 | 円筒・帆船形・形象埴輪。方墳？ | 表1-5 |
| ニ 小塚合第3次 | 唐 SD308-309 | 布笠式土器。方形周溝墓？ | 表1-5 |
| オ 小塚合第3次 | 唐 SD310 | 布笠式土器。方形周溝墓？ | 表1-5 |
| カ 大牛脚2次 | 土器集積 SW-1 | 6C後半・土器群・鉢刀・古墳？ | 註27 |
| キ 中田(91-293) | | 円筒埴輪。4C末～5C初頭 | 註28 |
| ア 中田原29次 | 土坑 SK-1 | V形式。方形周溝墓？ | 註29 |
| イ 中田(91-293) | 不尋遺物 SX01 | V形式。方形周溝墓？ | 註30 |

●(1～15)：古墳時代中期の主な遺構

○(a～e)：奈良時代頃の主な遺構

□(ア～キ)：古墳時代前期～後期の墓、及びその推定地

△(あ～い)：弥生時代後期の墓、及びその推定地

第31図 調査地周辺の関連遺構 (S = 1 / 10000)

須恵器の時期ではTK208型式前後に収まるもので、中・南河内における当該期の標識遺構となっている。『大土壙A』は埋土中に炭混じり灰層や焼土面が存在し、焼塩に関連する遺構である可能性も考えられている。SK209では焼土面は認められないものの、埋土中には炭や焼土塊を含んでおり、同様の性格をもつ遺構であるかもしれない。また八尾市域では、八尾南遺跡第3次調査 (YS84-03) における『SK-3』も、出土遺物の時期はやや遡る可能性があるが、製塩土器を含む器種構成や遺構の様相に共通性が認められる。

製塩土器はSK209以外にもみられ、特にSK209の東側のピットからの出土が多い。製塩土器については、前述のA～C地域でも遺構・包含層からの出土が認められ、特にC地域 (●15)においては約1000点に及ぶ出土が報告されている。

古墳時代後期以降も安定した居住地となっていたようで、包含層中には飛鳥～奈良時代の土器も多く認められる。平安時代では井戸等の集落遺構が検出されている。平安時代では地鎮祭祀に伴うと考えられる土器皿集積 (SW101) や土器埋納ピット (SP112) があり、周辺の調査と同様大規模な整地が行われた際のものであろう。注目すべき遺物としてこの整地層から出土した複弁八葉軒丸瓦 (78) がある。破片のため全容は不明であるが、花弁や間弁の様相・珠文数・瓦当裏の布目等の特徴から、官窯として平安京に瓦を供給していた京都府栗柄野瓦窯出土品と同意匠と思われ、また同范である可能性もある。この瓦は平安時代前期末 (9世紀後半) に位置付けられている。当地と平安京との関係を窺わせる資料として、第20次調査において、平安時代後期の土坑SK1 (井戸の可能性あり) から篠窯産と考えられる須恵器碗が出土している。また八尾市域で唯一確認されている瓦窯である向山瓦窯 (八尾市大竹所在) の瓦は、平安時代後期に京都醍醐寺や平等院・法勝寺への供給が確認されている。向山瓦窯は、仁和寺領新家庄・醍醐寺領渋川庄などに近く位置し、寺領庄園内工房と捉えられているもので、律令体制下における河内地域の位置付けを考える上で重要な瓦窯である。

破片一点のみの出土であり、当地と栗柄野瓦窯との間で直接に瓦の受給関係があったという可能性は低く、これから寺院の存在を想定するのは無理がある。当地を整地する際に何らかの理由で混入したものと考えられるが、あるいはいわゆる『堂』と呼ばれるような小規模な集落内寺院が当地に存在していたのかもしれない。当地が、難波と大和を結ぶ古代よりの主要古道であった立石嶺道・信貴越道に近いことも示唆的である。

北西部の調査地 (●2) では鎌倉時代の遺構面が2面確認され、土坑・井戸・掘立柱建物を構成すると思われるピット等が検出されている。またピットから鉄製作を推定させる鉄滓が出土しており注目される。当調査地では鎌倉時代の遺物はほとんどみられなかつたが、この居住域に対する生産域とも考えられよう。

註

- 註1 井藤 徹・他 1978「長原」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註2 坪田真一 1993「Ⅲ小阪合遺跡(第20次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註3 森島康雄 1995「6. 瓦器鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 註4 前掲書 註3
- 註5 前掲書 註2
- 註6 山中敏夫・他編 1983「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース 41』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
- 註7 江谷 寛 1994「平安京の瓦」『季刊考古学 第49号 特集—平安京跡発掘』雄山閣
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996「木村捷三郎収集瓦図録」
- 註8 広瀬和雄 1978「岬町遺跡群発掘調査概要一小島東遺跡・淡輪遺跡ー」大阪府教育委員会
- 註9 岡崎晋明 1984「近畿地方の内陸部より出土の製塙土器」『ヒストリア 第105号』大阪歴史学会
- 註10 京嶋 覚 1993.3 | 第2節 古墳時代後半期の土器の変遷』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告V』財団法人大阪市文化財協会
- 註11 古代の土器研究会編 1992「古代の土器1 都城の土器集成」
- 註12 奈良国立文化財研究所 1975「平城宮発掘調査報告Ⅳ」
- 註13 一瀬和夫・館 邦典 1987「津堂遺跡 86-1区の調査」大阪府教育委員会
一瀬和夫・館 邦典・他 1988「Ⅲ. 津堂遺跡の調査」『南河内遺跡群発掘調査概要・I』大阪府教育委員会
- 註14 原田昌則・成海佳子 1985「II八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註15 京都市考古資料館 原山充志氏に、拓本・写真・実測図を観て頂いたところ、栗栖野窯跡群轟枝窯跡出土品と同范の可能性があるとのご教示を得た。また同范の場合、都城以外での出土例はないようである。
- 註16 前掲書 註2
財団法人京都市埋蔵文化財研究所の小森俊寛氏に実見して頂きご教示を得た。
- 註17 江谷 寛 1994「平安京出土の河内産搬入瓦」『古代學研究所研究紀要 第4輯』財団法人古代學協会
- 註18 松村恵司 1989「村のくらし」『古代史復元9 古代の都と村』講談社
- 註19 大阪府教育委員会 1989「奈良街道」「歴史の道調査報告書 第四集」
- 註20 高萩千秋 1990「第6章 第13次調査」『小阪合遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註21 坪田真一 1997「25. 中田遺跡第35次調査(NT96-35)」「平成8年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註22 前掲書 註21
- 註23 中田遺跡調査会「中田遺跡(南区)発掘調査概要」
- 註24 坪田真一 1994「IX 成法寺遺跡第12次調査(SH93-12)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告42」
財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註25 前掲書 註21
- 註26 原田昌則 1996「Ⅲ 成法寺遺跡第14次調査(SH94-14)」「成法寺遺跡」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註27 成海佳子 1989「II 矢作遺跡(第2次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註28 吉田野乃 1992.3「8. 中田遺跡(91-293)の調査」「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市教育委員会
- 註29 原田昌則 1996「XI 中田遺跡第29次調査(NT95-29)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告53」
財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註30 前掲書 註28

図版



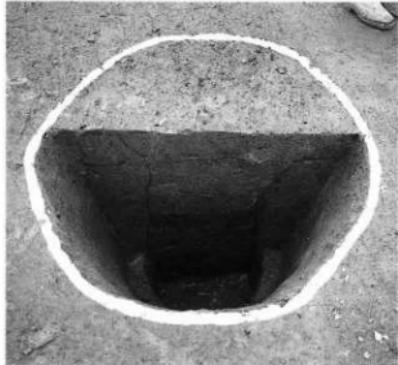
第1次面全景(北から)



S P 112(北から)



S W101(北から)



SE 101南壁



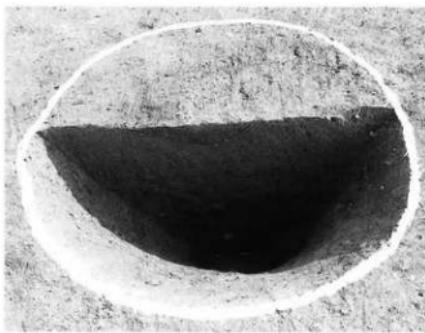
SE 101全景(北から)



SE 102南壁



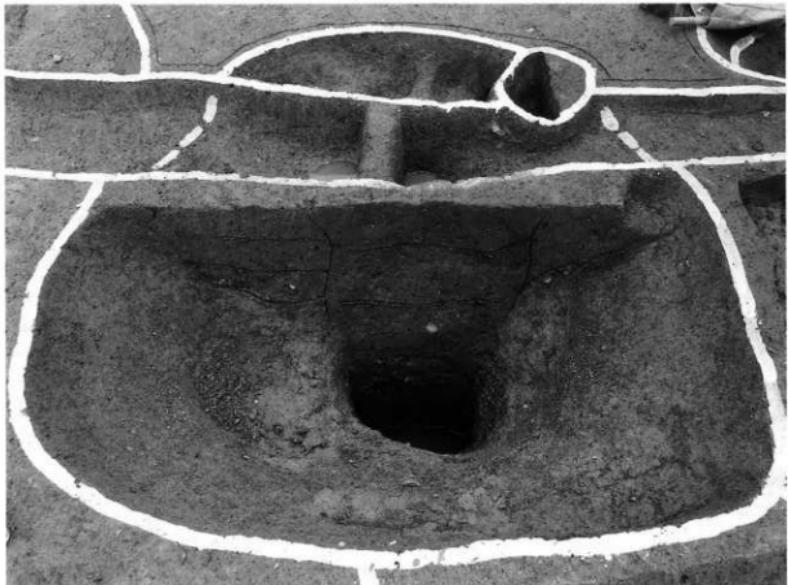
SE 102断面(北から)



SE 103南壁



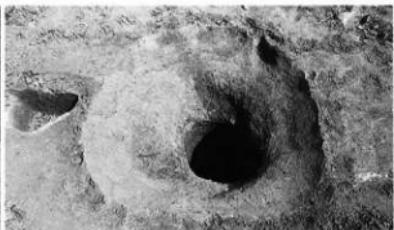
SE 103断面(南から)



SE 104東壁



SE 103全景(北から)



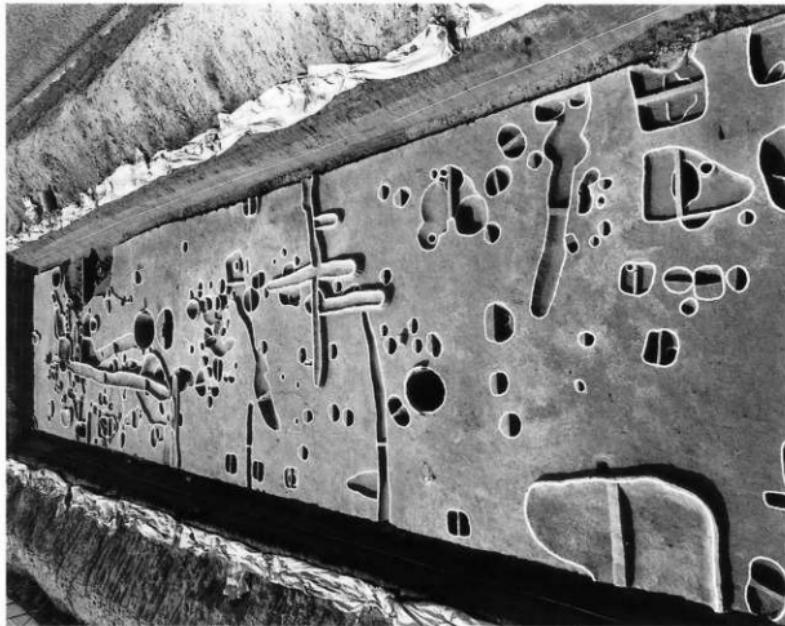
SE 104全景(西から)



SE 106石材出土状況(北から)



SE 106全景(西から)



第2次面全景(北から)



SB 201周辺(北から)



SB 202・203周辺(北から)



SK 209全景(西から)



SK 209(南東から)



SK 209(南から)



SK 209(北から)



S K 209南部遺物出土状況(東から)



S P 2118(南西から)



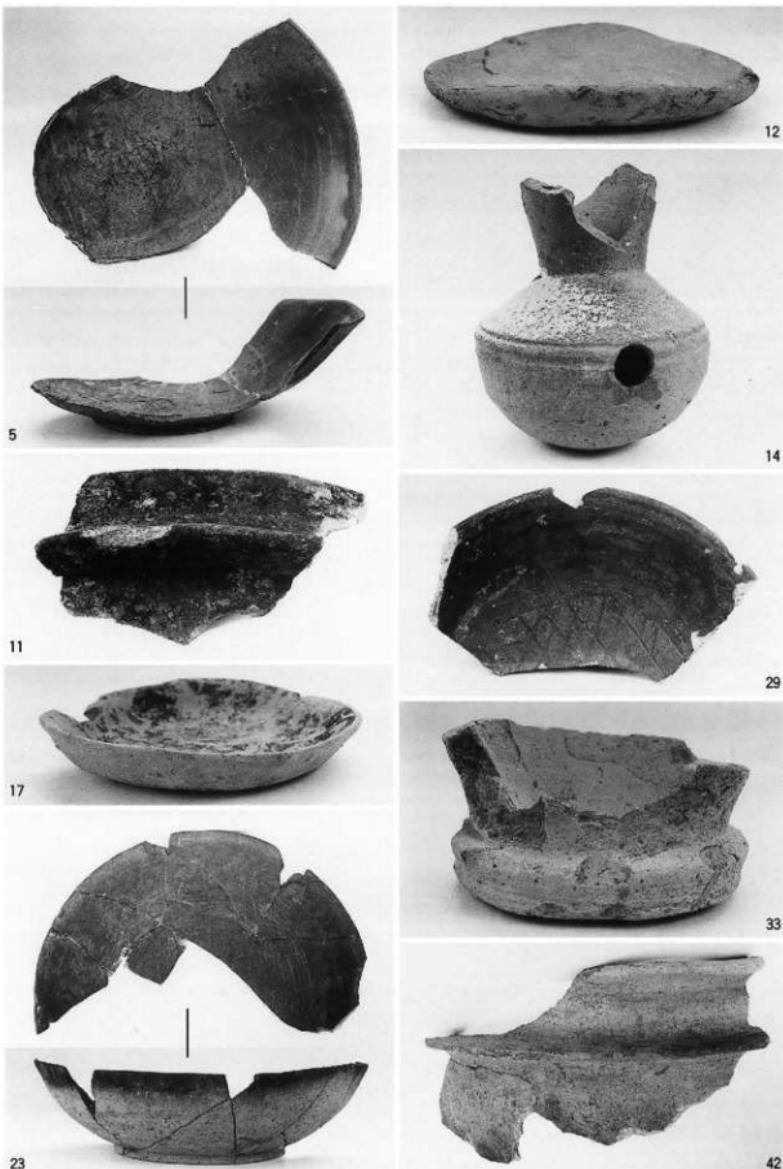
S P 2123(北から)



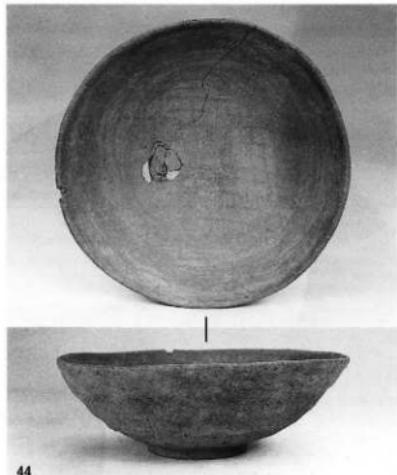
N R 301内土器(332)出土状況(北から)



第3次面全景(北から)



S E 101(5)、S E 102(11)、S E 103(12・14)、S E 104(17・23)、S E 106(29・33)、S P 110(42)



44



54



45



57

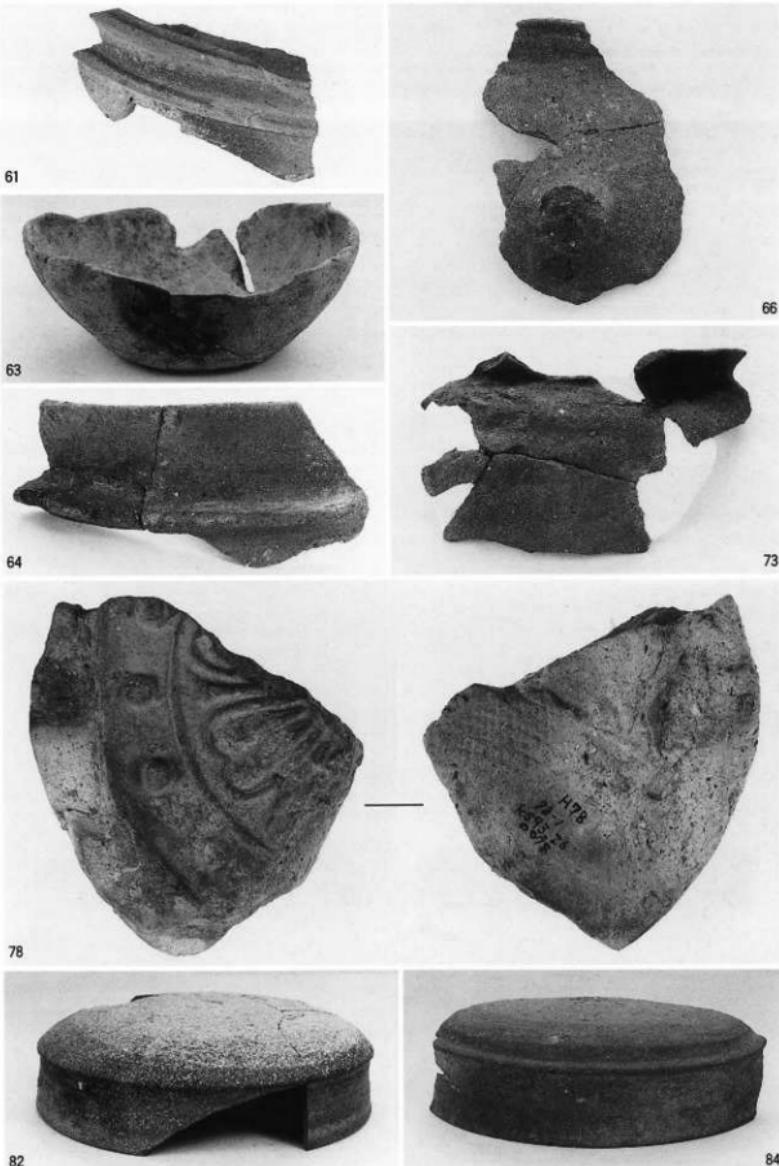


59

51~47



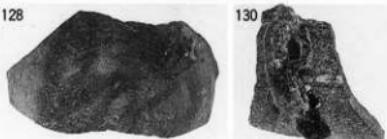
S P112 (44・45)、第4層 (54・57・59)、SW101 (51~47)



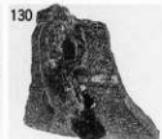
第4層 (61・63・64・66・73・78)、SK209 (82・84)







S K 209





132



135



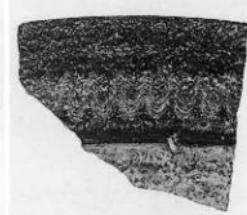
138



133



137



141



134



136



139



140

S K 209



143



144



146



145



147

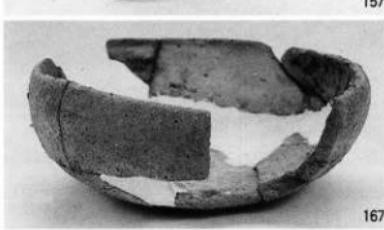


152

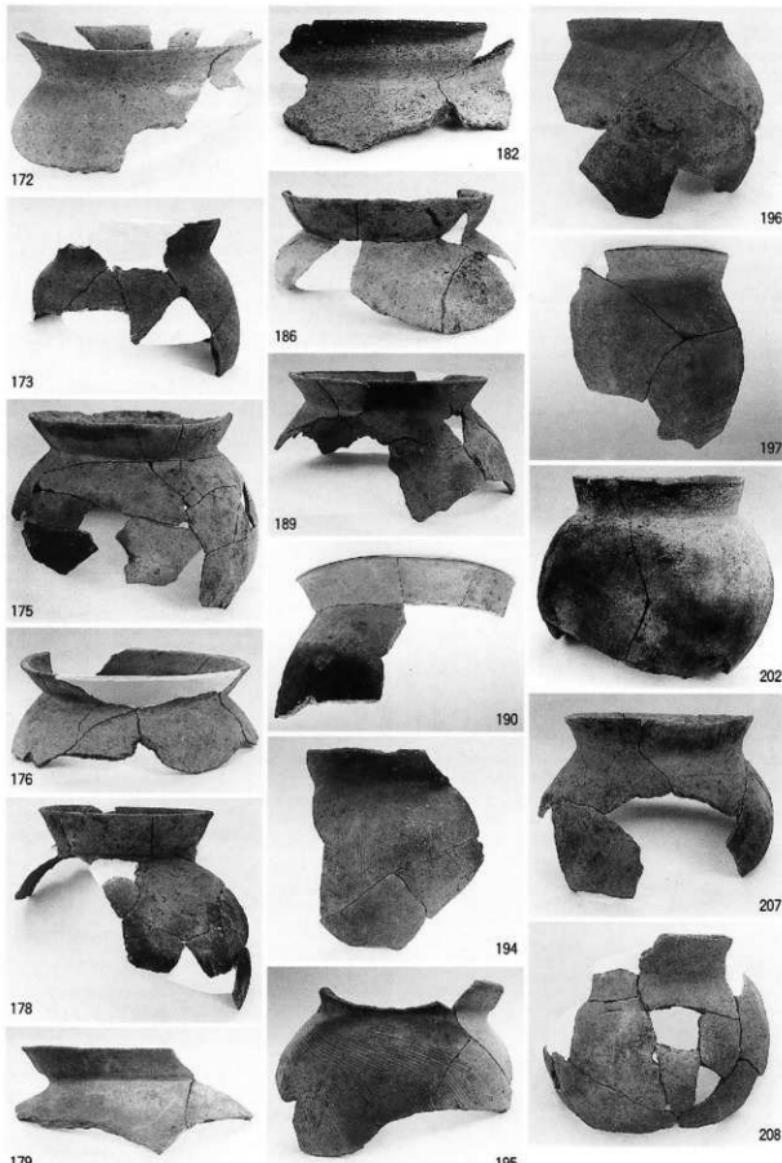
S K 209



153



S K 209



179

S K 209



187



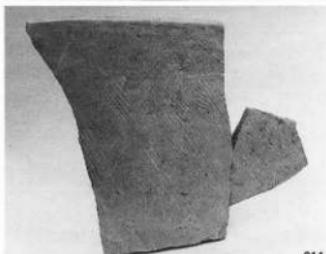
192



198



209



211



212

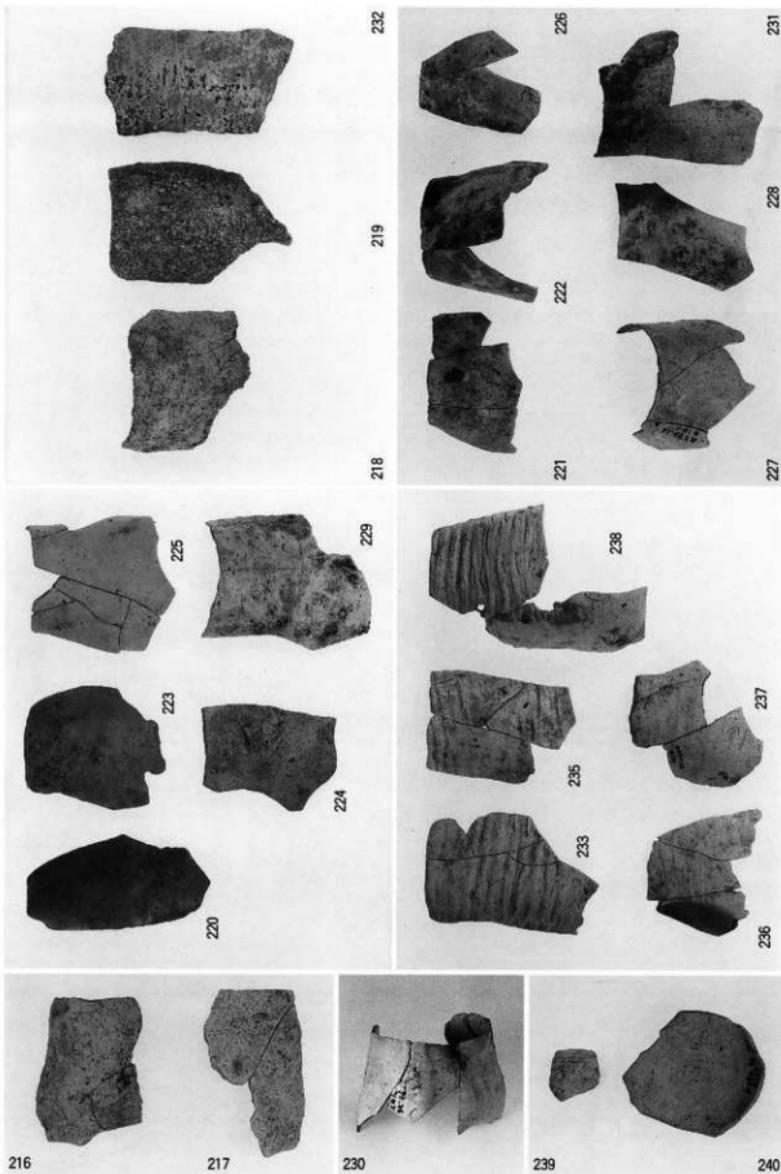


製塙土器



215

S K 209



SK 209



253



278



255



280



282



276



289



268

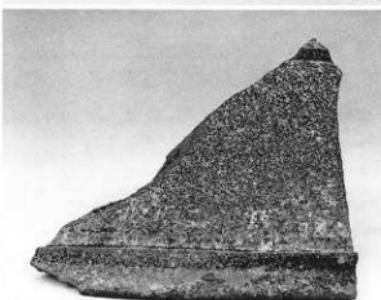
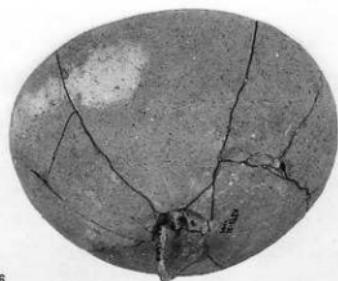


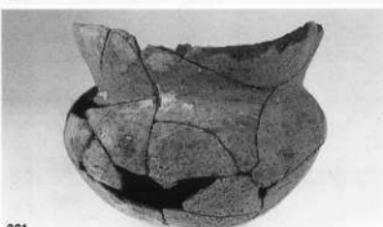
274



309

S P 261 (253)、S P 287 (255・256)、S P 2139 (268)、第5層 (274・278・280・282・289・309)





第5層 (316・319・321・324・326・327)、SK 301 (328)、NR 301 (329)



331



332



334



336



333

N R 301



335

II 東郷遺跡第44次調査 (T G 93-44)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市光町1丁目39・40・41で実施したホテル等建設に伴う東郷遺跡第44次調査（TG93-44）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第55号 平成5年8月12日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株式会社岩商から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成6年1月10日に着手し、同年2月9日に終了した。調査面積は約370m²である。
1. 現地調査には、浜田千年・平沼寿隆・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、「第3章 出土遺物観察表」を主に田島・山内が作成した。
1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。
1. 土器の産地については、大阪府八尾市立曙川小学校教諭 奥田尚氏に御教示を得た。また、「土器の表面に見られる砂礫」の御玉稿を賜った。

本 文 目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 第1章 はじめに..... | 41 |
| 第2章 調査概要..... | 43 |
| 第1節 調査方法..... | 43 |
| 第2節 基本層序..... | 44 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物..... | 45 |
| 第4節 「土器の表面に見られる砂礫」..... (奥田 尚) 69 | 69 |
| 第3章 出土遺物観察表..... | 79 |
| 第4章 まとめ..... | 86 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|--------------------------------------------|----|
| 第1図 | 調査地位置図 (S = 1 / 5000) | 41 |
| 第2図 | 地区割図 (S = 1 / 400) | 43 |
| 第3図 | 基本層序：調査地東壁（垂直：S = 1 / 40、水平：1 / 200）..... | 44 |
| 第4図 | 第1次面平面図 (S = 1 / 200) | 45 |
| 第5図 | S E101平面・断面図 (S = 1 / 30) | 46 |
| 第6図 | S D101西壁断面図 (S = 1 / 50) | 47 |
| 第7図 | S D101出土遺物 (S = 1 / 4) | 48 |
| 第8図 | S O101北壁断面図 (S = 1 / 50) | 49 |
| 第9図 | S O101出土遺物 (S = 1 / 4) | 49 |
| 第10図 | 第2次面平面図 (S = 1 / 200) | 50 |
| 第11図 | S B201平面・断面図 (S = 1 / 50) | 51 |
| 第12図 | S B202平面・断面図 (S = 1 / 50) | 52 |
| 第13図 | S B203平面・断面図 (S = 1 / 50) | 52 |
| 第14図 | S K201平面・断面図 (S = 1 / 30) | 53 |
| 第15図 | S K201出土遺物① (S = 1 / 4) | 54 |
| 第16図 | S K201出土遺物② (S = 1 / 4) | 55 |
| 第17図 | S K202平面・断面図 (S = 1 / 30) | 56 |
| 第18図 | S K202出土遺物 (S = 1 / 4) | 56 |
| 第19図 | S K204平面・断面図 (S = 1 / 40) | 57 |
| 第20図 | S K204出土遺物 (S = 1 / 4) | 59 |
| 第21図 | S K206平面・断面図 (S = 1 / 30) | 60 |
| 第22図 | S K206出土遺物① (S = 1 / 4) | 61 |
| 第23図 | S K206出土遺物② (S = 1 / 4) | 62 |
| 第24図 | S K206出土遺物③ (S = 1 / 4) | 63 |
| 第25図 | S K207平面・断面図 (S = 1 / 40) | 64 |
| 第26図 | S K207・S D205・S P208出土遺物 (S = 1 / 4) | 64 |
| 第27図 | S D201南東壁断面図 (S = 1 / 50) | 65 |
| 第28図 | S D205・206北壁断面図 (S = 1 / 50) | 66 |
| 第29図 | 1区包含層出土遺物 (S = 1 / 4) | 67 |
| 第30図 | 2・3区包含層出土遺物 (S = 1 / 4) | 68 |

表 目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 表1 東郷遺跡発掘調査一覧表..... | 42 |
| 表2 第2次面ピット (S P 201~232) 法量表..... | 66 |

図 版 目 次

| |
|----------------------------------------------------------------|
| 図版1 1区第1次面 (北から) S E101 (東から) S D101 (西から) |
| 図版2 1区第2次面 (北から) 3区第2次面 (北から) |
| 図版3 2区第2次面 (西から) 3区第2次面 (南から) S B203 (西から) |
| 図版4 S K201西壁 (東から) S K201 (東から) S K201 (北から) S K201下層 (北から) |
| 図版5 S K202 (西から) S K204 (南東から) |
| 図版6 S K206 (南から) S K206 (東から) |
| 図版7 出土遺物 S D101 |
| 図版8 出土遺物 S D101 (8・10~14)、S O101 (15・16)、S K201 (18・19・22) |
| 図版9 出土遺物 S K201 |
| 図版10 出土遺物 S K201 (34~39)、S K202 (41・42) |
| 図版11 出土遺物 S K202 (49・50)、S K204 (51・58~61・65・68) |
| 図版12 出土遺物 S K204 (69~71・75・76・78・81・82)、S K206 (86・87) |
| 図版13 出土遺物 S K206 |
| 図版14 出土遺物 S K206 |
| 図版15 出土遺物 S K206 (108・110~115)、S K207 (116・118)、S D205 (119) |
| 図版16 出土遺物 第4層 (127)、第5層 (他) |

第1章 はじめに

東郷遺跡は八尾市の中央やや北西部に位置し、現在の行政区画では本町1・7、北本町2、東本町、光町、桜ヶ丘、莊内町がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上で北は壹振遺跡、南は成法寺遺跡、西は宮町遺跡・八尾寺内町、南東は小阪合遺跡と接している。

当遺跡発見の契機は、昭和46年、八尾市東本町2丁目での水道管埋設工事の際、墨書き土器が出土したことによる。そして昭和55年度には最初の発掘調査として、桜ヶ丘3丁目において八尾市教育委員会による東郷遺跡第1次調査^①が実施された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、これらの成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。なお特に、今回の調査地を含む近鉄八尾駅北側の開発に伴う調査、及びその東方の桜ヶ丘一帯における調査が顕著であり、この範囲では遺跡の様相がかなり解明されつつあるといえよう。それによると、弥生時代中期では遺構は散発的なもので、^⑫・^⑯・^⑰で検出されているに過ぎない。^⑯で検出された中期後半の土坑からは、紀伊地方産の土器が出土しており、当時の地域間交流が窺える資料である。^⑯



第1図 調査位置図 (S = 1/5000)

と④の間の⑩や⑪においては、弥生時代中期～後期頃に埋没したと考えられる東西方向の河川^{註6 註7}が確認されており、河川沿岸に小規模な集落が点在していたものか、あるいは集落がこの河川に削平されたものと捉えられる。周辺の遺跡においても同様で、この時期の遺構の検出は散発的であるが、南に隣接する成法寺遺跡北端部では顕著に認められており、周溝墓や集落の中心と考えられる濃密な遺物包含層が確認されている。弥生時代後期では遺跡東部で遺構が検出されている他、⑤では自然流路からではあるが、吉備地方からもたらされたと考えられる向木見型特殊器台が出土しており注目される。続く古墳時代前期庄内式期の遺構は西部で密に認められるようになり、この時期に集落は西に移動したのであろうか。⑫・⑬では方形周溝墓が検出されており、^{註14 註15}

| 番号 | 略号 | 調査主体 | 調査年月 | 調査原因 | 文 献 | 発行 |
|----|---------|------|----------------|-----------|---------------------------|------|
| ① | TG80-01 | 市教委 | 昭和56年1月 | 店舗兼共同住宅 | 八尾市文化財調査報告6 | 1981 |
| ② | TG81-02 | 市教委 | 昭和56年4月 | 店舗兼住宅 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ③ | TG81-03 | 市教委 | 昭和56年4月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ④ | TG81-04 | 市教委 | 昭和56年5月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑤ | TG81-05 | 市教委 | 昭和56年6月～7月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑥ | TG81-06 | 市教委 | 昭和56年7月～8月 | 社会保険事務所兼 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑦ | TG81-07 | 市教委 | 昭和56年9月～10月 | 社屋 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑧ | TG81-08 | 市教委 | 昭和56年10月～12月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑨ | TG81-09 | 市教委 | 昭和56年12月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑩ | TG81-10 | 市教委 | 昭和57年2月～3月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2 | 1983 |
| ⑪ | TG82-11 | 市教委 | 昭和57年4月～6月 | 共同住宅 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑫ | TG82-12 | 研究会 | 昭和57年5月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑬ | TG82-13 | 研究会 | 昭和57年9月～10月 | 共同住宅 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑭ | TG82-14 | 研究会 | 昭和58年3月～4月 | 店舗 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑮ | TG83-15 | 研究会 | 昭和58年5月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑯ | TG83-16 | 研究会 | 昭和58年6月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑰ | TG83-17 | 研究会 | 昭和58年11月～12月 | 貸ビル | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告6 | 1985 |
| ⑱ | TG83-18 | 研究会 | 昭和59年3月～4月 | 共同住宅 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 |
| ⑲ | TG85-19 | 市教委 | 昭和60年4月 | ビル | 八尾市文化財調査報告12 | 1986 |
| ⑳ | TG85-20 | 研究会 | 昭和60年10月～61年3月 | 文化会館 | 財団法人八尾市文化財調査研究会報告13 | 1989 |
| ㉑ | TG86-21 | 市教委 | 昭和61年10月～11月 | 美術館 | 八尾市文化財調査報告13 | 1986 |
| ㉒ | TG86-22 | 市教委 | 昭和61年12月 | 店舗 | 八尾市文化財調査報告15 | 1987 |
| ㉓ | TG86-23 | 研究会 | 昭和62年2月～3月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告29 | 1991 |
| ㉔ | TG87-24 | 研究会 | 昭和62年4月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告29 | 1991 |
| ㉕ | TG87-25 | 研究会 | 昭和62年7月～9月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告45 | 1995 |
| ㉖ | TG87-26 | 研究会 | 昭和63年1月 | 日本基督教電気公社 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告16 | 1988 |
| ㉗ | TG87-27 | 市教委 | 昭和63年1月 | 文化会館 | 八尾市文化財調査報告18 | 1988 |
| ㉘ | TG88-28 | 研究会 | 昭和63年7月～8月 | ビル | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 |
| ㉙ | TG88-29 | 研究会 | 平成元年3月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 |
| ㉚ | TG89-30 | 研究会 | 平成元年4月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告48 | 1995 |
| ㉛ | TG89-31 | 研究会 | 平成元年5月～7月 | 事務所 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告28 | 1990 |
| ㉜ | TG89-32 | 研究会 | 平成元年5月～10月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告28 | 1990 |
| ㉝ | TG90-33 | 研究会 | 平成2年1月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告41 | 1993 |
| ㉞ | TG90-34 | 研究会 | 平成3年1月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成2年度事業報告 | 1991 |
| ㉟ | TG90-35 | 研究会 | 平成3年3月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成3年事業報告 | 1993 |
| ㉟ | TG91-36 | 研究会 | 平成3年5月～6月 | 自動車販売場 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成3年度事業報告 | 1992 |
| ㉟ | TG91-37 | 研究会 | 平成3年6月～9月 | 古墳遷座替え | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成3年度事業報告 | 1992 |
| ㉟ | TG91-38 | 研究会 | 平成4年2月 | 防火水槽 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告34 | 1992 |
| ㉟ | TG92-39 | 研究会 | 平成4年10月～11月 | 公会堂兼茶道 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告39 | 1993 |
| ㉟ | TG93-40 | 研究会 | 平成5年4月～6月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| ㉟ | TG93-41 | 研究会 | 平成5年5月～9月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| ㉟ | TG93-42 | 研究会 | 平成5年12月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告48 | 1995 |
| ㉟ | TG93-43 | 研究会 | 平成5年12月 | 美術館 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 |
| ㉟ | TG93-44 | 研究会 | 平成6年1月～2月 | オフィス等 | 今回報告 | |
| ㉟ | TG93-45 | 研究会 | 平成6年3月～4月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告48 | 1995 |
| ㉟ | TG94-46 | 研究会 | 平成6年7月～9月 | 道路整備 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告48 | 1995 |
| ㉟ | TG94-47 | 研究会 | 平成6年8月～9月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成6年度事業報告 | 1995 |
| ㉟ | TG94-48 | 研究会 | 平成6年10月～12月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成6年度事業報告 | 1995 |
| ㉟ | TG95-49 | 研究会 | 平成7年6月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会報告54 | 1996 |
| ㉟ | TG95-50 | 研究会 | 平成8年1月 | 共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成7年度事業報告 | 1996 |
| ㉟ | TG95-51 | 研究会 | 平成8年3月 | 貸事務所 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成8年度事業報告 | 1996 |
| ㉟ | TG96-52 | 研究会 | 平成8年10月～11月 | 店舗兼共同住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成8年度事業報告 | 1997 |
| ㉟ | TG96-53 | 研究会 | 平成8年12月 | 個人住宅共用住宅 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成8年度事業報告 | 1997 |
| ㉟ | TG97-54 | 研究会 | 平成9年6月 | 易代天守 | 財团法人八尾市文化財調査研究会 平成9年度事業報告 | 1998 |
| ㉟ | 東郷 | 市教委 | 昭和2年5月～63年11月 | 橋川改修 | 東郷通築防潮渠築渠工 [八尾市文化財紀要?] | 1989 |
| ㉟ | 東郷城跡 | 市教委 | 平成3年4月～5月 | 草創待奉所 | 東郷城址堀切防潮渠築渠工 [八尾市文化財紀要?] | 1995 |

番号は第1回と共通（第①次調査） 調査主体=市教委：八尾市教育委員会 府教委：大阪府教育委員会 研究会：当調査研究会

表1 東郷遺跡発掘調査一覧表

この一帯が墓域となっている。そして布留式期には東部に拡がるようで、墓域としては②・⑦で
方形周溝墓7基が検出されている。古墳時代中期・後期には集落域はほぼ完全に再び東部に移つ
ているよう、西部では遺構はほとんど認められない。飛鳥～奈良時代では、東部⑥でまとまつ
て瓦が出土したことにより『東郷廃寺』の存在が推定され、その西部ではこの時期の集落域も確
認されている。また遺跡南西部には、南の成法寺遺跡域から北流してくる奈良時代頃の大規模な
埋没河川が想定され、この流域からは当遺跡発見の契機となった1点をはじめ、成法寺遺跡では
多量の墨書き面土器が出土している。^{注13}^{注14}^{注15}^{注16}

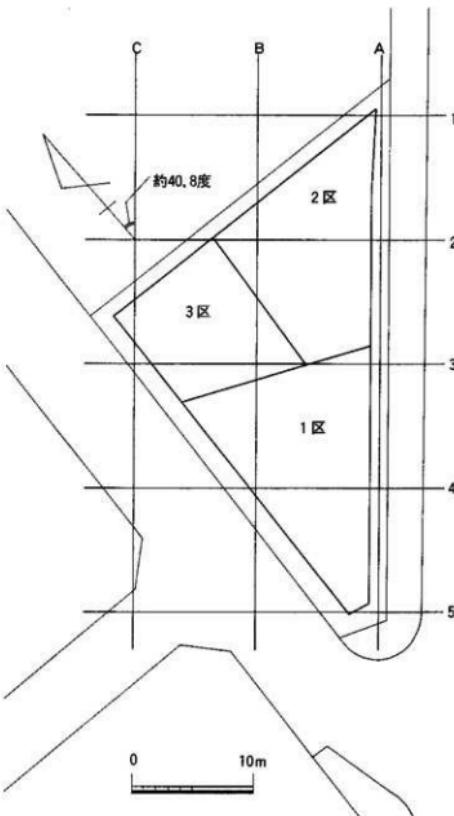
第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査はホテル等建設に伴う調査で、当調査研究会が東郷遺跡内で行った第44次調査である。

調査にあたっては、掘削土処理の都合から調査地を三分割し(1～3区)、1→2→3区の順に順次埋め戻しながら実施した。掘削については、現地表下約1.5mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行った。

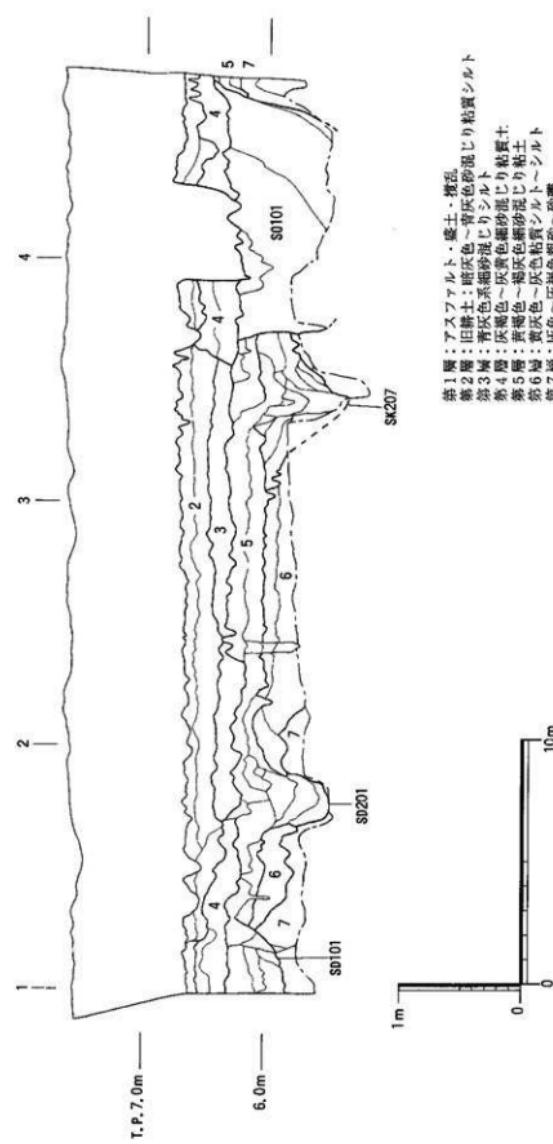
地区割については、調査区平面形が三角形を呈していることや、また調査進行の都合もあり、方位に関係なく調査区東辺を基準に10m方眼を設定した。そして南北ラインにアルファベット(東からA～C)、東西ラインには数字(北から1～5)を冠し、地区名は北東交点番号に代表させた。なおこの南北ラインは北から東に約40.8度振っている。



第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

第2節 基本層序

第1層がアスファルト・盛土及び擾乱層である。第2層が旧耕土で、第3層は第2層に伴う床土と捉えられる層で、調査区中央が厚く堆積している。第4層は中世頃までの土器を少量含んでいる。第5層は古墳時代前期の包含層で、東部ほど厚く堆積しており、さらに細分ができる。1区でのみ上層・下層に分けて掘削を実施した。第5層上面が第1次面で、標高は約6.3mを測る。シルトを基調とする第6層以下は水成層の様相を呈している。第6層は調査区の東部・西部にみられ、この上面（堆積していない部分では第7層上面）が第2次面で標高は6.0m～6.2mを測る。第7層の粗砂を基調とする砂層は、S E 101断ち割りの際の下層確認によると、標高約4.4m（現地表下約3.2m）まで続いている。

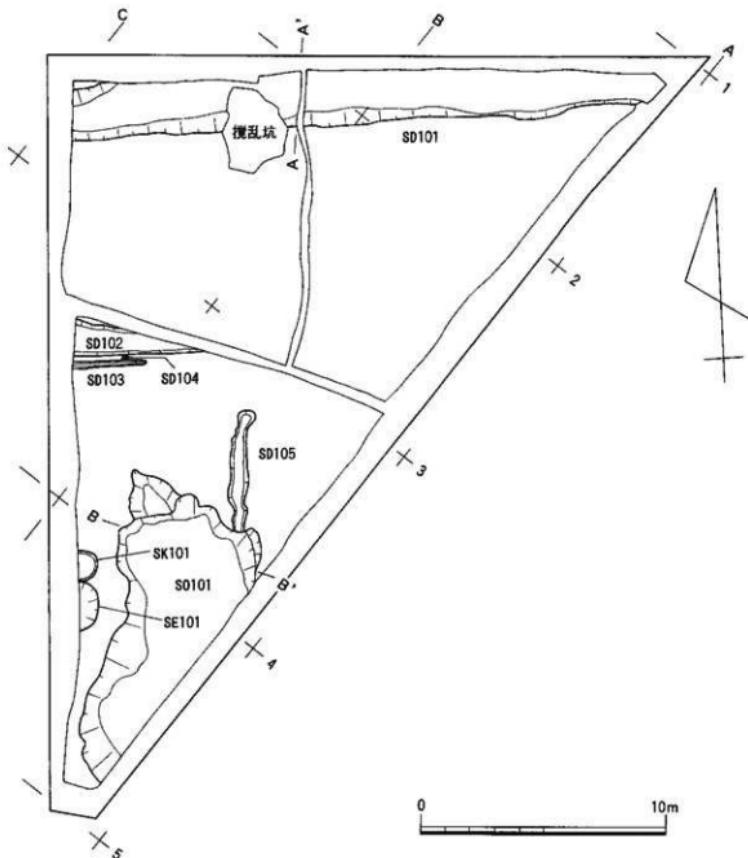


第3図 基本層序：調査地東壁（垂直：S = 1/40、水平：1/200）

第3節 検出遺構と出土遺物

<第1次面>

標高約6.3mを測る第5層上面にあたる。主に1区で調査を実施し、井戸1基(S E101)・土坑1基(S K101)・溝5条(S D101~105)・落ち込み1基(S O101)を検出した。なお2区・3区ではS D101以外は遺構検出を実施していない。

第4図 第1次面平面図 ($S = 1/200$)

S E 101

4 A区で検出した井戸で、層位的には旧耕土直下から掘り込まれている。井戸枠の構造は上部に井戸瓦枠、下部に桶枠を使用したものである。掘方西部は調査区外に至るため平面形は不明であるが、検出部分は隅丸方形を呈し、直径は約2.1mを測る。掘方埋土は上から灰黄褐色砂礫混じり砂質土（ブロック状）・黄褐色粘質土・灰褐色粘土混じり細砂（ブロック状）・黄灰色細砂が確認できた。

瓦枠は最下段の一部が西部に遺存しており、復元径約75cmで、長辺約30cm・短辺約25cmを測る井戸瓦が、1段に8~9枚使用されていたようである。下部の桶枠は直径約70cmを測り、桶には長さ約89cm・幅8~13cm・厚さ約2.5cmの板が18枚使用されている。枠内埋土は上から灰黄色砂礫混じり粗砂・灰色砂礫混じり粗砂・灰褐色粘土ブロック混じり粗砂・青灰色系砂混じり粘質シルト～シルトである。埋土の上部は埋め戻しの際に充填された土と考えられる。桶枠は二段目までを確認したが、機械掘削による断ち割りを試みたところ、下部は湧水のために下層の砂層の崩落が著しく、壁面保護のため途中で掘削を断念したため以下の構造は不明である。二段目の桶は一段目より径の小さいものを使用している。近世以降に通例にみられる井戸で、中河内においては特に若江郡内に多くみられるようである。

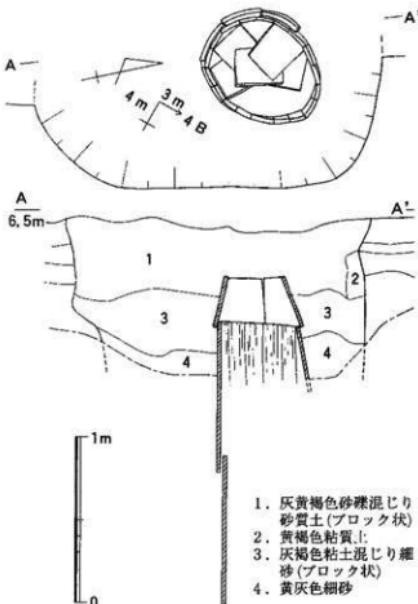
井戸枠内からは井戸廃絶の際に落ち込んだと考えられる井戸枠瓦が多量に出土したが、掘削した範囲まででは他の遺物は全くみられなかった。

S K 101

4 A区、S E 101の北側に隣接する土坑である。西部は側溝掘削により削平したが、調査区西壁には及んでいない。検出部分の平面形は半円形を呈し、直径は約1.3mを測る。断面逆台形で、深さは約0.4mを測る。埋土は上から灰黄褐色細砂混じり粘質土・灰黄色細砂混じり粘質土・灰色細砂混じり粘土である。遺物は出土しておらず、構造の性格・時期等は不明であるが、S E 101に関連するものと考えられる。

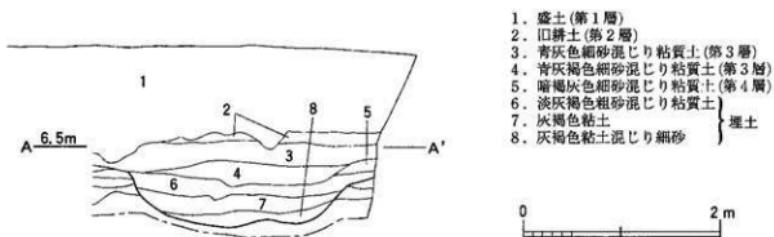
S D 101

調査区北辺を横断するほぼ東西方向（N-89°-E）に直線的に伸びる溝で、検出長は約24mである。両肩を検出したのは西端のみで、ここでは幅約2.3mを測る。中央部での深さは約0.6



第5図 S E 101平面・断面図 (S=1/30)

II 東郷道路第44次調査 (T G93-44)

第6図 SD101西壁断面図 ($S = 1/50$)

mで、底部のレベルは西部・東部でほとんど差は無く全体的にほぼフラットであるといえる。断面形状は逆台形に近く、埋土は上から淡灰褐色粗砂混じり粘質土・灰褐色粘土・灰褐色粘土混じり細砂で、ほぼ瀬水状況が窺え、フラットな底部ということとも合致する。

出土遺物には瓦器・土師器等があり、瓦器皿（1・2）・瓦器碗（3～9）・土師器小皿（10・11）・土師器大皿（12・13）を図化した。

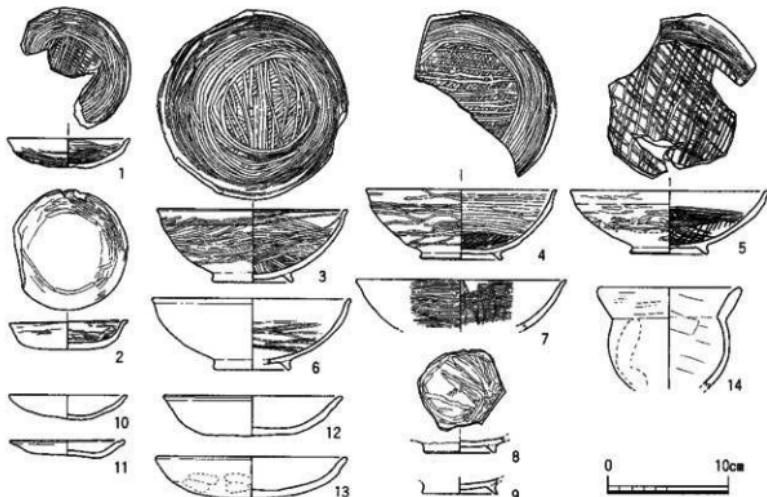
瓦器皿は底部の丸いもの（1）と中央部が平らなもの（2）がある。瓦器では2・6・9が焼成不良で、2の見込みや6の外面は器壁の剥離が著しく暗文は不明である。3の外面ヘラミガキは分削して施されているようであるが明瞭ではない。7は精良な胎土で、内外面のヘラミガキはやや細く密で、内面には口縁部にまで及ぶジグザグ状の暗文を施すものである。これらの特徴から大和型瓦器碗である可能性もあるが、破片でもあり口縁端部内面の沈線も認められず断定はできない。土師器皿は直径約9.5cmの小皿（10・11）と、約15cmの大皿（12・13）がある。いずれも器壁の剥離が著しい。「て」の字状口縁の小皿（11）は、内面の一部が煤けており灯明皿の可能性がある。

これらの遺物の時期であるが、瓦器碗についてみるとやや幅があるようで、平安時代後期頃、11世紀後半から12世紀代に比定されよう。遺存状況の良好な3～5では、形態や暗文・ヘラミガキの様相から3→4→5という変遷が窺える。3は2B区最下層、溝底部に張り付く状態での出土を確認しており、出土土器の時期幅が溝の機能していた時期幅を反映しているものと捉えられる。他にV様式系小型甕（14）等の古墳時代前期の土器も出土している。14は体部外面に黒斑を有する。

なお当溝は、規模や埋土の状況、また出土遺物の時期からみて、東約30mで実施した第21次調査地（T G86-21）において検出されたSD1に連続する可能性がある。SD1は灰色粘土・シルト混じり粘土を基調とする埋土を呈し、平安時代末期頃の瓦器碗等が出土している。連続する溝である場合、SD1は北東-南西方向に直線的に伸びる溝であることから、当SD101はさらに東に伸びた後、やや北に方向を変えるものと推定される。

SD102

3B区で検出した東西方向の直線的な溝で、規模は検出長約5.3m・幅1.0m～1.5m・深さ約15cmを測る。断面ほぼ逆台形を呈し、埋土は灰褐色細砂混じり粘質土の単層である。遺物は出土していない。



第7図 SD 101出土遺物 (S = 1/4)

SD 103

3B区、SD 102の南側に平行する直線的な溝である。規模は検出長約3.0m・幅約25cm・深さ約5cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はSD 102と同様灰褐色細砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

SD 104

3B区、SD 102とSD 103に直交し、両溝を繋ぐ溝である。規模は検出長約0.2m・幅約15cm・深さ約3cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は両溝と同様灰褐色細砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

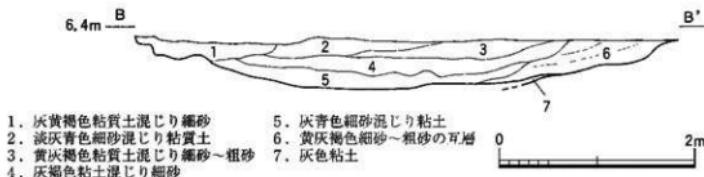
SD 105

3A区で検出したやや蛇行する南北方向の溝である。規模は検出長約5.0m・幅0.5m~0.7m・深さ3cm~15cmを測り、断面皿状を呈し、埋土は黄灰褐色細砂~粗砂である。後述するSO 101北部から派生する溝であり、埋土の状況からみてもSO 101と同様の性格で河川の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

SO 101

調査区南部、3~4A区で検出した大規模な落ち込みである。検出部分の平面形は長方形に近いもので、長辺約12.0m×短辺約6.0mを測り、深さは北部で約0.5m、南部で約1.0mを測る。

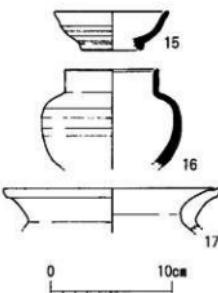
断面形状は東西断面をみるとほぼ皿状を呈しているが、南北断面では北肩部がオーバーハング気味である。埋土は黄灰褐色系の細砂~粗砂を基調とするもので、灰青色系の細砂混じり粘土が互層状に介在している。下層ではラミナも認められる。



第8図 S O101北壁断面図 (S = 1/50)

遺構の性格としては、埋土の状況からみて河川の痕跡と考えられ、河床の落ち込んだ部分にあたるものと捉えられる。底部の形状や北部の肩の状況から、南から北の流路方向が想定でき、北肩のオーバーハング気味の状況は、河川屈曲部にみられる打撃面を示すものかもしれない。

出土遺物は少量で、灰釉陶器皿(15)・須恵器短頸壺(16)・V様式系甕(17)を図化した。15は高台部内側を除いて灰色の釉が掛かり、内面は釉が厚く灰緑色を呈する。器壁には黒色粒が多く認められる。16は肩部以下回転ヘラケズリで、色調は外表面が灰色、内面は暗灰緑色を呈する。15は平安時代頃に、16は飛鳥時代頃に比定されよう。



第9図 S O101出土遺物 (S = 1/4)

（第2次面）

標高約6.0mを測る第6層上面、及び第7層上面で、掘立柱建物3棟(S B201~203)・土坑7基(S K201~207)・溝6条(S D201~206)・ピット32個(S P201~232)を検出した。ピットのうち掘立柱建物を構成するものはS P204~211・213~216・221~224・228である。

S B201

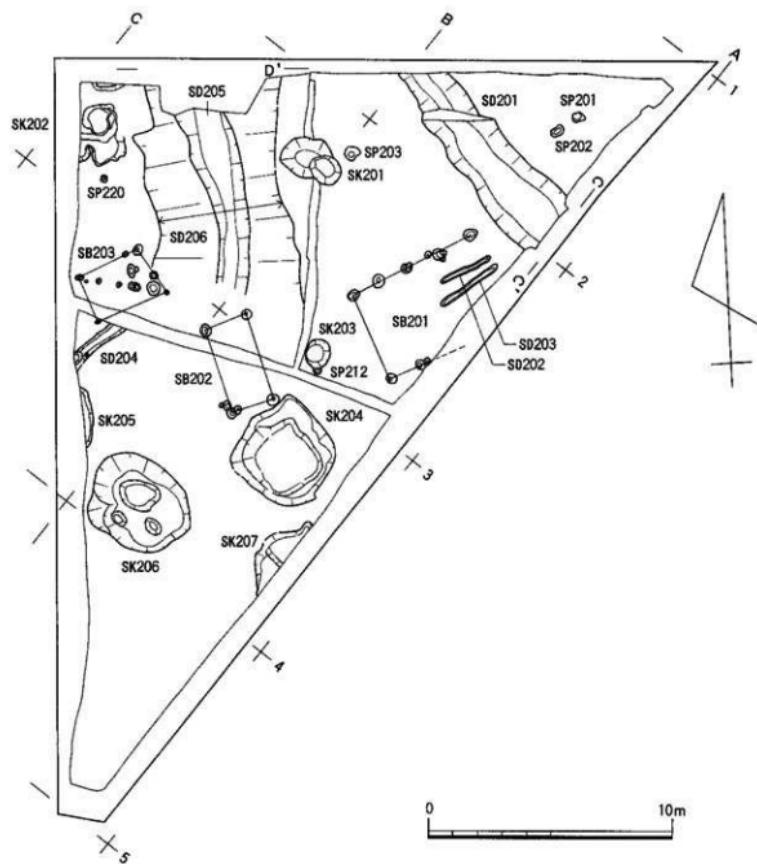
2A区で検出した平面長方形の掘立柱建物で、S P204~211で構成される。検出部分の規模は南北約3.7m×東西約5.3mを測り、主軸はN-約65°-Eである。柱構成は南北1間×東西4間で、柱間距離は南北約3.7m・東西1.2m~1.5m、ピットは直径40cm~50cmを測る。なお建物西部に位置しているS P212は、棟持柱の可能性がある。また建物内部に位置する溝S D202・203は方向が建物主軸と一致しており、何らかの関連をもつ溝と考えられよう。

各ピットの法量等は表2にまとめた。

遺物はS P204・207~210から古墳時代前期頃に比定される土器片が出土しているが、図化されたものはS P208からの高杯(120)・甕(121)のみである。

S B202

2~3A区で検出した南北1間×東西1間の平面長方形の建物で、S P213~216で構成される。規模は南北約3.6m×東西約1.8mを測り、主軸はN-約73°-Eである。南北辺の寸法や建物の方向性からS B201との共通性が認められ、ピットも直径40cm~50cmを測り近い規模であるといえる。ピットの法量等は表2にまとめた。

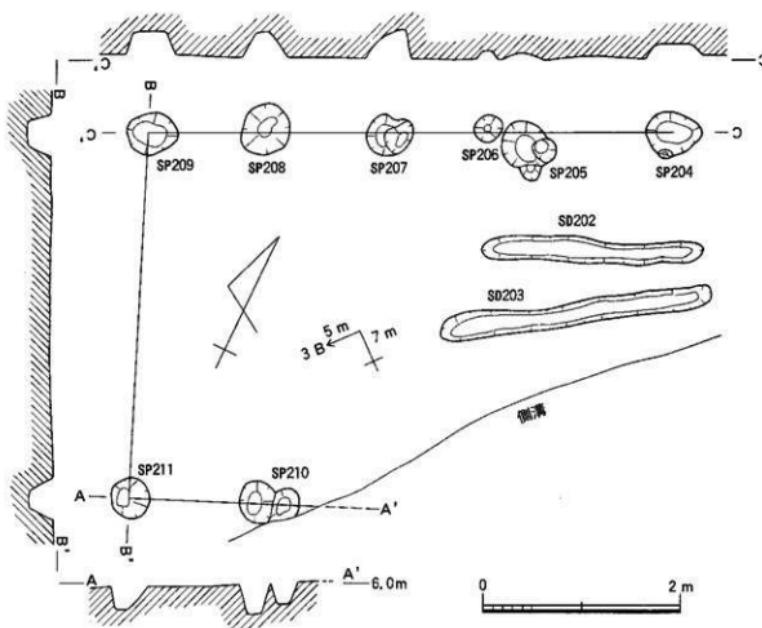


第10図 第2次面平面図 ($S = 1/200$)

遺物は S P 214・215から古墳時代前期頃に比定される土器片が出土しているが、小片のみで図化しえるものはなかった。

S B 203

3 B 区で検出した南北 1 間 × 東西 1 間の長方形の建物で、S P 221～224・228で構成される。検出部分の規模は南北約2.0m × 東西約2.6mを測り、主軸はN-約66°-Eである。ピットは直徑15cm～55cmを測る。建物の方向性には S B 201・202との共通性が認められる。また S P 225～227・229～232も建物に関連するピットかもしれない。



第11図 SB 201平面・断面図 (S = 1/50)

なお、南東角が直角にならず (SP 222・228)、また南西角のSP 223のレベルが他のピットに比してやや高いことから、建物とするには無理があるかもしれない。この場合、東西方向に一列に並ぶSP 222・224~228を柵列等と考えることもできよう。

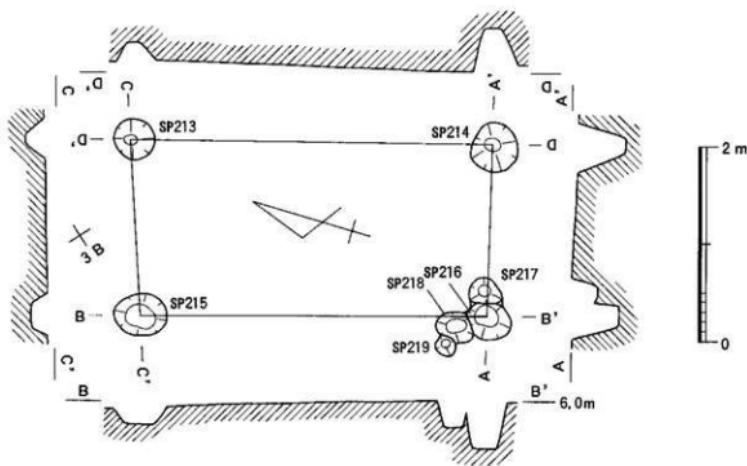
各ピットの法量等は表2にまとめた。

遺物はSP 221・222・226・228から古墳時代前期頃に比定される土器片が出土しているが、小片のみで図化し得るものはなかった。

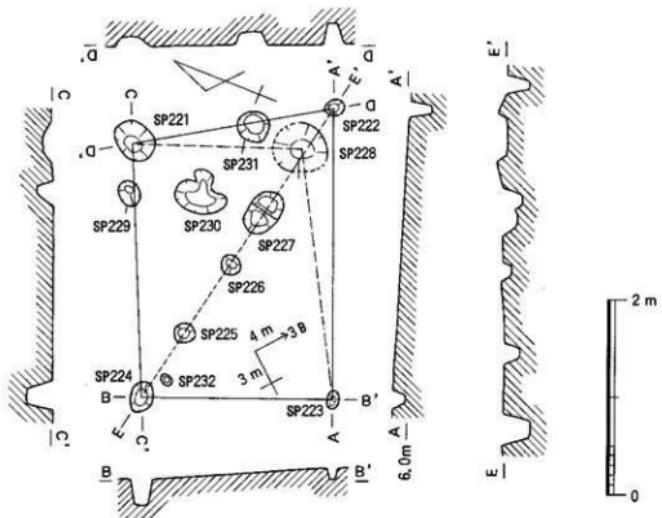
S K 201

2 A~B区で検出した土坑である。平面形は長辺約2.5m×短辺約1.7mの不定形を呈し、その形状から北西~南東方向に二つの遺構が切り合っている可能性があるが、中央部が側溝に重複したため明確にはできなかった。断面形状は半円形に近いもので、深さは西部で65cm、東部で46cmを測る。埋土は上から、暗黄灰褐色細砂混じり粘土・褐灰色粗砂混じり粘土・暗灰褐色微砂混じり粘土である。

遺物は主に西部から出土している。布留式期古相までに比定される土器や少量の木片があり、壺(18~23)・鉢(24)・高杯(25)・布留式期古相の壺(26~34)・庄内式期新相の壺(35~



第12図 SB 202平面・断面図 ($S = 1/50$)



第13図 SB 201平面・断面図 ($S = 1/50$)

36)・V様式系壺(37・38)を図化した。他に叩き石(39)がある。このうち18・21・34・37は西部最下層の出土である。そして大型の壺(23)は西部上層で体部片を敷き並べたような出土状況であった。また22・25は2区西側溝掘削時の出土であり、東部遺構の遺物である可能性がある。

壺(18・19・21)は外面をヘラミガキする精製品である。18・19は底部外面ヘラケズリで、底部には黒斑を有する。26は典型的な吉備系の形態のもので、口縁部外面に櫛描直線文、体部外面には縱方向のヘラミガキを施す。

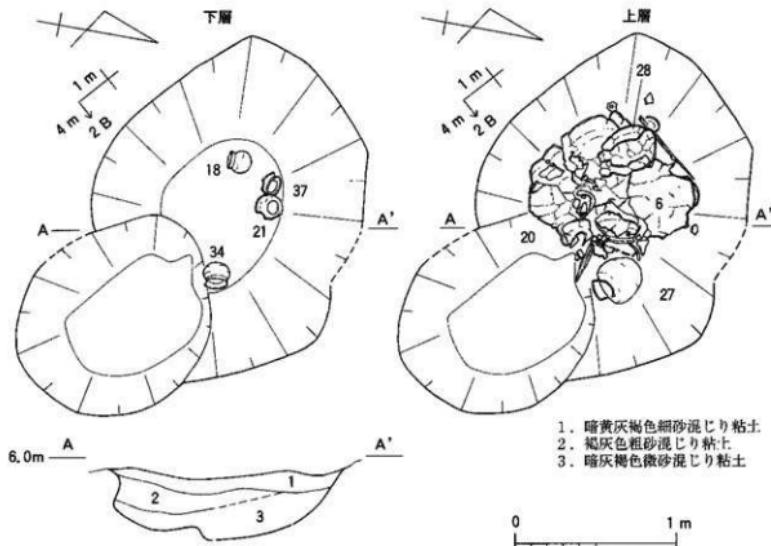
27・28はいわゆる布留式傾向壺である。口縁部や口縁端部の形態、全体のプロポーション、及び調整はやや異なるが、法量的には非常に近似している。29は肩部内面下位をユビオサエし、このため肩部-体部間がやや稜を成している。32の肩部内面の指頭圧痕部分にはタタキ状の模様が認められる。布等の皺の痕跡かもしれない。34は外面全面に炭化物が付着し黒色を呈する。

大型の叩き石(39)は両端面に使用痕が認められる。

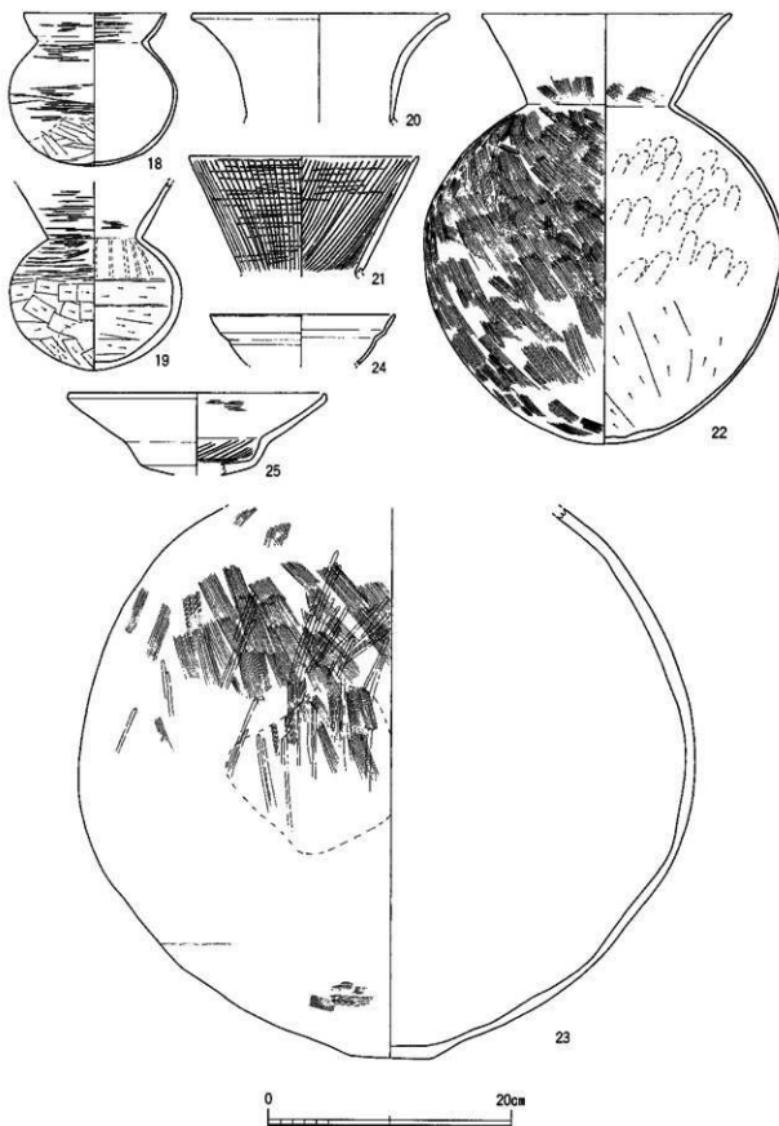
壺の数点については胎土分析を行っており、吉備(36)・加賀南部(27・28・29・30)・河内恩智(32)・加賀?(34)・摂津(37)・播磨(38)、と多くの地域から搬入されているようである。詳細は第4節に記している。

S K 202

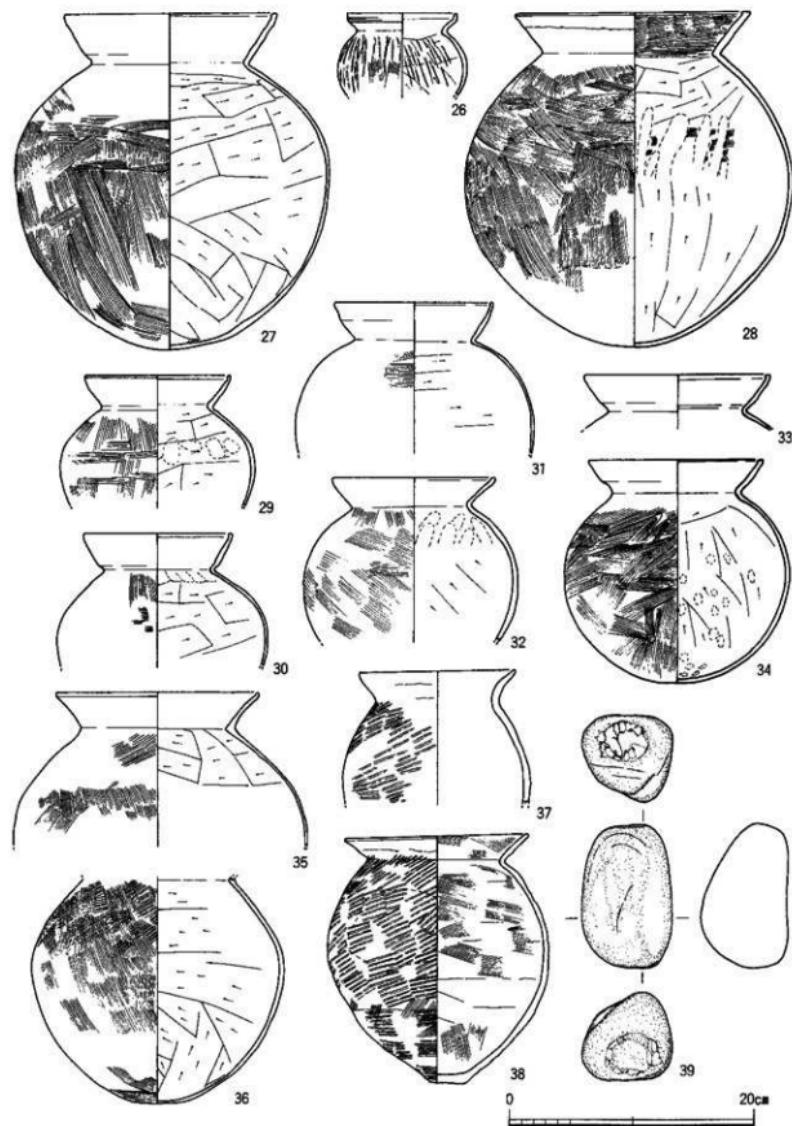
2B区で検出したもので、一応土坑とした。上部はSD 101に削平されており、平面形は不明である。規模は南北3.4m以上・東西1.8m以上を測り、北部・西部は調査区外に続く。掘方は二段掘りを呈しており、底部中央部は直径約1.3m・深さ35cm~55cmの平面不定形な袋状土坑にな



第14図 SK 201平面・断面図 (S = 1/30)



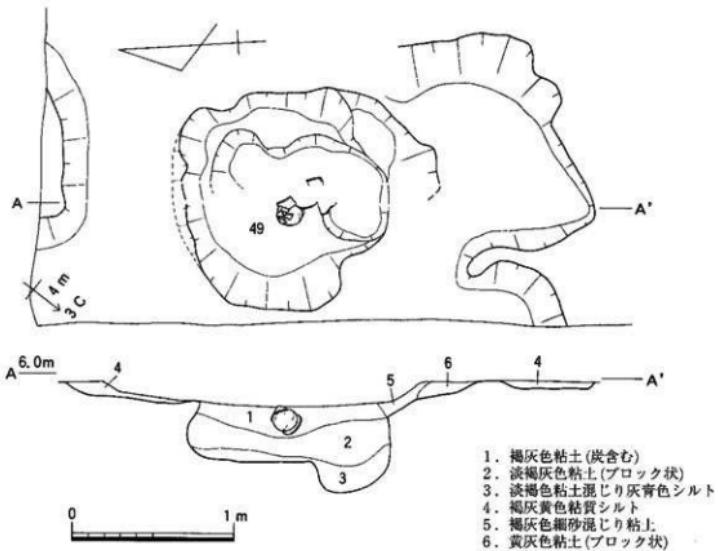
第15図 SK201出土遺物① (S = 1/4)



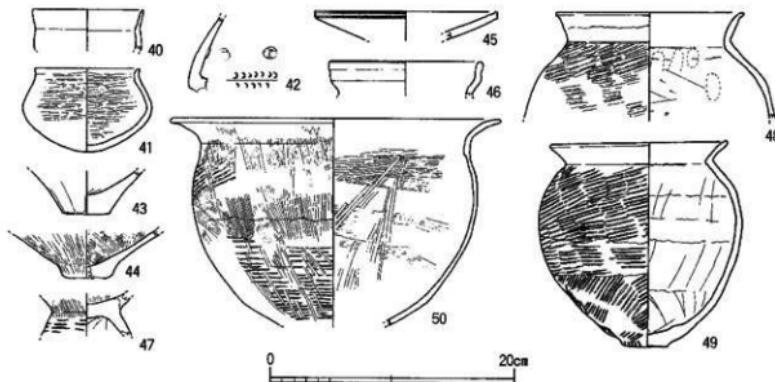
第16図 SK 201出土遺物② (S = 1/4)

つている。また一段目底部は凹凸が著しい。埋土は上部がおおまかにみて褐灰色系粘土、袋状土坑部が上から褐灰色粘土（炭含む）・淡褐灰色粘土（ブロック状）・淡褐色粘土混じり灰青色シルト（ブロック状）である。

出土遺物には庄内式期古相に比定される土器があり、小型壺（40・41）・壺（42～44）・器台（45）・壺（46～49）・鉢（50）を図化した。



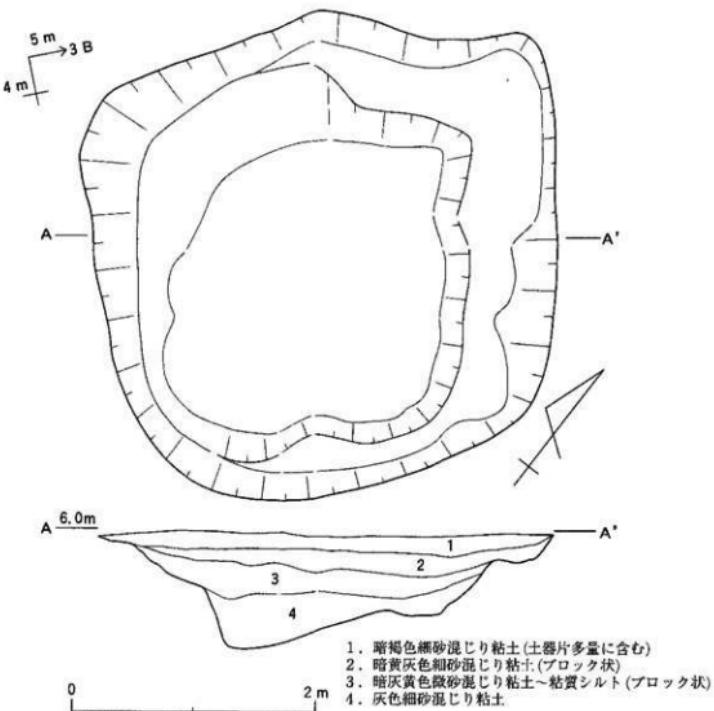
第17図 SK 202平面・断面図 (S = 1 / 30)



第18図 SK 202出土遺物 (S = 1 / 4)

41は外面横方向のヘラミガキで、色調は明褐色、断面では暗灰色がサンドイッチされる。形的には出雲から北陸地方において小型無頸壺形土器に分類されているものである。八尾市域では亀井北遺跡^{註19}で環状把手付きのものが出土しているが、本例は把手の有無は不明である。42は頸部下位に竹管円形浮文、頸部～体部間に付した突帯の上下面に半載竹管文を施している。45は器台としたが明確な器種は不明である。口縁端部に凹線が巡り、その上下には細かい刻み目を施している。46は淡灰褐色で、外面は黒灰色を呈する。口縁部形態は山陰地方の甕に類似する。47は台付き甕であろう。東海系の台付き甕の影響が考えられる。50はあまり類例の無い鉢であるが、播磨では通有にあり、東播・揖津にもみられるようである。これらの土器から遺構の時期はおおむね庄内式期古相に比定される。またいわゆる庄内甕の破片は数点がみられるのみであり、庄内甕をほとんど含まない最古段階に位置付けられる遺構といえよう。

なお胎土分析によるこれらの土器の産地は、河内恩智（40）・高安山麓（43）・生駒西麓（48）・在地（44）・在地？（42）・土師里（45）・但馬（41）・播磨（49・50）・湖東（46・47）、とバラエティーに富んでいる。詳細は第4節に記している。



第19図 SK 204平面・断面図 (S = 1/40)

S K 203

2 A 区で検出した土坑で、平面橢円形を呈し、規模は長辺約1.2m×短辺約1.0mを測る。断面逆台形で、深さは48cmを測り、埋土は上から淡褐色細砂混じり粘土・灰色シルト混じり粘土（ブロック状）・暗灰色シルト混じり粘土（ブロック状）である。遺物は庄内式期新相～布留式期古相の土器片が出土しているが、図化したものはなかった。

S K 204

3 B 区で検出した土坑で、平面形は一辺約3.8mのやや方形を呈する。掘方は二段掘りになっており、断面形状は逆凸形に近い。埋土は上から暗褐色細砂混じり粘土・暗灰黄色細砂混じり粘土（ブロック状）・暗灰黄色微砂混じり粘土～粘質シルト・灰色細砂混じり粘土である。遺物はほとんど最上層からのもので、古墳時代前期の土器が多く出土しているが細片が多い。遺構の性格としては素堀り井戸が考えられ、遺物の出土状況から最終的に廃棄坑として利用されたものと考えられる。

出土遺物は庄内式期古相の土器を主としている。図化したものはV様式系壺（51～60）・庄内式期壺（61～65）・高杯（66～69）・複合口縁壺（70～72）・壺（73～77）・製塩土器（78）・鉢（79～85）である。壺はV様式系のものが多い。

V様式系壺（51）は三分割成形によるもので、外面には粗なハケを施す。70・71は口縁部外面に竹管円形浮文を巡らせる。72は非常に精良な胎土である。73は壺としたが器種不明である。75は上げ底状の底部外面に葉脈痕・ヘラ記号がある。78は上部が欠損しているため器種は明確ではないが、脚台内面が淡いピンク色を呈しており、これは二次焼成に起因するものと捉えられ、製塩土器に通例みられる特徴といえる。脚台Ⅱ式に分類される製塩土器であろう。同様の製塩土器は、南東約100mで実施された当遺跡第14次調査（T G82-14）S K 5・S K 17に出土例がある。^{参考}82は片口を有する鉢である。胎土分析では、51・59が播磨、75が河内恩智？である。

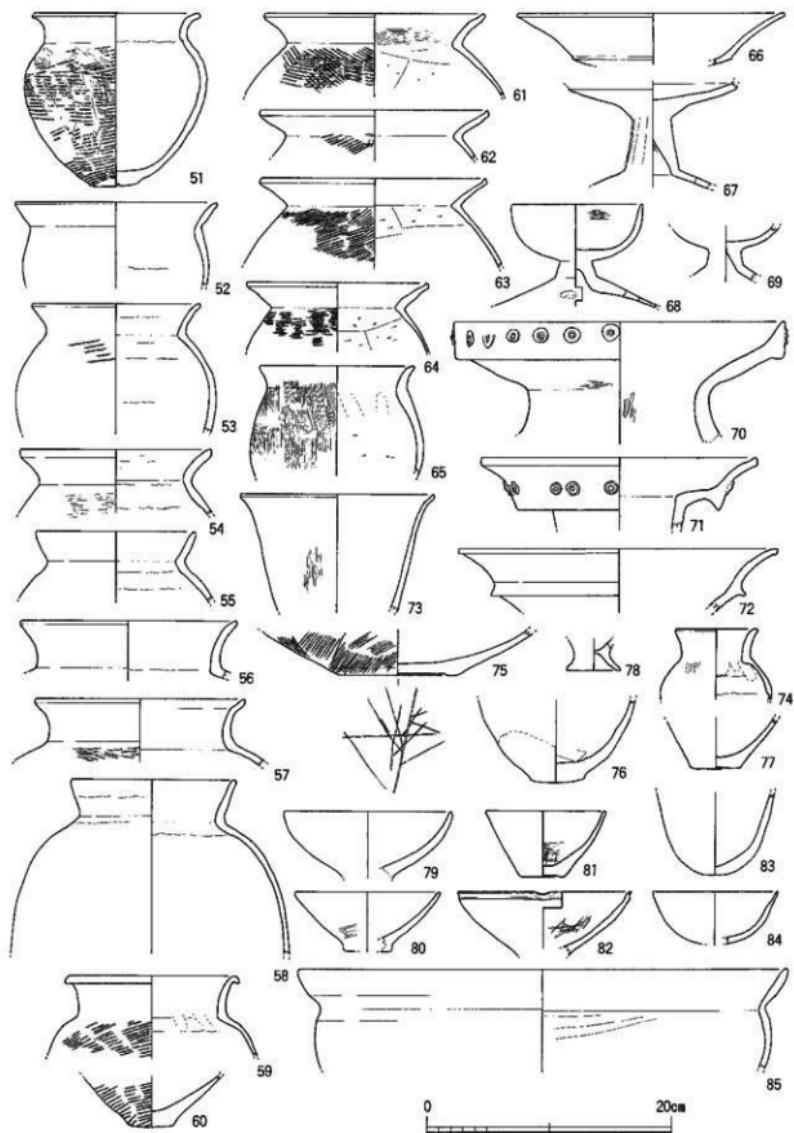
S K 205

3 B 区で検出した土坑で、西部は調査区外に至る。検出部分の平面形状は弧状を呈し、規模は長辺約2.4m・短辺約35cmを測る。断面皿状で、埋土は上層が褐灰色細砂混じり粘質土、下層が暗褐色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

S K 206

3 A 区、S K 204の南西部で検出した。平面形は長辺約4.4m×短辺約3.5mの不整円形で、底部には三か所に凹みがみられ、深さは0.5m～0.9mを測る。断面形状は逆台形に近いもので、東部はS O101によって削平されている。埋土は上から褐灰黄色細砂混じり粘質土・黄灰色粗砂混じり粘質土・灰色粗砂混じり粘土（ブロック状）・暗青灰色砂礫混じり粘土（ブロック状）で、下層部分はブロック状を呈している。遺構の性格としては、S K 204と同様素堀り井戸が考えられよう。出土遺物が南東部の上層に集中しており、井戸としての機能が停止した後に廃棄坑とされ、南東部から土器が廃棄されたという状況が窺える。なお壺（99）のみがやや離れて中央付近から出土している。

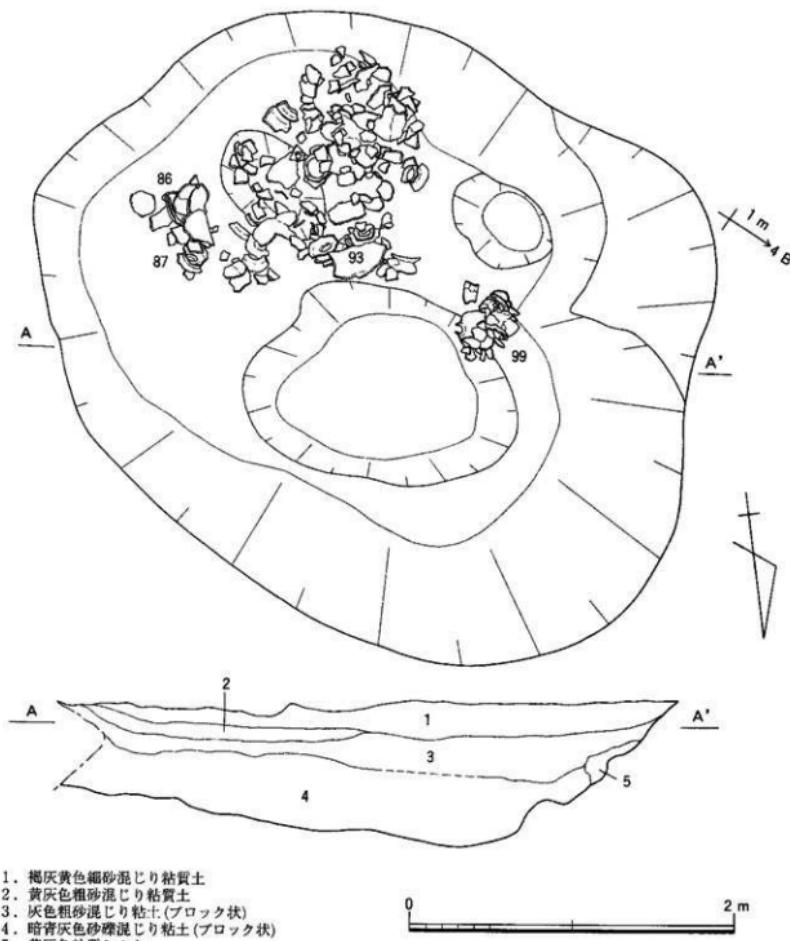
出土遺物は庄内式期古相を主とする土器で、やや新相のものを含んでいる。また時期的にみてほぼS K 204と併行すると思われる。図化したものは複合口縁壺（86～93）・壺（94～102）・庄内式期壺（103～108）・V様式系壺（109～112）・器台（113・114）・高杯（115）である。



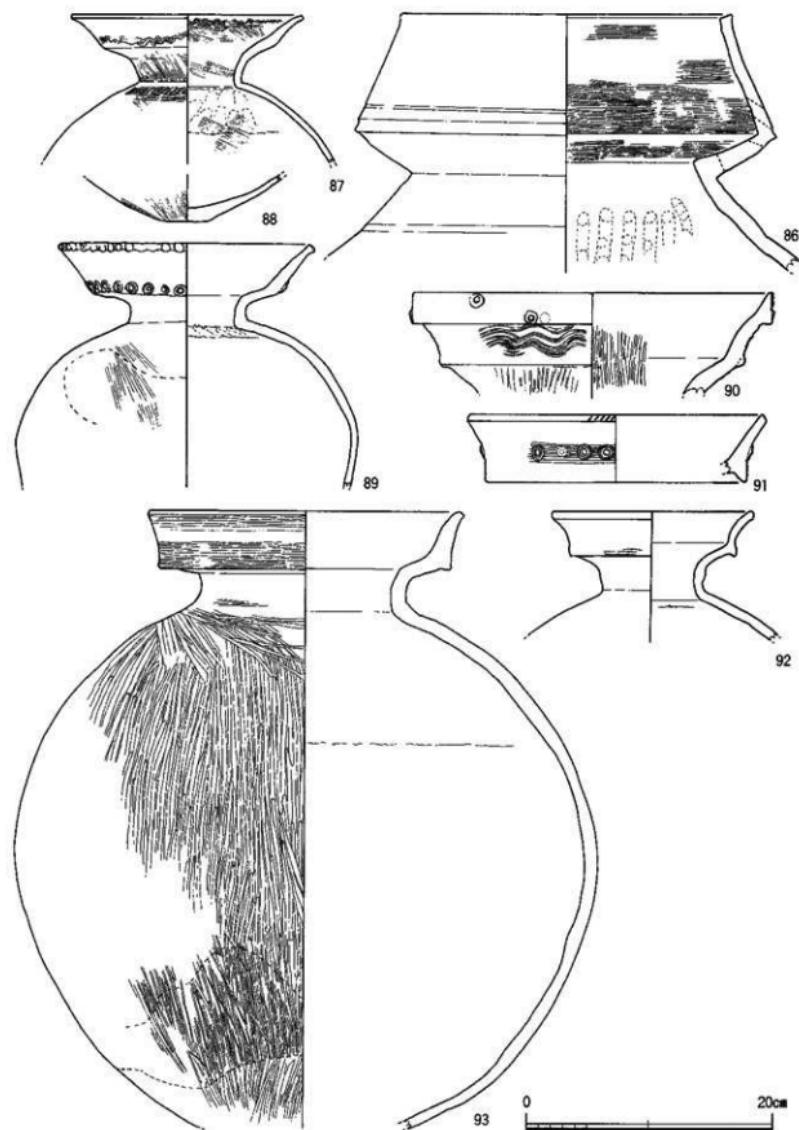
第20図 SK 204出土遺物 (S = 1/4)

器種からみた出土土器の様相では、複合口縁壺を含めたいわゆる加飾壺の量が多いことが特筆されよう。

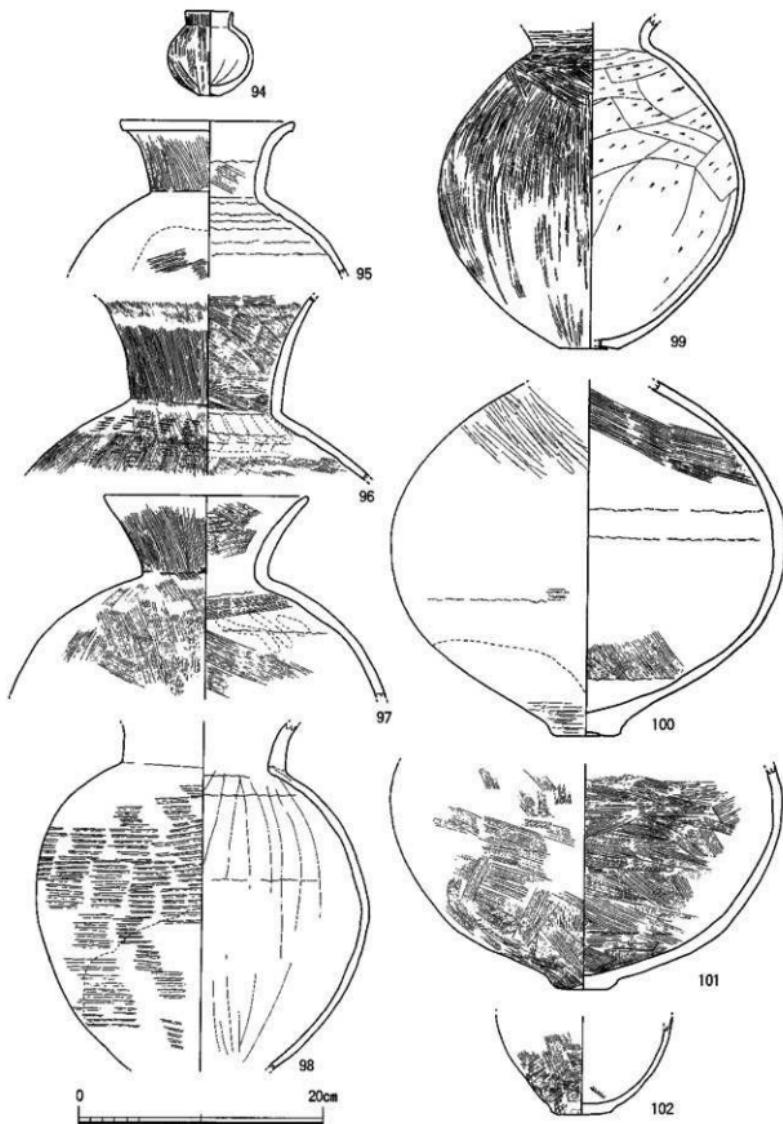
大型の複合口縁壺（86）は、西部瀬戸内系・讃岐系とされている形態の壺で、頸部の立ち上がりが無いタイプである。口縁部内面が黒色を呈し、煤の付着か、あるいは漆を塗布している可能性もある。中河内地域では加美遺跡（KM84-1）の方形周溝墓（4号墓）から出土している¹²²が、このタイプの類例は少ない。87は口縁部内外面と肩部に波状文を施し、色調は褐色～黒色を呈す。



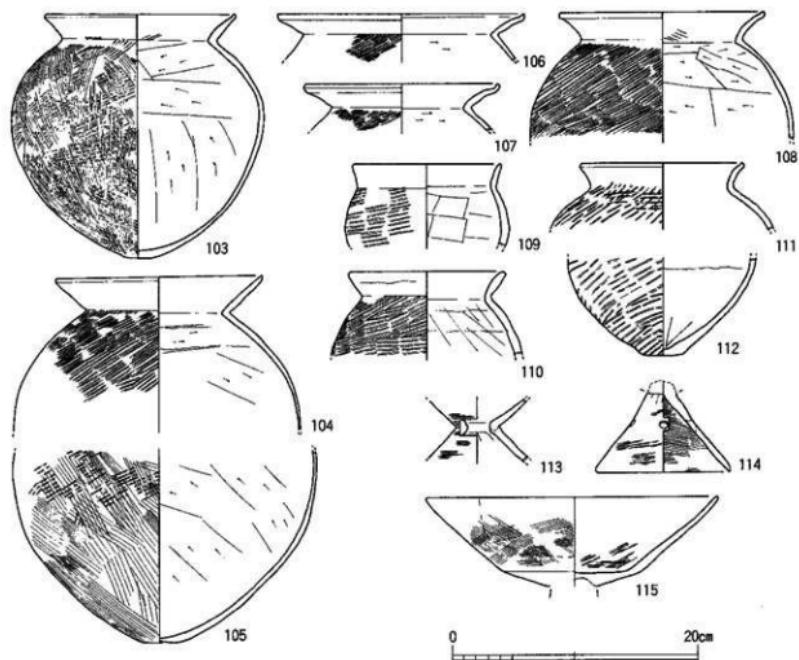
第21図 SK 206平面・断面図 (S = 1/30)



第22図 SK 206出土遺物① (S = 1 / 4)



第23図 SK 206出土遺物② ($S = 1/4$)



第24図 SK 206出土遺物③ (S=1/4)

呈する。88は胎土等の特徴から87の底部と考えられる。89～91は口縁部外面や口縁端部を竹管円形浮文や櫛描文で加飾する。93は口縁部外面を櫛描する特徴から吉備地方産であろう。94と99には、底部上げ底状で、体部外面を縱方向にヘラミガキするという共通性が認められる。98は徳島県黒谷川郡頭遺跡出土品に類似している。これは、口縁部が直立した後、屈曲して水平近くに開くものである。庄内式期壺は104～108がいわゆる生駒西麓産である。104と105は同一個体と思われる。106の肩部外面にはヘラ記号状の線刻が認められる。V様式系壺は111・112が胎土・調整等の特徴から同一個体と思われる。タキが口縁部にまで及び、口縁部は叩き出しによるものであろう。

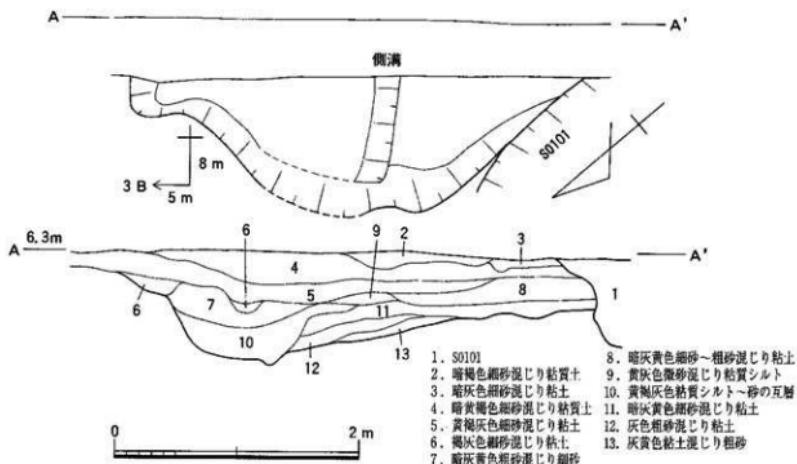
胎土分析による産地は、河内恩智（97・104～108・110・115）・河内恩智？（102・109）・高安山麓（113）・在地（99）・播磨（91・92・94・96・103）・播磨？（90）・讃岐（86～88・100・101）・讃岐？（89・98）・伊予？（111・112）・吉備（93）・湖東（95）、とバラエティに富む結果であった。詳細は第4節に記している。

壺は讃岐・播磨・吉備といった瀬戸内地域からの搬入品が多くを占め、壺は河内恩智の在地のものが多いという傾向が窺える。

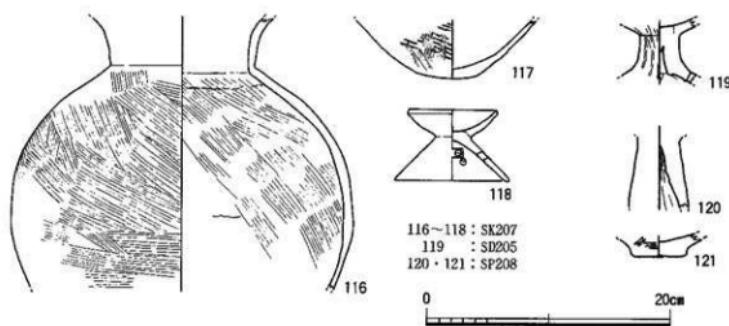
S K 207

3 A区、S K 204の南約1.0mで検出した土坑で、東部は調査区外に至り、南部はS O 101に削平されている。検出部分の平面形はほぼ半円形を呈し、規模は長辺約3.7m・短辺約1.2mを測る。深さは30cm～75cmを測り、北部が深くなっている。埋土は全体的にみて褐色～黄灰色粘土と灰黄色系細砂～粗砂の複雑な堆積を呈し、北部の最深部には黄褐色粘質シルト～砂の互層が堆積している。埋土は水成層の様相である。

遺物は庄内式期古相～新相の土器が出土しており、壺（116）・甕（117）・器台（118）を図化した。



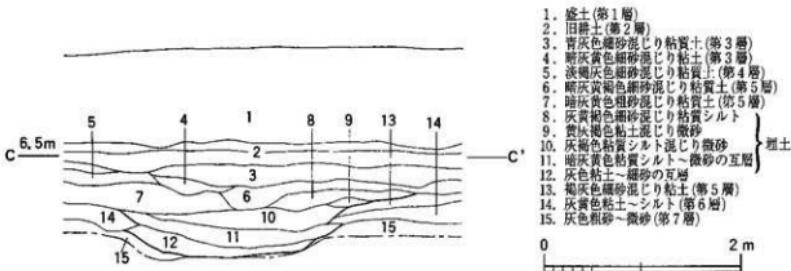
第25図 SK 207平面・断面図 (S = 1/40)



第26図 SK 207・SD 205・SP 208出土遺物 (S = 1/4)

SD 201

1 A区で検出した北西-南東方向の溝で、検出長約9.2mを測る。幅2.2m~2.8mを測り、断面逆台形で、深さは約56cm、底部のレベルは北部がやや高くなっている。埋土は全体的にみて暗灰黄色~灰色の微砂~粘土の互層状を呈し、流水していた状況であり、肩部では第6層が落ち込んでいる。遺物は出土していない。



第27図 SD 201南東壁断面図 (S = 1/50)

SD 202

2 A区で検出した北東-南西方向の溝で、検出長約2.2mを測る。断面皿状で、深さは約4cmを測り、埋土は暗褐灰色細砂混じり粘土である。性格としてはSB 201との有機的な関係が考えられる。遺物は出土していない。

SD 203

2 A区、SD 202の南側に平行する溝で、検出長約2.8mを測る。断面皿状で、深さは約4cmを測り、埋土はSD 202と同様、暗褐灰色細砂混じり粘土である。SD 202と同様に、SB 201に関係する溝であろう。遺物は出土していない。

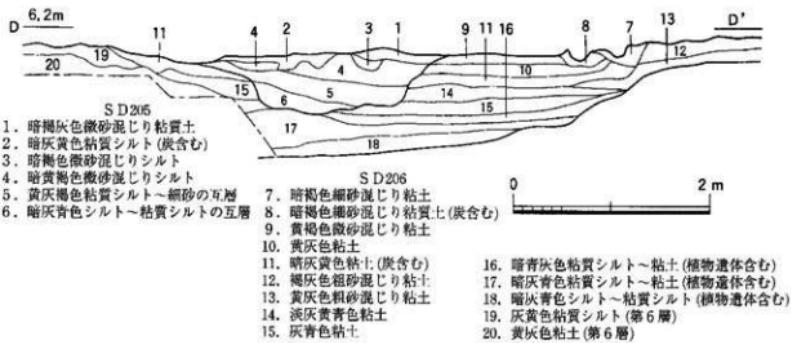
SD 204

3 B区で検出した北東-南西方向の溝で、検出長約2.2mを測る。断面皿状を呈し、深さは10cm~18cmを測り、底部のレベルはほぼフラットである。埋土は褐灰色微砂混じり粘土である。庄内式期頃の土器片が出土しているが、図化したものはなかった。

SD 205・206

平面的に検出・掘削を行ったのは3区のみであるが、第7層の砂層をベースとしており、調査区西部を南北方向に縦断する溝と考えられる。

SD 206は規模は幅5.0m~6.0m・深さ約1.0mで、埋土はおおまかにみて上層が黄褐灰色系の砂混じり粘土、下層が暗灰青色系の粘土~シルト（植物遺体含む）で、SD 201と同様、肩部付近では上・下層間に第6層が落ち込む状況である。SD 205は幅1.2m~1.9m・深さ約0.6mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はおおまかにみて上層が暗褐色系砂質土（炭含む）、下層が灰黄青色系の細砂~粘土の互層である。SD 206の最終段階の堆積部分と考えられ、流路は重複している。遺物は弥生時代後期末から庄内式期の土器片が少量出土しており、図化したのは高杯(119)のみである。



第28図 S D 205・206北壁断面図 ($S = 1/50$)

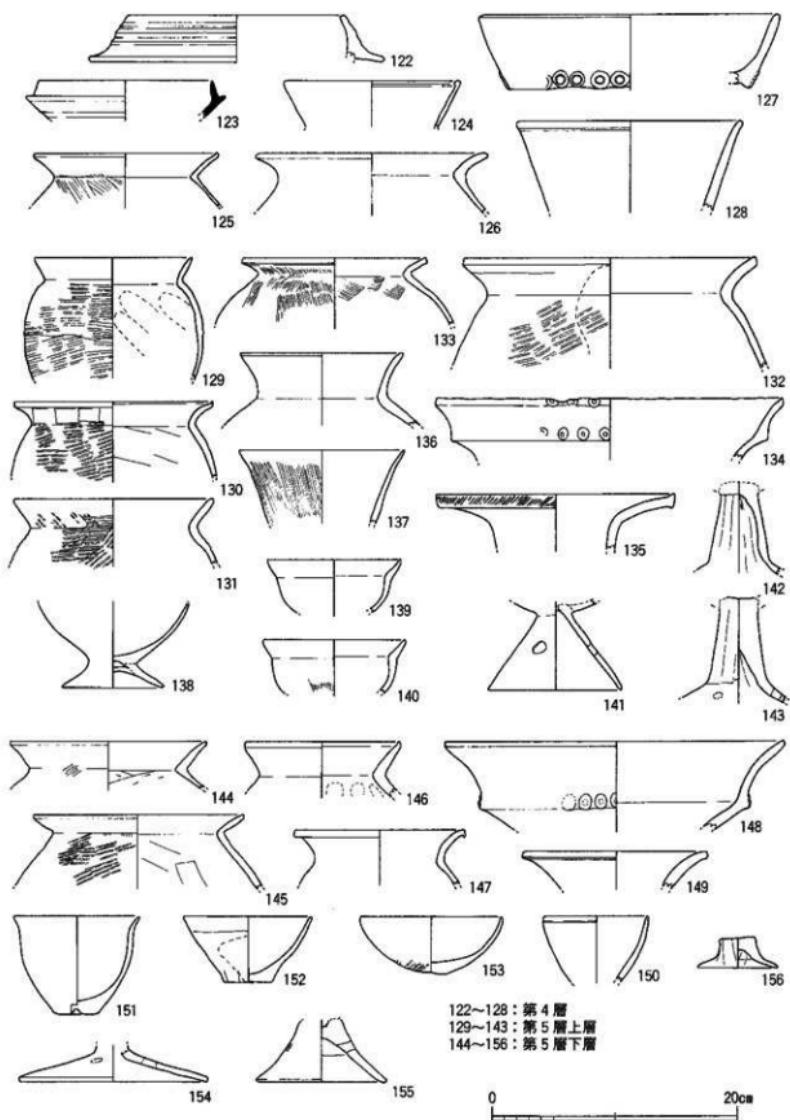
ピット

掘立柱建物を構成すると思われるピットを除くと出土遺物は少量で、S P 201・203から古墳時代前期に比定される土器片が出土しているが、小片のみで、図化したものはなかった。

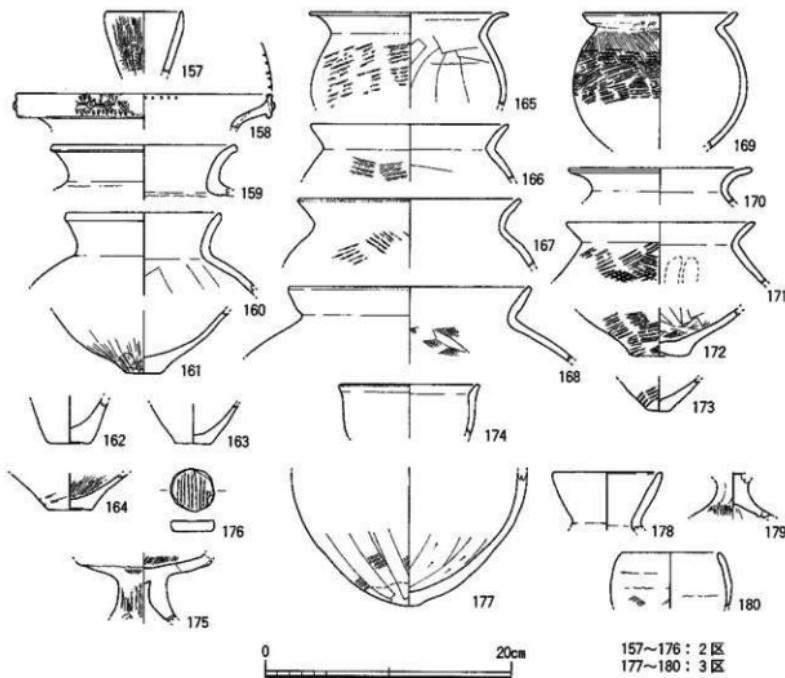
法量等は表2にまとめた。

| SP | 地区 | 平面形 | 径 | 深さ | 基上(上から) |
|-----|-----|-----|-------|----|-------------------------------------|
| 201 | 1 A | 不定形 | 63×35 | 13 | 暗褐色細砂混じり粘土・暗灰黄色シルト |
| 202 | 1 A | 偏円形 | 58×40 | 3 | 暗褐色細砂混じり粘土 |
| 203 | 2 A | 不定形 | 57×51 | 19 | 暗褐色細砂混じり粘土 |
| 204 | 2 A | 椭円形 | 56×45 | 11 | 暗褐色細砂混じり粘土・灰色細砂混じりシルト |
| 205 | 2 A | 不定形 | 62×47 | 25 | 暗褐色細砂混じり粘土・灰色細砂混じりシルト |
| 206 | 2 A | 円形 | 30×26 | 8 | 暗褐色細砂混じり粘土 |
| 207 | 2 A | 不定形 | 50×43 | 28 | 暗褐色細砂混じり粘土・灰色細砂混じりシルト |
| 208 | 2 A | 椭円形 | 54×50 | 26 | 暗褐色細砂混じり粘土・灰色細砂混じりシルト |
| 209 | 2 A | 偏円形 | 50×40 | 23 | 暗褐色細砂混じり粘土・灰色細砂混じりシルト |
| 210 | 2 A | 偏円形 | 60×40 | 29 | 褐色細砂混じり粘土 |
| 211 | 2 A | 円形 | 41×40 | 23 | 褐色灰粘質土・暗灰褐色細砂混じり粘土・淡灰褐色粘質シルト |
| 212 | 2 A | 円形 | 30×26 | 7 | 褐色細砂混じり粘土 |
| 213 | 2 A | 円形 | 43×40 | 20 | 暗灰褐色土上混じり細砂 |
| 214 | 3 A | 円形 | 50×46 | 52 | 暗黄褐色細砂混じり粘土・暗褐色細砂混じり粘土(黄灰色粘土ブロック含む) |
| 215 | 3 A | 椭円形 | 52×43 | 15 | 暗灰褐色土上混じり細砂・灰色微砂 |
| 216 | 3 A | 椭円形 | 47×39 | 48 | 灰青色粘質シルト・淡褐色細砂混じり粘質シルト |
| 217 | 3 A | 偏円形 | 35×27 | 27 | 灰青色粘質シルト・淡褐色細砂混じり粘質シルト |
| 218 | 3 A | 椭円形 | 40×30 | 27 | 暗灰褐色細砂混じり粘質シルト |
| 219 | 3 A | 円形 | 23×20 | 16 | 淡褐色細砂混じり粘質シルト |
| 220 | 2 B | 偏円形 | 28×24 | 15 | 暗灰黄色粘土 |
| 221 | 3 B | 椭円形 | 45×34 | 10 | 暗灰黄色粘土 |
| 222 | 3 B | 椭円形 | 20×18 | 21 | 暗灰黄色粘質シルト～シルト |
| 223 | 3 B | 椭円形 | 20×12 | 12 | 褐色灰粘質土 |
| 224 | 3 B | 椭円形 | 33×23 | 27 | 暗灰褐色粘土 |
| 225 | 3 B | 円形 | 23×21 | 15 | 暗灰褐色粘土・暗青色粘土質シルト |
| 226 | 3 B | 円形 | 22×20 | 9 | 暗灰黄色粘質シルト～シルト・暗青色粘土質シルト |
| 227 | 3 B | 椭円形 | 48×32 | 13 | 暗灰黄色粘質シルト～シルト |
| 228 | 3 B | 偏円形 | 56×50 | 13 | 暗灰黄色細砂混じり粘土(炭含む) |
| 229 | 3 B | 椭円形 | 27×21 | 23 | 暗灰褐色粘土 |
| 230 | 3 B | 不定形 | 53×44 | 8 | 暗灰黄色粘質シルト～シルト |
| 231 | 3 B | 円形 | 35×33 | 12 | 暗灰黄色粘質シルト～シルト |
| 232 | 3 B | 円形 | 14×11 | 9 | 暗灰褐色粘土 |

表2 第2次面ピット(S P 201~232)法量表(cm)



第29図 1区包含層出土遺物 (S = 1/4)



第30図 2・3区包含層出土遺物 (S=1/4)

包含層出土遺物

122~180を図化した。122~128が1区第4層、129~143が1区第5層上層、144~156が1区第5層下層、157~176が2区第5層、177~180が3区第5層の出土である。

1区第4層からは15世紀頃の瓦器羽釜(122)・6世紀代の須恵器杯身(123)等、中世頃までの土器が少量出土しているが、第4・5層出土遺物は古墳時代前期庄内式期の土器が大部分を占めている。

庄内甕(125)は大和型の特徴である外面左上りのタタキを施すものである。

138は台付き鉢と考えられるが、口縁端部が遺存しているかどうか不明確である。脚台を付した後、中央を外から閉塞しており、そのため底部に空間が生じている。胎土は播磨?である。

鉢(153)の胎土は河内恩智である。156は器種不明であるが、蓋であろうか。

甕(169)の胎土は播磨?である。176は土器の破片の周囲を打ち欠いて円形に整形した土製円板である。表面にはハケが認められる。

第4節 土器の表面に見られる砂礫

奥田 尚

1. はじめに

八尾市東郷遺跡44次調査で出土した庄内式併行期の土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。肉眼で観察するのみであるため、粒が細かい砂や粘土の組成は識別できない。観察時、砂礫の種類・色・粒形・粒径・量等について配慮した。粒形は角・亜角・亜円・円に、粒径は目測により裸眼ではmm単位で、鏡下では0.1mm単位で測定した。また、量については非常に多い・多い・中・僅か・ごく僅か・ごくごく僅かの6段階に区分した。観察できた砂礫種を基に砂礫の源岩を推定し、同じような砂礫が遺跡近くで分布する地域を砂礫の採取地と推定した。

2. 砂礫の特徴

同定できた砂礫種は、岩石片として花崗岩・閃緑岩・流紋岩・緑色岩・凝灰岩・砂岩・泥岩・チャート・片岩・蛇紋岩・火山ガラス・鉱物片として石英・長石・黒雲母・角閃石・輝石・橄欖石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色・灰色・淡桃色・淡赤色・赤褐色で、粒形が角・亜角・粒径が最大10mmである。石英・長石・石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰色・暗灰色で、粒形が角・亜角・粒径が最大10mmである。長石・角閃石・石英・長石・角閃石が噛み合っている。角閃石には針状で自形を示すものもある。

流紋岩：色は白色・灰白色・灰色・暗灰色・褐色・黒色・淡桃色・桃色・淡赤色で、粒形が角・亜角・亜円・粒径が最大10mmである。石基はガラス質で、石英や長石、黒雲母の斑晶があるものもある。

緑色岩：色は灰緑色で、粒形が円・粒径が1mmである。玄武岩質の石である。No. 37の資料に含まれる。

凝灰岩：色は灰白色で、粒形が円・粒径が1.5mmである。白色の基質に自形の石英が多く含まれる柔らかい粒である。No. 113の資料に含まれる。

砂岩：色は灰色・暗灰色・褐色・淡茶色・灰緑色・暗灰緑色と様々で、粒形が亜角・亜円・円・粒径が最大2mmである。細粒砂からなる。No. 30・47・50・95・138・196の資料に含まれる。

泥岩：色は灰白色・灰色・暗灰色・黒色・淡緑灰色で、粒形が亜角・亜円・円・粒径が最大5mmである。弱い片理がみられるものもある。No. 30・37・47・50・95の資料に含まれる。

チャート：色は灰色・暗褐色・赤色で、粒形が角・亜角・亜円・粒径が最大6mmである。

片岩：色は灰白色・灰色・暗灰色・赤褐色で、粒形が亜角・亜円・粒径が最大1mmである。泥質片岩・石英質片岩・網雲母片岩・紅簾石片岩等である。

蛇紋岩：色は淡緑色・粒形が亜角・粒径が最大0.7mmである。No. 46の資料に含まれる。

火山ガラス：無色透明・黒色透明で、粒径が最大0.7mm、粒形がフジツボ状・貝殻状・板状である。

石英：無色透明・赤色透明で、粒形が角・亜角・粒径が最大4mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：白色・灰白色・灰白色透明・無色透明で、粒形が角・亜角・粒径が最大10mmである。

黒雲母：金色・黒色・褐色で、金属光沢がある。粒径が最大3mmで、板状・粒状をなす。

角閃石：黒色・茶褐色・褐色で、粒形が角、粒径が最大6mmである。粒状・柱状をなす。結晶面が見られるもの、自形をなすものがある。

輝石：淡黄緑色・暗緑色で、粒形が角、粒径が最大0.7mmである。粒状をなす。

橄欖石：淡黄色で、粒形が亜角、粒径が最大0.7mmである。粒状をなす。No. 48の資料に含まれる。

3. 類型区分と傾向

砂礫構成をもとに源岩を考慮して類型に区分する。源岩を推定する場合、砂礫構成から主とする源岩を推定して主類型を設定し、推定される主とする源岩構成以外の砂礫種をもとにして源岩を推定して亜類型を設けた。

観察した土器資料は僅か56資料であるが、表面に見られる砂礫種構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするI類型、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とするII類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするIV類型、碎屑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするVII類型、片岩質岩起源と推定される砂礫を主とするVI類型である。細分すれば、Ib類型・Ibd類型・I bdg類型・I bg類型・Id類型・IIa類型・IIad類型・IIadh類型・IIag類型・IVag類型・IVan類型・IVd類型・IVe類型・IVeg類型・IVg類型・IVgh類型・IVgn類型・IVi類型・IVn類型・VIIadn類型・VIIad類型となる。各類型の特徴について述べる。

Ib類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ibd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に吉備と在地？に区分される。

I bdg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

I bg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Id類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IIa類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には結晶面が見られるものもある。砂礫相的に河内恩智・生駒西麓・讃岐・讃岐？に区分される。

IIad類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に恩智？と吉備に区分される。吉備としたものには結晶面がある角閃石が含まれる。

IIadh類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源・片岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IIag類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVag類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVan類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVd類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

IVe類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には自形を示すものもある。砂礫相的に播磨と加賀南部に区分される。

IVeg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・泥岩起源と推定される砂礫、角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には自形を示すものがある。

IVg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・泥岩・片岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVgh類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・泥岩・片岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVgn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・泥岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石や輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に播磨？・播磨・加賀南部に区分される。

IVi類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、蛇紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石や輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に播磨と加賀南部・加賀？に区分される。

VIIadn類型：碎屑岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源の砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

VIIad類型：片岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

VIIiad類型：片岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4. 砂礫の採取推定地

土器が出土した東郷遺跡は河内の平地部に位置し、大和川の水流によって運ばれてきた砂礫で形成された冲積地に営まれた遺跡である。北には河内湖がひらけ、西に上町台地、東に生駒山地があり、河川は南から北へと流れている。東方の山地には変成岩からなる花崗岩類や閃綠岩類、斑構岩類が分布し、平野部や台地部には砂礫層や粘土層が分布する。生駒山地に分布する岩石には地域性がある。暗峰から高安山にかけては片麻状黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布し、高安山から南方の黒谷にかけては縞状をなす細粒の片麻状黒雲母花崗岩が分布し、その南に斑状黒雲母花崗岩が分布する。柏原市の高雄山から平尾山にかけては黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布する。このような岩石分布の中に岩体として斑構岩や閃綠岩が分布する。生駒山付近から暗峰にかけて斑構岩が、八尾市楽音寺付近や高安山の北方、恩智神社の東方、柏原市平尾山にはルーフベンダント状に閃綠岩の岩体が分布する。山麓には段丘が発達する。

以上のような岩石・地層の分布の影響を受けて、河川に見られる砂礫や沖積層の砂礫には特色がある。河川には後背地の岩石や地層の分布面積に関係した量の砂礫が供給されていると推定される。大東市から東大阪市の石切にかけては、花崗岩が媒乱した花崗岩片・石英・長石・黒雲母からなる砂礫を主とし、僅かに他形の角閃石が含まれる。このような砂礫は八尾市の神立付近や高安山から平尾山にかけての山麓にもみられる。八尾市大窪や恩智付近では角閃石の量が多くなり、閃綠岩片や輝石がみられることもある。東大阪市客坊谷の後背地は斑櫟岩の分布地に相当するため、長石・角閃石・輝石を主とし、ごく僅かに橄欖石や黒雲母、石英が含まれる。大和川は奈良盆地周辺の山々を後背地にもち、比較的長い距離を流れているため、長石が比較的少なく、石英が多い。また、チャートや自形の石英も僅かに含まれる。このような砂礫分布を基にして、土器に含まれる砂礫とを比較する。

在地?とした砂礫は I b類型・I bg類型・I bd類型に属する。この砂礫は比較的粒が揃っており、粒の角が滑らかになっている。東郷遺跡から中田遺跡付近にかけての砂礫に似ている。

高安山麓とした砂礫は I b類型に属するものに含まれる。砂礫構成は花崗岩質岩起源と推定される角ばった砂礫を主とし、比較的長石が多い。山地から流れ出した砂礫と推定される。大窪や恩智付近では角閃石が多くなることから、服部川付近や神立付近、神宮寺付近の山麓の砂礫が推定される。

土師里とした砂礫は I bdg類型に属するものに含まれる。花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするが、石英に比べて長石が比較的多い。チャートや自形の石英が僅かに含まれ、砂岩や泥岩も僅かに含まれることもある。藤井寺市土師里遺跡付近の砂礫や東方の石川の砂礫に似ている。

河内恩智とした砂礫は II a類型に属するもので、他形の角閃石が多く、閃綠岩質岩が媒乱したような砂礫である。八尾市恩智神社の東方付近が砂礫の採取地と推定される。このような閃綠岩の媒乱砂を意図的に使用されている土製品は弥生時代後期の中田遺跡から出土した大型器台に始まり、河内型庄内壺で終わるようである。

恩智?とした砂礫は II ad類型に属するものである。閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、河内恩智の砂礫構成に似ているが、砂礫が水洗されたように表面がきれいで、やや粒が揃っている。また、自形の石英やチャートを含むことから、大和川と恩智から流れ出した谷川とが合流する付近の砂礫と推定される。

生駒西麓とした砂礫は II a類型に属するものに含まれる。橄欖石や輝石が含まれることから III a類型とした方がよいのかも知れない。他形の輝石や橄欖石が含まれることから斑櫟岩質岩起源の砂礫と推定され、東大阪市客坊谷の砂礫に似ているが、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が含まれることから、山麓というよりも平地部付近の花崗岩質岩起源の砂礫が混じる付近が推定される。

摂津とした砂礫は VII adn類型に属するものに含まれる。粒形が亜円~円の砂岩や泥岩、緑色岩類の粒が目立つが、基質の砂礫は花崗岩質岩起源と推定される砂礫である。花崗岩質岩起源の砂礫を含む粘土に古期層起源の砂礫が含まれる川がある付近が推定される。場所としては高槻市から茨木市にかけての淀川右岸付近が推定される。

播磨とした砂礫は IV e類型・IV g類型・IV n類型・IV gn類型に属するものに含まれる。石英が非

常に多く、且つ、自形の石英がみられる。流紋岩質岩は灰白色・灰色をなすものが多い。稀に、チャートや砂岩、泥岩が含まれる。角閃石や輝石は含まれる場合、含まれない場合がある。砂礫相的に市川から掛保川にかけての付近の播磨地方の砂礫と推定される。

播磨？とした砂礫はIV ag類型・IV eg類型・IV gn類型に属するものに含まれる。比較的自形の石英が少なく、古期層起源の砂岩や泥岩、チャートの砂礫が含まれ、花崗岩質岩起源と推定される砂礫も僅かに含まれることがある。加古川市から高砂市にかけての付近や赤穂市付近の可能性がある。

吉備とした砂礫はI bd類型とII ad類型に属するものである。花崗岩質岩か閃綠岩質岩起源の砂礫を主とし、自形の石英が含まれ、閃綠岩に柱状で自形の角閃石が含まれる。このような砂礫は岡山市足守川中流の加茂付近の砂礫に似ている。

但馬とした砂礫はIV d類型に属するものである。流紋岩質岩起源の砂礫からなるが、播磨から丹波にかけて分布する古期の流紋岩類のようではなく、グリンタフのような新期の流紋岩の様相を示す。但馬北部の日本海付近に分布する流紋岩の可能性がある。

讃岐とした砂礫はI d類型・II a類型・II adh類型に属するものに含まれる。結晶面がある角閃石が多く含まれ、砂礫粒が水洗されたように美しい。II a類型の閃綠岩質岩起源のみの砂礫と推定されるものは、奈良県桜井市寺川下流付近の砂礫とも似ており区別しがたい。しかし、I d類型やII adh類型のように流紋岩質岩起源の砂礫が含まれるものは、高松市岩清尾山南方付近の砂礫に似ている。

讃岐？とした砂礫はII a類型に属するものである。河内恩智とした砂礫に似ているが、砂礫の表面が滑らかで、美しいことから媒乱した砂礫ではなく、河川により流されて水洗されたような砂礫である。岩清尾山南方付近の砂礫か、寺川下流域の砂礫の可能性もある。

伊予・伊予？とした砂礫はV ad類型・V adn類型に属するものである。結晶片岩が含まれることから三波川帯の結晶片岩が分布する地域から流れる河川の砂礫と推定される。また、白雲母が含まれなくて、花崗岩質岩起源の砂礫を含むことから、花崗岩質岩が分布する付近の粘土を使用していると推定される。結晶片岩が分布する地域から花崗岩が分布する地域へ川が流れている付近の砂礫と推定される。位置的には伊予付近が推定される。

湖東とした砂礫はIV gh類型・IV i類型に属するものである。古期の流紋岩質岩と推定される粒が多く、自形の石英も含まれる。僅かであるが古期層起源と推定される蛇紋岩や砂岩・泥岩・片岩の亜角～亜円粒が含まれる。このような砂礫は彦根市から能登川町にかけて分布する砂礫に似ている。

湖東？とした砂礫はIV eg類型に属するものである。湖東とした砂礫に似ているが、自形の角閃石が含まれることが異なる。

加賀南部とした砂礫はIV e類型・IV gn類型・IV n類型に属するものに含まれる。淡灰色・茶褐色・淡桃色・褐色・黒色等と色とりどりの流紋岩質岩粒や自形の石英が多く、角閃石や輝石が僅かに見られる。また、砂岩や泥岩が含まれるものもある。岩相的に加賀南部梯川流域の砂礫に似ている。

加賀？とした砂礫はIV n類型に属するものである。加賀南部の砂礫に似ているが、石英が多く、流紋岩が比較的少ない。加賀地方のものであろうか。

5. おわりに

僅か56資料しか観察していないが、観察した土器に含まれる砂礫は遺跡付近の砂礫構成を示すものが僅かで、加賀・近江（湖東）・摂津・播磨・但馬・吉備・讃岐・伊予等と河内を中心とした各地の砂礫構成を示している。また、河内平野内でみれば、土師里付近や恩智と小地域内でも各地の砂礫構成を示している。砂礫の採取地が土器の製作地であるとすれば、各地から土器が運ばれることになる。砂礫構成からみれば各地から土器が運ばれていることになるが、出土状況を考慮すれば、SK201では加賀南部・吉備・摂津・播磨・河内恩智からの土器が、SK202では播磨・湖東・但馬・生駒西麓・河内恩智・土師里からの土器が、SK206では湖東・播磨・吉備・讃岐・伊予・河内恩智からの土器が出土している。時期的にみれば、SK202・SK206・SK201の順に器形的に新しい時期を示す。時期と地域の関係をみれば、古い時期には河内平野内はもとより、播磨・但馬・湖東の範囲からとなり、中頃には湖東・吉備・讃岐・伊予の範囲と西側に広がる地域（瀬戸内海）となる。新しい時期になれば、加賀・摂津・吉備と北陸方面に地域が広がっている。

土器の表面にみられる砂礫

その1

| 試料番号 | 器種 | 石 | | | | | | 物 | | | | | | 海綿類 の骨 | | |
|-----------------|-------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|
| | | 岩 | 花崗岩 | 閃緑岩 | 流紋岩 | 安山岩 | 砂岩 | 泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 雲母 | 角閃石 | 輝石 |
| 東部44次 No. 26 | 甕・吉備系 | M-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il ad. 吉備 |
| 東部44次 No. 27 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Na 布留南部 |
| 東部44次 No. 28 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Ve 加賀南部 |
| 東部44次 No. 29 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Ve 加賀南部 |
| 東部44次 No. 30 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Ve 加賀南部 |
| 東部44次 No. 32 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il a 河内恩智 |
| 東部44次 No. 34 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il a 河内恩智 |
| 東部44次 No. 37 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il a 河内恩智 |
| 東部44次 No. 38 | 甕・布留系 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il a 河内恩智 |
| 東部44次 No. 40 | 甕 | X-角 X-角 | 30倍 L-角 | Il a 河内恩智 |
| 東部44次 No. 41 | 甕 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | IV d 但馬 |
| 東部44次 No. 42 | 甕 | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il a 在地? |
| 東部44次 No. 43 | 甕? | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il b 高安山脈 |
| 東部44次 No. 44 | 甕? | L-角 L-角 | 30倍 L-角 | Il d 土師? |
| 東部44次 No. 45 | 甕? | X-角 X-角 | 30倍 L-角 | Il d 土師? |

III 東部遺跡第44次調査 (T G 93-44)

| 試料番号 | 器種 | 岩 | | | 石 | | | 鉱物 | | | 物質 | | | 地殻 起源 片 | | |
|------------|----|-----|-----------|-----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----|-----|-----|---------------|------------------------|----------------------|
| | | 花崗岩 | 閃緑岩 | 流紋岩 | 安山岩 | 矽岩 | 泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 雲母 | 角閃石 | 輝石 | |
| 東部4次 甕? | | | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | L-微 | M-多 | M-中 | S-褐 E-非 | N ^{CE} 泥炭? | V ⁱ 湖東 |
| 東部4次 甕? | | | | L-微 L-中 角 | | | | | | | M-微 | M-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-微 L-中 角 | | | | | | | M-微 | M-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-微 L-中 角 | | | | | | | M-微 | M-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 46 | | | | L-中 角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 47 | | | | L-微 L-中 角 | | | | | | | L-微 | L-中 | | | | |
| No. 48 | | | | L-微 L-中 角 | | | | | | | L-多 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 49 | | | | L-中 角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 50 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 51 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 52 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 53 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 75 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 86 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 87 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 88 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 89 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 90 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 91 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| 東部4次 甕? | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |
| No. 92 | | | | L-中 亞角 | | | | | | | L-中 | L-中 | | | | |

土器の表面にみられる砂礫

その3

| 試料番号 | 器種 | 岩 | | | | 41 | | | | 42 | | | | 物質 | | | | 地盤 |
|------------------|------|------------------|------------|------------|------------------|-----------|-------------|-----------|--------------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|--------------|-----------------------|----|
| | | 花崗片 板状 30倍 | 閃灰岩 30倍 | 流紋岩 30倍 | 安山岩 砂岩 30倍 | 泥岩 30倍 | チャート 30倍 | 片岩 30倍 | 火山ガラス 30倍 | 石英 30倍 | 長石 30倍 | 雲母 30倍 | 角閃石 30倍 | 輝石 30倍 | 30倍 | 30倍 | 30倍 | |
| 東部44次 No. 93 | 蓋 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | I-1d 吉備 沖野 | |
| 東部44次 No. 94 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | Vn ^a | |
| 東部44次 No. 95 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | Vn ^b 福東 | |
| 東部44次 No. 96 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | Vn ^c 福西 | |
| 東部44次 No. 97 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | II-a 河内恩智 | |
| 東部44次 No. 98 | 蓋 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | II-a 諏訪? | | |
| 東部44次 No. 99 | 蓋 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | II-b 在地 | | |
| 東部44次 No. 100 | 蓋 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | II-a 諏訪 | | |
| 東部44次 No. 101 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | II-a 諏訪 | |
| 東部44次 No. 102 | 蓋? | | | | | | | | | | | | | | | | II-a 諏訪? | |
| 東部44次 No. 103 | 新内付内 | | | | | | | | | | | | | | | | Vn ^a | |
| 東部44次 No. 104 | 蓋 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | II-a 河内恩智 | | |
| 東部44次 No. 105 | 蓋 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | | | II-a 河内恩智 | |
| 東部44次 No. 106 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | II-a 河内恩智 | |
| 東部44次 No. 107 | 蓋 | | | | | | | | | | | | | | | | II-a 河内恩智 | |

土器の表面にみられる砂礫

その4

| 試料番号 | 器種 | 石 | | | | | | | | | | | | | | 海 |
|-----------------|----|----------|----------|-----|-----|----|-----|-----------|-----|-------|-----|----|-----|----|------------|-----|
| | | 花崗岩 | 閃緑岩 | 流紋岩 | 安山岩 | 砂岩 | 泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 漂母 | 漂母 | 輝石 | |
| 東部4次 No. 108 | 釜 | 褐色 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐眼 | 30倍 | 褐色 |
| 東部4次 No. 109 | 釜 | U 横 角 | U 横 角 | | | | | L-横 直角 | | | | | | | M 備 L-横 | L-中 |
| 東部4次 No. 110 | 丸 | L 横 角 | | | | | | | | | | | | | M 備 M 備 | L-中 |
| 東部4次 No. 111 | 裏? | L 橫 角 | | | | | | | | | | | | | L-横 直角 | M-中 |
| 東部4次 No. 112 | 裏? | L 橫 角 | L 橫 角 | | | | | L-横 直角 | | | | | | | L-横 直角 | M-中 |
| 東部4次 No. 113 | 器台 | | | | | | | | | | | | | | | S 備 |
| 東部4次 No. 114 | 高杯 | | | | | | | | | | | | | | | E 備 |
| 東部4次 No. 115 | 高杯 | S 橫 角 | | | | | | | | | | | | | | M 備 |
| 東部4次 No. 138 | 釜 | | | | | | | L-横 直角 | | | | | | | L-横 直角 | E 中 |
| 東部4次 No. 153 | 釜 | L 橫 角 | L 橫 角 | | | | | L-横 直角 | | | | | | | M 備 M 備 | L-中 |
| 東部4次 No. 160 | 丸 | L 橫 角 | L 橫 角 | | | | | L-横 直角 | | | | | | | L-横 直角 | M-中 |

標記 = 漂砾板底、標記による数値は1mm未満以下、S=粒径2mm以上、M=粒径2~5mm以上、L=粒径5mm以上、H=粒径5~10mm以上、N=粒径10~30mm以上、E=粒径30mm以上、F=粒径40mm以上、G=粒径50mm以上、K=粒径60mm以上、B=粒径70mm以上、P=粒径80mm以上、D=粒径90mm以上。M=粘土が1mm未満、N=粘土が1mm以上、E=粘土が1mm未満、F=粘土が1mm以上、G=粘土が1mm以上、K=粘土が1mm以上、B=粘土が1mm以上、P=粘土が1mm以上、D=粘土が1mm以上。A=灰分、B=酸分、C=鉄分、D=鈎鉄分、E=色彩、F=形態、G=構造、H=表面、I=断面、J=内部、K=内部、L=内部、M=内部、N=内部、O=内部、P=内部、Q=内部、R=内部、S=内部、T=内部、U=内部、V=内部、W=内部、X=内部、Y=内部、Z=内部。

第3章 出土遺物観察表

| 遺物番号 回収番号 | 器種 | 出土地点 | 法長 (cm) (復元値) | 口径 外径 | 色調 内 | 胎 土 | 焼成 | 技 法・形 態 等 の 特 徴 | 残 存 状 |
|--------------|------------|---------------------|------------------|----------|------------------------|---------------|---------------------------------------------------------------------------|-----------------|-------------|
| 1 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 10.0 2.4 | 黒灰色 | 帶 0.1mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 外側分割、内面密な團塊状、見込み格子状のヘラミガキ。 底部は不明。 | 1/2 一部反転 | |
| 2 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 9.8 2.4 | 黒灰色 | 密 | 良好 | 口縁部内外團塊状ヘラミガキ。底部は不明。 | ほぼ完形 | |
| 3 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 15.4 5.9 | 灰黒色 | 密 | 良好 | 外面3~4分割、内面密な團塊状、見込み密な丸方向のヘラミ ガキ。高台ヨコナデ。底部外側ナデ。 高台径 6.5、高台高 0.8 | ほぼ完形 | |
| 4 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | (15.4) 5.8 | 黒灰色 | 帶 0.1mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 外縁や腰部團塊状、内面密な團塊状、見込み格子+平行線 状のヘラミガキ。高台ヨコナデ。底部外側ナデ。 高台径 (5.6)、高台高 0.7 | 1/2 反転 | |
| 5 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 16.2 5.2 | 黒灰色 | 密 | 良好 | 外縁や腰部團塊状、内面密な團塊状、見込み格子状のヘラミ ガキ。高台ヨコナデ。 高台径 6.4、高台高 0.7 | 1/2 一部反転 | |
| 6 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | (16.0) 5.8 | 淡灰黑色 | 帶 0.2mm以下の 砂粒を含む。 | やや不良 みは不明。 | 内面や腰部團塊状、内面密な團塊状ヘラミガキ。 高台ヨコナデ。外縁・見込 高台径 (6.3)、高台高 0.8 | 1/4 反転 | |
| 7 7 | 瓦 器 皿 | SD 101 | (17.1) | 黒灰色 | 帶 0.1mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 外縁密な團塊状ヘラミガキ後、内面ジグザグ状のヘラミガ キ。 | 極小 反転 | |
| 8 8 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 5.8 高台高 0.7 | 黒灰色 | 密 | 良好 | 見込み乱方向ヘラミガキ。高台ヨコナデ。底部内面ナデ。 | 底部のみ | |
| 9 | 瓦 器 皿 | SD 101 | 6.0 高台高 0.9 | 灰白色 | やや粗 | 良好 | 高台ヨコナデ。底部外側ナデ。 | 底部のみ | |
| 10 8 | 土器 小 皿 | SD 101 | 9.5 2.1 | 淡素灰色 | 帶 1mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | 完形 | |
| 11 8 | 土器 小 皿 | SD 101 | 9.4 1.3 | 淡灰茶色 | 帶 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ヨコナデ。 | 完形 | |
| 12 9 | 土器 人 皿 | SD 101 | 14.5 | 淡灰茶色 | 帶 0.5mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。底部部ナデ。 | ほぼ完形 | |
| 13 8 | 土器 大 皿 | SD 101 | 15.6 3.5 | 乳灰茶色 | 帶 1.5mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。底部部ナデ。 | 3/4 | |
| 14 8 | 弥 生 甕 | SD 101 | (11.0) | 淡灰茶色 | 帶 4.5mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部板ナデ。底部外側ナデ、内面板ナデ。 | 1/4 反転 | |
| 15 8 | 灰陶陶器 甕 | SD 101 高台径 (5.2) | (9.4) | 淡灰茶色 | 帶 1mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 糊板ナデ。 | 1/4 反転 | |
| 16 8 | 須恵器 短腹甕 | SD 101 | (7.7) | 灰色 | 密 | 良好 | 糊板ナデ。底部外側向輪ヘラケズリ。底部内面ナデ 底部最大径 (11.4) | 1/4 反転 | |
| 17 8 | 弥 生 甕 | SD 101 | (17.8) | 淡灰茶色 | 帶 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部外側ヨコナデ、内面ナデ。 | 口縁部 1/5 反転 | |
| 18 8 | 土器 甕 | SK 201 | 11.6 12.6 | 乳盤色 | やや密 | 良好 | ヘラミガキ。底部外側ヘラケズリ。底部部内面ナデ。底部外 側部最大径 13.7 | ほぼ完形 | |
| 19 8 | 土器 甕 | SK 201 | | 淡素灰色 | 帶 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ヘラミガキ。底部外側ヘラケズリ。底部部内面上位ナデ、下 口縁部4/5 欠損 底部最大径 13.8 | 一部反転 | |
| 20 8 | 土器 甕 | SK 201 | (21.2) | 淡灰茶色 | 帶 2mm以下の砂 粒を含む。 | やや不良 | 不規 | 口縁部 1/3 反転 | |
| 21 9 | 土器 甕 | SK 201 | (18.8) | 乳盤色 | 密 2.5mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | 横後縫のヘラミガキ。 | 1/2 一部反転 | |
| 22 8 | 土器 甕 | SK 201 | (20.4) | 灰褐色 | やや粗 4mm以下 の砂粒を多く含む。 | やや 不良 | 口縁部~底部外側ハケ。底部内面上位ナデ、下以ハラケ 一端欠損 | 一端欠損 一部反転 | |
| 23 9 | 土器 甕 | SK 201 | (底径 6.1) | 褐茶色 | やや粗 4mm以下 の砂粒を多く含む。 | やや 不良 | 外側ハケ後ヘラミガキ、内面不明。底部外側黒斑。 | 口縁部欠損 浅反転 | |
| 24 9 | 土器 甕 | SK 201 | (15.0) | 淡灰茶色 | 密 0.5mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | ヘラミガキ | 1/5 反転 | |

| 標本番号 採取場所 | 器種 | 出土地点 | 法長(cm) (復元後) | 頂高 色調 内 | 胎 土 | 施成 | 技術・形態等の特徴 | 残 存 状 況 |
|--------------|--------|----------|---------------------|--------------------------------|--------------------|----------------------------------------------------|---------------------|------------------|
| 25 土師器 高杯 | SK 201 | | (21.2) | 淡茶色 青 | 良好 吉備 | ヘラミガキ。 | | 1/5 反転 |
| 26 土師器 壺 | SK 201 | | (9.0) | 明灰茶色 やや粗 | 良好 吉備 | 口縁部ヨコナギ。底部外沿ハケ後ヘラミガキ。 内面にサケズリ後ヘラミガキ。 | 底部最大径(10.6) | 1/3 反転 |
| 27 土師器 壺 | SK 201 | | 17.5 27.6 | 乳灰茶色 やや粗 | 良好 加賀南 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面ヘラケズリで中位ハケ付着。 | 一部欠損 一部反転 | |
| 28 土師器 壺 | SK 201 | | 19.2 27.5 | 淡灰茶色 やや粗 | 良好 加賀南 | 口縁部ヨコナギ。底部外表面ハケ、内面ヘラケズリで中位ハケ付着。 底部最大径(26.9) | 一部欠損 一部反転 | |
| 29 上部器 壺 | SK 201 | | (12.0) | 乳灰色 やや粗 | 良好 加賀南 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面エビオサエ後ヘラケズリ。 外側付着。 | 底部最大径(16.0) | 1/2 反転 |
| 30 土師器 壺 | SK 201 | | 12.2 | 乳茶灰色 やや粗 | 良好 加賀南 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面ヘラケズリで、肩部上位 エビオサエ。 | 底部欠損 底部最大径(17.3) | 一部欠損 一部反転 |
| 31 土師器 壺 | SK 201 | | 13.2 | 橙灰色 青2mm以下の砂 を含む。 | やや粗 不規 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面ヘラケズリ。 底部最大径(19.5) | | 1/2 一部反転 |
| 32 上部器 壺 | SK 201 | | 13.4 | 淡灰褐色 やや粗 2mm以下の砂 を含む。 | やや粗 不良 星智 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面ヘラケズリ、下位ヘラケズ リ。 | 底部最大径(17.5) | 1/2 一部反転 |
| 33 土師器 壺 | SK 201 | | (15.2) | 黒褐色 棕灰色 | 青1.5mm以下の砂 を含む。 | 口縁部ヨコナギ。兩部外表面ナデ、内面ヘラケズリ。 | | 口縁部1/4 反転 |
| 34 土師器 壺 | SK 201 | | 14.3 18.4 | 乳灰色 やや粗 | 良好 加賀? | 口縁部ヨコナギ。底部外表面ハケ、内面エビオサエ後ヘラケズ リ。外側付着。 | 底部最大径(18.4) | 一部欠損 |
| 35 上部器 壺 | SK 201 | | 16.7 | 茶灰色 やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面ハケ、内面ヘラケズリ。 外側付着。 | | 1/4 一部反転 |
| 36 土師器 壺 | SK 201 | | | 乳灰茶色 やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナギ。底部外表面タケキ後ハケ。底部外表面ハケ、内面ヘラケズリ。 外側付着。 | 底部2/3 | |
| 37 土師器 壺 | SK 201 | | 12.9 | 乳灰色 青1-3mmの砂 を多量に含む。 | 良好 星智 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面タケキ、内面ナデ。 | 底部欠損 底部最大径(15.4) | 一部反転 |
| 38 上部器 壺 | SK 201 | 底付 底付 | 15.2 20.4 2.9 | 淡灰茶色 青3mm以下の砂 を含む。 | 良好 播磨 | 二分割成形。口縁部外表面ヨコナギ。内面ハケ。底部外表面タケ キ後ハケ付着。内面ハケ。外側付着。 | 底部最大径(18.1) | 一部欠損 |
| 39 印き石 | SK 201 | 長辺 細辺 | 11.9 7.3 | 暗灰色 青 | | 向端部使用痕。 | | 完形 |
| 40 土師器 壺 | SK 202 | | (8.9) | 淡灰褐色 青1mm以下の砂 を含む。 | 良好 星智 | ナデ?。 | | 極小 反転 |
| 41 上部器 壺 | SK 202 | | (8.4) 6.8 | 乳茶色 やや粗 | 良好 但馬 | ヘラミガキ。 | 底部最大径(10.4) | 1/3 一部反転 |
| 42 土師器 壺 | SK 202 | | | 乳灰色 やや粗 | 良好 在地? | 底部青黄円形浮文。腹部~体部間突起に半數竹管文。 | | 極小 |
| 43 土師器 壺 | SK 202 | 底付 | 4.0 | 暗灰白色 青 | 良好 高安 | 外側ナデ、内面工具痕。 | | 底部のみ 一部反転 |
| 44 土師器 壺 | SK 202 | 底付 | 4.3 | 暗灰茶色 青 | 良好 在地 | 外側ヘラメガキ。内面ナデ。 | | 底部のみ 一部反転 |
| 45 土師器 壺 | SK 202 | | (14.3) | 淡褐色 青1.5mm以下の砂 を含む。 | 良好 土蜘蛛 | ナデ。口縁部削除み日。 | | 1/6 反転 |
| 46 上部器 壺 | SK 202 | | (12.4) | 乳灰色 青 | 良好 播磨 | 口縁部ヨコナギ。外側付着。 | | 極小 反転 |
| 47 土師器 壺 | SK 202 | | | 乳棕色 青 | 良好 播磨 | 体部下位外表面ハケ。肩部外表面タケキ、内面工具痕。 | | 底部のみ 一部反転 |
| 48 土師器 壺 | SK 202 | | (15.2) | 暗灰白色 生陶西施 | 良好 播磨 | 口縁部ヨコナギ。体部外表面タケキ、内面エビオサエ後ヘラケズ リ。 | 1/4 反転 | |
| 49 土師器 壺 | SK 202 | 底付 | 14.5 16.9 3.7 | 淡灰褐色 青 | 良好 播磨 | 三分割成形。口縁部ヨコナギ。底部外表面タケキ、内面ナデ。 底部最大径(16.5) | | 完形 |
| 50 土師器 鉢 | SK 202 | | (27.0) | 乳灰茶色 青 | 良好 播磨 | 口縁部ナデ。底部外表面タケキ後上位ハケ。下位ヘラミガキ。 | 1/4 反転 | |

II 東郷遺跡第44次調査 (T G93-44)

| 遺物番号 図版番号 | 器種 | 出土地點 | 法量 (cm) (復元値) | 口径 (復元値) | 色調 外内 | 動 絆 | 土 | 焼成 | 技法・形態等の特徴 | 残 存 状 |
|--------------|-----------|------------------|------------------|-------------|--------------------------------|----------|----------------------------------------|-------------------------|-------------------|-------------|
| 51 11 | 土器器 蓋 | SK 204 | (13.3) 14.2 | 淡褐色 | 粗 1~2mmの砂 粒を多量に含む。 指壓 | 粗 | 一 部分形成。口縁部ヨコナデ。底面部外側タキ後ハケ、内面 ナデ。 | 口縁部 1/2欠損 全体底火延 14.8 | 口縁部 1/2欠損 一部反転 | |
| 52 | 土器器 蓋 | SK 204 | (16.4) | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 不明。 | | 1/6 反転 | |
| 53 | 土器器 蓋 | SK 204 | (13.7) | 茶色 | やや粗 | 良好 | 体部外面タキ。 | | 1/3 反転 | |
| 54 | 土器器 蓋 | SK 204 | (15.7) | 茶色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | やや粗 | 体部外面タキ。 | | 1/3 反転 | |
| 55 | 土器器 蓋 | SK 204 | (13.1) | 茶色 | 密 3mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 1/4 反転 | |
| 56 | 土器器 蓋 | SK 204 | (17.8) | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 不明。 | | 1/8 反転 | |
| 57 | 土器器 蓋 | SK 204 | (17.2) | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 体部外面タキ。 | | 1/6 反転 | |
| 58 11 | 土器器 蓋 | SK 204 | 13.5 | 茶色 | 密 3mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 1/4 一部反転 | |
| 59 11 | 土器器 蓋 | SK 204 | (14.2) | 乳茶色 | 密 1~3mmの砂 粒を多量に含む。 擦痕 | 良好 | 体部外面タキ。頂部内面ユビオサエ。 | | 1/2 反転 | |
| 60 11 | 土器器 蓋 | SK 204 底径 3.9 | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 外表面タキ。 | | 底盤のみ 一部反転 | | |
| 61 | 土器器 蓋 | SK 204 | (18.0) | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部外側ヨコナデ、内面ハケ。体部外面タキ、内面ヘラケ スリ。 | | 1/2 反転 | |
| 62 | 土器器 蓋 | SK 204 | (18.6) | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。体部外面タキ。 | | 1/4 反転 | |
| 63 | 土器器 蓋 | SK 204 | (18.5) | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。体部外面タキ、内面ヘラケスリ。 | | 1/8 反転 | |
| 64 | 土器器 蓋 | SK 204 | 14.8 | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。体部外面タキ、内面ヘラケスリ。 | | 口縁部のみ 一部反転 | |
| 65 11 | 土器器 蓋 | SK 204 | (12.6) | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ヘラケスリで上位ユビオ サエ。 | | 1/2 反転 | |
| 66 | 土器器 高杯 | SK 204 | (21.8) | 灰赤褐色 | 密 2mm以下の砂 粒を多量に含む。 | やや 不良 | 小崩。 | | 1/4 反転 | |
| 67 | 土器器 高杯 | SK 204 | | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 肩部外側ヘラミガキ。底部内孔。 | | 口縁・脚部欠損 一部反転 | |
| 68 11 | 土器器 高杯 | SK 204 | (10.4) | 茶色 | やや粗 | 良好 | 肩部内面ヘラミガキ。器底四方孔。 | | 脚部欠損 一部反転 | |
| 69 12 | 土器器 高杯 | SK 204 | | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 不明。 | | 口縁・粗部欠損 一部反転 | |
| 70 12 | 土器器 蓋 | SK 204 | (26.7) | 淡灰茶色 | 粗 1~3mmの砂 粒を多量に含む。 | 良好 | 器部外側ヘラミガキ。口縁端部竹管円形文。 | | 1/2 反転 | |
| 71 12 | 土器器 蓋 | SK 204 | (22.2) | 淡茶赤色 灰黑色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部内面ナデ。口縁部外側竹管円形文。 | | 1/4 反転 | |
| 72 | 土器器 蓋 | SK 204 | (26.0) | 茶褐色 灰褐色 | 密 1mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 極小 反転 | |
| 73 | 土器器 蓋 | SK 204 | (15.8) | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 外表面ヘラミガキ残る。 | | 1/4 反転 | |
| 74 | 土器器 蓋 | SK 204 | (6.7) | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 体部外面ハケ、内面上位ユビオサエ。 | | 1/2 反転 | |
| 75 12 | 土器器 蓋 | SK 204 底径 9.6 | | 淡茶褐色 | やや粗 思質 | 良好 | 外表面タキ。底部外表面張り残る。 | | 底部のみ 一部反転 | |
| 76 12 | 土器器 蓋 | SK 204 底径 4.4 | | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 底部外面ナデ、内面板ナデ。外表面黒斑。 | | 底部のみ 一部反転 | |

| 遺物番号 | 器種 | 出土地点 | 法量(cm) (復元値)容積 | 外 寸 径 | 内 寸 径 | 地 質 | 焼成 | 技法・形態等の特徴 | 残 存 状 態 |
|------|----------|--------|-------------------|-------------|-------------|------------|----------------------------|-------------------------------------------------|-----------------------|
| 77 | 土師器 壺 | SK 204 | | 底径 4.1 | | 淡褐色 | 密 2.3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 ナデ。 | 底部のみ 一部反転 |
| 78 | 土師器 壺 | SK 204 | | 底径 4.2 | (13.8) | 乳白色 淡灰色 | やや粗 1.5mm以下の砂粒を含む。 | やや粗 不良 ナデ。 | 2/3 一部反転 |
| 12 | 土師器 壺 | SK 204 | | | | | | | |
| 79 | 土師器 鉢 | SK 204 | (13.0) | | | 乳褐色 | やや粗 | 良好 ナデ。 | 1/4 反転 |
| 80 | 土師器 鉢 | SK 204 | (5.0) | 底径 5.4 | 5.0 | 茶褐色 | 密 1mm以下の砂粒を含む。 | 良好 外面ハケ、内面ナデ。底部外側ナデ。 | 1/6 反転 |
| 81 | 土師器 鉢 | SK 204 | (0.7) | 底径 5.4 | 5.5 | 茶色 | やや粗 | 良好 底部内面ハケ。 | 口縁部 1/4 反転 |
| 12 | 土師器 鉢 | SK 204 | | | | | | | |
| 82 | 土師器 鉢 | SK 204 | (14.0) | 底径 8.5 | | 茶色 灰黑色 | 密 1.3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 外側ナデ。内面ハミガキ。 | 口縁部 1/2 反転 |
| 83 | 土師器 鉢 | SK 204 | | | | 乳褐色 | やや粗 | 良好 不明。 | 1/2 反転 |
| 84 | 土師器 鉢 | SK 204 | (10.2) | | | 淡茶褐色 | 密 2mm以下の砂粒を含む。 | やや粗 不良 不明。 | 1/4 反転 |
| 85 | 土師器 鉢 | SK 204 | (40.0) | | | 灰黄色 | やや粗 | 良好 体部内面に上位ナデ。 | 極小 反転 |
| 86 | 土師器 壺 | SK 206 | 26.9 | | | 淡灰茶色 | やや粗 糊岐 | 良好 外側ナデ。口縁部内面ハケ。肩部内面ユビオサコ。口縁部内面 付着。あるいは底座。 | 口縁部 4/6 |
| 12 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 87 | 土師器 壺 | SK 206 | 18.6 | | | 褐色 | 密 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 口縁部外側ナデ、内面ハケ。腹部ハケ。体部ハケで、内面上 位ナデ。 | 口縁部は先存 同一個体 |
| 12 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 灰黑色 | 糊岐 | | |
| 88 | 土師器 壺 | SK 206 | 底径 3.9 | | | 灰褐色 灰黑色 | 密 1mm以下の砂粒を含む。 | 良好 外ハケ、内面ハケ。 87と同一個体 | 底部外存 一部反転 |
| 89 | 土師器 壺 | SK 206 | 20.7 | | | 茶褐色 | 粗 糊岐? | 良好 体部外側へラミガキ、内面上位ユビオサコ。口縁部外側竹青 円形浮文。体部外側黒斑。 | 1/2 反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 90 | 土師器 壺 | SK 206 | (28.8) | | | 灰褐色 | やや粗 糊岐? | 良好 口縁部内面、腹部外側へラミガキ。LJ部外側横波状文。 二段階底部外側竹青円形浮文。 | 1/8 反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 91 | 土師器 壺 | SK 206 | (24.2) | 底径 3.5 | | 灰褐色 灰赤色 | やや粗 2mm以下の砂粒を含む。 糊岐 | やや粗 不良 口縁部外側竹青円形浮文。 | 極小 反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 92 | 土師器 壺 | SK 206 | 16.1 | | | 淡乳褐色 | 糊岐 | 良好 口縁部外側へラミガキ残る。 | 口縁部 1/2 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 93 | 土師器 壺 | SK 206 | 25.7 | | | 乳灰褐色 | やや粗 吉備 | 良好 口縁部外側ヨコハケ。体部外側へラミガキ。底部外側黒斑。 体部最大径(47.5) | 1/2 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 94 | 土師器 壺 | SK 206 | 3.9 1.8 | 底径 1.8 | | 淡灰茶色 | 密 1mm以下の砂粒を含む。 | 良好 口縁部外側へラミガキ、内面ナデ。底部外側へラミガキ。 内面粗ナデ。 | 口縁部 一部欠損 体部最大径 6.8 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 95 | 土師器 壺 | SK 206 | (14.4) | | | 底径 3.5 | 密 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 口縁部板ナゲ後、上位ナデ。体部外側タキ残る。体部外側 黒斑。 | 1/2 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 96 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 灰褐色茶色 | やや粗 糊岐 | 良好 口縁部ハケ。肩部外側タキ後ハケ、内面ハケ後ナデ。 | 頭部のみ 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 97 | 土師器 壺 | SK 206 | 16.6 | | | 糊岐茶色 | やや粗 糊岐? | 良好 ハケ。肩部内面ユビオサコ。 | 底部欠損 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 98 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 淡乳茶色 | やや粗 糊岐? | 良好 体部外側タキ、内面ナデ。体部外側黒斑。 | 体部 2/3 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 99 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 乳灰茶色 | やや粗 1~4mm の砂粒を含む。 底径 | 良好 外面ハラミガキ。口縁部内面ナデ。底部内面へラケメリ。 糊岐外側剥落突起。 | 1/2 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | | | | |
| 100 | 土師器 壺 | SK 206 | 底径 5.6 | | | 乳茶褐色 | やや粗 糊岐 | 良好 外面ハラミガキ。底部内面上位、下位板ナデ。底部外側 付着。 | 体部最大径 (31.9) 一部反転 |
| 13 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 底径 4.5 | 底径 5.0 | 良好 ハケ。底部外側黒斑。 | 1/2 一部反転 |
| 102 | 土師器 壺 | SK 206 | | | | 底径 5.0 | 底径 5.5 | 良好 外面ハケ。内面ハケ後ナデ。 | 1/2 一部反転 |

II 東郷遺跡第44次調査 (T G 93-44)

| 遺物番号 図版番号 | 器種 | 出土地點 | 法量 (cm) (復元値) | 口径 器高 | 色調 外 内 | 胎 土 | 焼成 | 技法・形態等の特徴 | 残存状 |
|--------------|----------|------------------------|-------------------|--------------|-------------------------------|----------|-----------------------------------------------|----------------------|----------------|
| 103 14 | 土器 甕 | SK 206 | 15.6 15.0 | 灰褐色茶色 | やや粗 滑面 | 良好 | 口縁部ヨコナダ。体部外面タキ後ハケ、内面ヘラケズリ。外 面焼付着。 | 一部欠損 | |
| 104 14 | 土器 甕 | SK 206 | 16.9 | 青灰色 灰褐色 | 青 2mm以下の砂 粒を含む。 悪質 | 良好 | 口縁部ナダ。体部上部外面タキ、内面ヘラケズリ。 | 口縁部 3/4 | |
| 105 14 | 土器 甕 | SK 206 | 底径 2.9 | 黑褐色 褐灰色 | 青 2mm以下の砂 粒を含む。 惡質 | 良好 | 全体部外面ハケで、中位にタキ残る。内面ヘラケズリ。外 面焼付着。 | 体部最大径 (24.7) 一部反板 | 一部欠損 |
| 106 | 土器 甕 | SK 206 | (20.0) | 黑褐色 褐色 | 青 2.5mm以下の砂 粒を含む。 惡質 | 良好 | 口縁部外面ヨコナダ。内面ナダ。肩部外側タキ、内面ヘラケ ズリで、瓶部外側にヘラ切字。 | | 極小 反板 |
| 107 | 土器 甕 | SK 206 | (16.0) | 浅茶色 | やや粗 惡質 | 良好 | 口縁部ヨコナダ。肩部外側タキ、内面ヘラケズリ。 | 1/1 反板 | |
| 108 | 土器 甕 | SK 206 | (16.7) | 灰茶色 | やや粗 惡質 | 良好 | 口縁部ヨコナダ。体部外側タキ、内面ヘラケズリ。 | 1/2 反板 | |
| 109 | 土器 甕 | SK 206 | (12.2) | 赤褐色 灰黑色 | 青 2mm以下の砂 粒を含む。 良? | 良好 | 口縁部ナダ。体部外側タキ、内面板ナダ。 | 1/4 反板 | |
| 110 | 土器 甕 | SK 206 | (12.8) | 灰褐色 | 青 2mm以下の砂 粒を含む。 良? | 良好 | 口縁部ヨコナダ。体部外側タキ、内面板ナダ。 | 1/3 反板 | |
| 111 | 土器 甕 | SK 206 | (13.3) | 乳灰褐色 | やや粗 伊予? | 良好 | 肩部外側タキ。 | 112と同一個体 | 1/4 反板 |
| 112 | 土器 甕 | SK 206 | 底径 3.5 | 乳灰褐色 | やや粗 伊予? | 良好 | 瓶部外側タキ後ナダ。 | 111と同一個体 | 底部のみ 一部反板 |
| 113 | 土器 甕 | SK 206 | | 乳茶色 | やや粗 高安山窯 | 良好 | 外側ハラミガキ。 | | 基部 1/2 一部反板 |
| 114 | 土器 甕 | SK 206 | 底径 (11.0) | 乳灰茶色 | やや粗 区分不能 | 良好 | 外側ハラミガキ、内面ハケ。四方孔。 | | 1/2 一部反板 |
| 115 | 土器 高杯 | SK 206 | (23.7) | 淡茶灰褐色 | 青 1mm以下の砂 粒を含む。 惡質 | 良好 | 体部外側ハケ、内面ヘラミガキ。 | | 1/5 反板 |
| 116 | 土器 甕 | SK 207 | | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 体部外側ハケ。 | | 1/2 反板 |
| 117 | 土器 甕 | SK 207 | 底径 4.8 | 茶褐色 淡茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 体部外側下部タキ後ハケ、内面ナダ。底部外層ナダ。 | 底部のみ 一部反板 | |
| 118 | 土器 甕 | SK 207 | 7.3 5.8 9.3 | 茶褐色 | 青 0.5mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 不明 | 体部外側ハケ、内面ヘラミガキ。四方孔。 | 杯部 1/2欠損 一部反板 | |
| 119 | 土器 高杯 | SK 205 | | 灰白色 | やや粗 | 良好 | 脚柱部外側ヘラミガキ。四方孔。 | | 脚柱部のみ 一部反板 |
| 120 | 土器 高杯 | SK 208 | | 淡褐色茶色 | 青 1.5mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 脚柱部外側ナダ、内面しきり目。 | | 脚柱部のみ |
| 121 | 土器 甕 | SK 208 | 底径 4.5 | 褐色 赤灰色 | 青 3mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 外側部下部外側タキ、内面ナダ。底部外側ナダ。 | | 底部のみ 一部反板 |
| 122 | 瓦器 羽釜 | 1区 第4層 | (17.6) | 淡茶灰褐色 | 青 0.1mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 脚柱ナダ。 | | 極小 反板 |
| 123 | 瓦器 杯身 | 1区 第4層 受部 (15.7) | (14.3) | 灰色 | 青 0.2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 内面ナダ。 | | 極小 反板 |
| 124 | 土器 甕 | 1区 第4層 | (14.4) | 淡茶灰褐色 茶褐色 | 青 1.5mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部外側ナダ、内面ヨコナダ。 | | 極小 反板 |
| 125 | 土器 甕 | 1区 第4層 | (15.0) | 淡茶灰褐色 | やや粗 | 良好 | 脚柱外側タキ、内面ヘラケズリ。 | | 1/4 反板 |
| 126 | 土器 甕 | 1区 第4層 | (19.0) | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 不明。 | | 1/4 反板 |
| 127 | 土器 甕 | 1区 第4層 | (24.5) | 赤褐色 灰褐色 | 青 2mm以下の砂 粒を含む。 | やや 不良 | 口縁部ナダ。口縁部外側下部有円形浮出。 | | 極小 反板 |
| 128 | 土器 甕 | 1区 第4層 | (18.4) | 灰褐色 | 青 3mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナダ。 | | 口縁部 1/8 反板 |

| 遺物番号 国宝番号 | 器種 | 出土地点 | 法管(cm) (復元後) | 上部 色調 内 | 色調 外 | 胎 土 | 焼成 | 特徴・形態等の特徴 | 残 存 状 態 |
|--------------|------------|-------------|----------------------|---------------|-----------------------|----------|---------------------------------|------------------|------------------|
| 129 | 十郎器 要 | 1区 第5層上層 | (12.9) | 赤褐色 灰褐色 | 青 1.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部ナデ。体部外側タキ、内面ナデ。 | 極小 反転 | |
| 130 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (16.1) | 淡茶褐色 淡灰褐色 | 青 1.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部ナデ。体部外側タキ、内面ナデ。 | 口縁部 1/5 反転 | |
| 131 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (16.4) | 茶褐色 淡茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 口縁部外側タキ後ナデ、内面ナデ。肩部外側タキ後ハケ、六角ナデ。 | 口縁部 1/6 反転 | |
| 132 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (23.6) | 淡褐色 灰褐色 | 青 3mm以下の砂粒を含む。 | やや 不良 | 口縁部ナデ。肩部外側タキ、内面ナデ。外腹墨跡。 | 極小 反転 | |
| 133 16 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (15.1) | 淡黃茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。肩部外側ハケ、内面ハケ後ナデ。 | 1/4 反転 | |
| 134 16 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (28.2) | 茶褐色 茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | やや 不良 | 口縁部ナデ。口部端部及び下位に竹骨文。 | 極小 反転 | |
| 135 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (19.3) | 褐褐色 茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | むや 不良 | 口縁部ヘラ模様。 | 口縁部 1/3 反転 | |
| 136 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (13.3) | 茶褐色 | 青 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | 極小 反転 | |
| 137 | 土師器 要 | 1区 第5層上層 | (13.4) | 淡茶褐色 | 青 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 外腹ハケ、内面ナデ。 | 口縁部 1/3 反転 | |
| 138 16 | 土師器 台行鉢 | 1区 第5層上層 | (12.4) | 乳白色 | 粗 | 接着? | 不明。 | 杯部 1/2次摸 一部反転 | |
| 139 | 土師器 鉢 | 1区 第5層上層 | (10.9) | 粗系色 | 青 1mm以下の砂粒を含む。 | やや 不良 | 不明。 | 口縁部 1/6 反転 | |
| 140 | 土師器 鉢 | 1区 第5層上層 | (11.8) | 茶褐色 | 青 0.1mm以下の砂粒を含む。 | やや 不良 | 底部外側ハケ。 | 口縁部 1/4 反転 | |
| 141 16 | 土師器 器台 | 1区 第5層上層 | 底径 10.9 | 乳灰褐色 | やや粗 | 良好 | 三方孔。 | 脚部一部欠損 一部反転 | |
| 142 | 土師器 高杯 | 1区 第5層上層 | | 淡褐色 | 青 | 良好 | 脚部外側墨ナデ、内面上位しはり目、下位ナデ。 | 脚部のみ 一部反転 | |
| 143 | 土師器 高杯 | 1区 第5層上層 | | 淡茶色 | やや粗 | 良好 | 脚柱部外側ナデ。三方孔。 | 脚柱部のみ 一部反転 | |
| 144 | 土師器 要 | 1区 第5層下層 | (16.0) | 淡灰茶色 | やや粗 | 良好 | 肩部外側タキ、内面ヘラケゼリ。 | 1/4 反転 | |
| 145 | 土師器 要 | 1区 第5層下層 | (17.1) | 茶褐色 灰褐色 | 青 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 口縁器ナデ。頸部外側ハケ。肩部外側タキ、内面ナデ。 | 口縁部 1/8 反転 | |
| 146 | 土師器 要 | 1区 第5層下層 | (12.8) | 淡茶橙色 淡灰茶色 | 青 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | 口縁部 1/6 反転 | |
| 147 | 土師器 要 | 1区 第5層下層 | (14.0) | 茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | 不明。 | 極小 反転 | |
| 148 | 土師器 器 | 1区 第5層下層 | (27.6) | 水滴灰茶色 灰黑色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。口縁部外側下端竹管円形符文。 | 極小 反転 | |
| 149 | 土師器 鉢 | 1区 第5層下層 | (15.0) | 茶褐色 | 青 2.5mm以上の砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | 口縁部 1/5 反転 | |
| 150 | 土師器 壺 | 1区 第5層下層 | (8.6) | 茶褐色 淡茶褐色 | 青 2.5mm以下の砂粒を含む。 | やや 不良 | 不明。 | 1/3 反転 | |
| 151 16 | 土師器 鉢 | 1区 第5層下層 | (10.4) 8.1 3.6 | 淡褐色 | 板 1~3mmの砂粒を含む。 | 良好 | 不明。 | 1/2 一部反転 | |
| 152 16 | 土師器 鉢 | 1区 第5層下層 | (10.4) 5.4 3.9 | 淡褐色 茶褐色 | 青 3mmの砂粒を含む。 | 良好 | ナデ。底部外側墨痕。 | 1/2 一部反転 | |
| 153 | 土師器 鉢 | 1区 第5層下層 | 底径 11.6 4.6 | 茶褐色 茶褐色 | 青 3mmの砂粒を含む。 墨痕 | 良好 | ナデで、体部外側下位タキ残る。 | 1/3 一部反転 | |
| 154 | 七郎器 高杯 | 1区 第5層下層 | (15.4) | 茶色 | やや粗 | 良好 | 三方孔。 | 1/4 一部反転 | |

II 東郷遺跡第44次調査 (T G 93--44)

| 遺物番号 採取番号 | 器種 | 出土地点 | 法量(cm) (底直径) | 口径 器高 | 色調 外 内 | 胎 土 | 焼成 | 技法・形態等の特徴 | 残 存 状 |
|--------------|---------------------|---------------|-----------------|--------------|------------------------------------|--------|-----------------------------------------|----------------------|-----------------|
| 155 16 | 十脚器 高杯? | 1区 第5層下層 | 底径 (10.8) | 淡乳茶色 | 粗 1cm前後の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。二方孔。 | | 脚部のみ 一部反転 |
| 156 16 | 上脚器 小型五 脚5層下層 | 1区 大井径 2.9 | (6.5) | 茶色 | 密 1.5cm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | 口縁部 1/2欠損 一部反転 | |
| 157 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (6.0) | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 外周ケヘ後ラミガキ、内面ナデ。 | | 1/4 反転 |
| 158 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (20.9) | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁埋泡・底部内面刻文。口縁部外裏側捺波伏文・直線文後 行管円形足。 | | 極小 反転 |
| 159 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (15.2) | 茶褐色 淡灰褐色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 口縁部 1/7 反転 |
| 160 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (12.7) | 茶灰色 灰茶色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 口縁部 1/5 反転 |
| 161 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 2.8 | 暗乳茶色 | やや粗 | 良好 | 外周ヘタケズリ後ヘラミガキ。内面ナデ。 | | 底部のみ 一部反転 |
| 162 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 (3.2) | 茶灰色 | 密 1.5mm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 底部 1/2 反転 |
| 163 | 上脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 2.9 | 灰褐色 粗灰褐色 | 密 3mm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 底部 2/3 一部反転 |
| 164 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 3.4 | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 外周タキ残る。内面ヘラミガキ。 | | 底部のみ 一部反転 |
| 165 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (16.1) | 乳茶色 | やや粗 | 良好 | 口縁部ヨコナデ。体部外周タキ、内面ナデ。 | | 1/4 反転 |
| 166 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (15.9) | 茶灰色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部ナデ。肩部外周タキ、内面ナデ。 | | 口縁部 1/6 反転 |
| 167 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (18.0) | 乳灰茶色 | やや粗 | 良好 | 肩部外周タキ。 | | 1/4 反転 |
| 168 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (19.7) | 淡乳茶色 | やや粗 | 良好 | 肩部内面ハケ。 | | 極小 反転 |
| 169 16 | 上脚器 壺 | 2区 第5層 | (12.5) | 茶褐色 | やや粗 3cm以下 の砂 粒を含む。 擦痕? | 良好 | 口縁部外周ハケ、内面ナデ。体部外周ハケで、中位タキ残 る。体部内面ナデ。 | | 4/5 反転 |
| 170 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (14.8) | 粗灰褐色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ | | 口縁部 1/6 反転 |
| 171 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | (15.2) | 淡灰茶色 | 密 1.5mm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部外周ヨコナデ、内面ナデ。肩部外周タキ。内面ナ デ。 | | 極小 反転 |
| 172 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 4.8 | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 外周タキ、内面板ナデ。 | | 成型のみ 一部反転 |
| 173 | 土脚器 壺 | 2区 第5層 | 底径 1.8 | 暗茶褐色 淡灰茶色 | 密 1mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 外周タキ、内面ナデ、底部外周ナデ。 | | 底部 2/3 一部反転 |
| 174 | 土脚器 鉢 | 2区 第5層 | (11.4) | 灰褐色 | 密 1.5mm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | ナデ。 | | 極小 反転 |
| 175 | 土脚器 高杯 | 2区 第5層 | (3.5 0.9) | 茶色 | やや粗 | 良好 | 底部ヘラミガキ。脚柱部外周ヘラミガキ。三方孔。 | | 口縁・紫部欠損 一部反転 |
| 176 16 | 土脚器 上脚円板 | 2区 第5層 | 底径 3.5 0.9 | 茶色 | やや粗 | 良好 | 土器片を加工。片割ハケ。 | | 完形 |
| 177 16 | 土脚器 壺 | 3区 第5層 | 底径 2.1 | 淡乳茶色 灰色 | 密 2mm以下の砂 粒を含む。 | 良好 | 外周タキ後板ナデ。内面ヘタケズリ。底部外周黒斑。 | | 1/4 一部反転 |
| 178 | 土脚器 壺 | 3区 第5層 | (9.0) | 淡灰褐色 | 密 1mm以下 の砂 粒を含む。 | 良好 | 口縁部外周ヘラミガキ、内面ナデ。 | | 1/4 反転 |
| 179 | 上脚器 高杯 | 3区 第5層 | | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 脚柱部外周ヘラミガキ。三方孔。 | | 脚柱部のみ 一部反転 |
| 180 | 土脚器 鉢 | 3区 第5層 | (7.7) | 灰茶色 | やや粗 | 良好 | 体部外周下部ハケ。 | | 1/4 反転 |

第4章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期から平安時代後期の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ18箱を数え、ほとんどが古墳時代前期の土器である。

古墳時代前期では掘立柱建物・土坑等の集落遺構が検出され、当地では庄内式期古相から布留式期古相にわたり集落が営まれていることが確認された。庄内式期古相では、南西側の第19次・第12次・第4次・第25次調査においても土坑・溝・井戸等の遺構が検出されており、遺構の広がりは100m以上にわたっている。そして東側の第17次・第21次調査では、方形周溝墓からなる墓域が確認されている。今回の調査地とこの墓域とは、わずかに約40mしか離れておらず、当該期において居住域と墓域が近接して営まれている様相が明らかになった。

古墳時代前期の出土遺物では、他地域産と考えられる土器がかなりの割合で含まれていることが注目される。古墳時代前期の遺構について、一括性が高いと思われる土坑出土土器の様相からその変遷をみると、S K 202は遺物量は少ないものの、いわゆる庄内壺をほとんど含まない庄内式期最古段階に位置付けられ、庄内壺を一定量含むS K 204・S K 206がこれに続く。S K 201はやや新相で、布留式傾向壺・布留式壺を多く含む布留式期古相段階に比定しえるものである。

これらの出土土器の多くについては、胎土分析による産地の推定を実施した。最も古相であるS K 202の土器の産地は、河内恩智・高安山麓・生駒山西麓・在地・在地?・土師里・但馬・播磨・湖東と、非常にバラエティーに富む結果であった。続くS K 206では、河内恩智・河内恩智?・高安山麓・在地・播磨・播磨?・讚岐・讚岐?・伊予?・吉備・湖東となる。S K 202と同様に多くの地域からの搬入土器があるが、讚岐・吉備・伊予といった瀬戸内地域が新しく加わっている。これは、S K 206からは複合口縁壺を主とする多くの壺類が出土しているが、その多くが讚岐・播磨・吉備といった瀬戸内地域産であることに起因する。貯蔵形態といえる壺類は讚岐・播磨・吉備といった瀬戸内地域からの搬入品が多くを占め、多量に消費される煮沸形態の壺は河内恩智の在地のものが多いという傾向が指摘できる。なおS K 206出土土器中における複合口縁壺の占める割合の高さは特筆すべきものといえ、何らかの祭祀に関連する遺構である可能性もある。そして壺については、続く布留式期古相のS K 201出土の数点をみると、吉備・加賀南部・河内恩智・加賀?・撰津・播磨と、再び多くの地域から搬入されるようになり、布留式壺は加賀南部産が多くを占めている。

S K 206出土の壺(103)であるが、形態的に最古段階の庄内壺と捉えられるもので、胎土分析によると播磨産河内型庄内壺といえるものであった。庄内壺については近年、胎土分析等の成果から「庄内壺播磨発生説」が提唱され、播磨の研究者からの反論を交える形でしだいに認知されつつある。^{註34}八尾市域では東弓削遺跡第4次調査S D-1において、最古段階の河内産河内型庄内壺と播磨産大和型庄内壺が共伴して出土しており、この説が提唱される契機となる一例にもなっている。今回出土した播磨産河内型庄内壺は、「庄内壺播磨発生説」として重要な資料となるものといえる。また、周辺での庄内式期古相段階の資料として、南西約100mでの第25次調査において検出された井戸2基(S E 201・202)がある。遺物は壺が多くを占め、形態的に103と類似する最古段階の河内型庄内壺も出土しているが、胎土分析の結果いずれも生駒山西麓の砂

礫を含む在地の土器であることが判明している。約100mという隔たりがあり同一集落かどうかという問題はあるが、形態的に最古段階の河内型庄内甕において、播磨產と河内產が当地（河内）には存在している。河内型庄内甕が播磨產の模倣であるといふ『庄内甕播磨發生説』をなお一層補強する例であるといえよう。さらに注目すべきはV様式系甕についてである。庄内式期最古相であるSK202の49、続くSK204の51・59、そして布留式期古相に下るSK201の38と、当地には庄内式期～布留式期を通じて連続と播磨產V様式系甕が搬入されているようである。播磨からの甕の搬入ルートが確立していたのであろうか。

古墳時代前期遺構面の下層では、南北方向の河川流路上に位置すると考えられる溝（SD205・SD206）が検出された。南西部第25次調査や北部第36次調査においても庄内式期頃に埋没したと考えられる河川堆積層が確認されており、これらと合わせて旧地形を復元するうえで重要な成果といえよう。

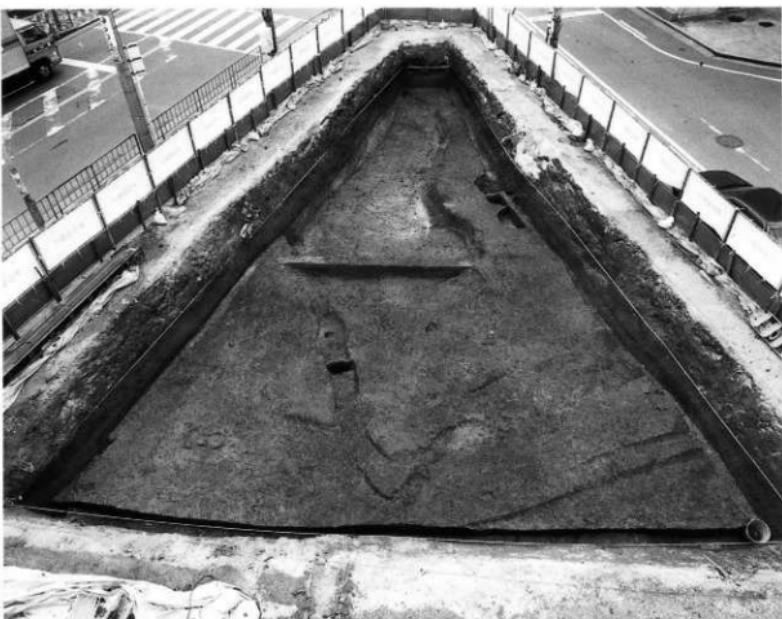
平安時代後期では溝（SD101）が検出され、東西方向に直線的に伸びる溝であることから、性格としては集落を区画する溝、あるいは灌漑用水路が考えられよう、第21次調査のSD1に連続する可能性もある。周辺の調査成果をみると、南西部の第25次調査、東部の第28次調査において井戸・溝等の遺構が、また第25次調査では水田城も検出されており、広範囲に生産域が拡がっているようであり、灌漑用水路である可能性が高い。また特異な遺構としてSO101がある。深さ0.5m～1.0mを測る程の規模を有し、砂を基調とする埋土を呈するものである。時期は平安時代以降、また包含層出土遺物からは15世紀頃までと捉えられるが明確ではない。河川の痕跡と考えたが、周辺の調査地においては同様の遺構は検出されていない。南部の調査地（第12次・第15次・第16次・第25次）では、中世頃の河川の氾濫による堆積と考えられる砂層が、平安時代～鎌倉時代の遺構面を覆っている状況が確認されている。SO101はこの氾濫を引き起した河川底部の侵食部分にあたるのかもしれない。

註

- 註1 西岡三四郎 1977「人面土器」「八尾市史(文化財編)」八尾市役所
- 註2 高萩千秋 1981「東郷遺跡発掘調査概要」「八尾市文化財調査報告6」八尾市教育委員会
- 註3 高萩千秋 1989.3「I 東郷遺跡(第5節 第15次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註4 吉田野乃 1994.3「5. 東郷遺跡(93-192)の調査」「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書II」八尾市教育委員会
- 西村公助 1995「IV 東郷遺跡(第46次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告48」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註5 原田昌則 1996「IV 東郷遺跡第49次調査(TG95-49)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告54」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註6 高萩千秋・他 1983.8「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告(第9節 第10次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980-1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註7 成海佳子 1990「4. 東郷遺跡(TG89-32)」「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註8 山上 弘 1989「成法寺遺跡発掘調査概要・IV」大阪府教育委員会
- 註9 米田敏幸 1995「9. 成法寺遺跡(94-300)の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書I」八尾市教育委員会
- 註10 奥 和之・他 1989.3「東郷遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会

- 註11 駒澤 敦 1985「I 東郷遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註12 米田敏幸 1986「東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要」八尾市教育委員会文化財室
- 註13 原田昌則 1987「III 東郷遺跡(第20次調査)発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註14 米田敏幸 1988「東郷遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市教育委員会
- 註15 滝 竜 1995「東郷廃寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要7」八尾市教育委員会文化財課
- 註16 中村清美 1994「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ」大阪府教育委員会
- 岩瀬 透 1995「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ」大阪府教育委員会
- 地村邦夫 1997「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅹ」大阪府教育委員会
- 山上 弘 1988「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」大阪府教育委員会
- 註17 河内一浩 1992「續・近世農耕井戸試考」「関西近世考古学研究Ⅲ」関西近世考古学研究会
- 註18 前掲註12
- 註19 北野博司・他 1987「宿東山遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 註20 奥 和之・山上 弘 1986「龜井北(その2)」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註21 奥田 尚氏の御厚意により、兵庫県教育委員会 渡辺 畿氏から御教示を得た。
- 註22 広瀬和雄 1978「岬町遺跡群発掘調査概要一小島東遺跡・渡輪遺跡」大阪府教育委員会
- 註23 高萩千秋 1989「I 東郷遺跡(第4節 第14次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註24 奥田 尚氏の御厚意により、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 森下友子氏から御教示を得た。
- 註25 田中清美 1986.9「加美遺跡発掘調査の成果」「古代を考える43 加美遺跡の検討」古代を考える会
- 註26 勝浦康守 1995「阿波における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究Ⅳ」庄内式土器研究会
- 註27 津村友子 1986「I. 東郷遺跡の調査」「八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書」八尾市教育委員会
- 註28 高萩千秋 1989「I 東郷遺跡(第2節 第12次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註29 高萩千秋・他 1983.8「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告(第4節 第4次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980-1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註30 西村公助 1995「I 東郷遺跡第25次調査(T G87-25)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告45」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註31 前掲註11
- 註32 前掲註12
- 註33 本文 第2章 第4節
- 註34 米田敏幸 1992「庄内播磨型壺の提唱」「庄内式土器研究Ⅲ」庄内式土器研究会
- 註35 米田敏幸 1997「庄内式土器研究の課題と展望」「庄内式土器研究Ⅳ」庄内式土器研究会
- 註36 原田昌則 1993「I 東弓削遺跡(第4次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註37 奥田 尚 1995「付章 東郷遺跡出土土器の砂礫」「I 東郷遺跡第25次調査(T G87-25) 財団法人八尾市文化財調査研究会報告45」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註38 成海佳子 1992「8. 東郷遺跡第36次調査(T G91-36)」「平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註39 前掲註12
- 註40 西村公助 1989「3 東郷遺跡(第28次調査)」「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註41 高萩千秋 1989「I 東郷遺跡(第6節 第16次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会

図版



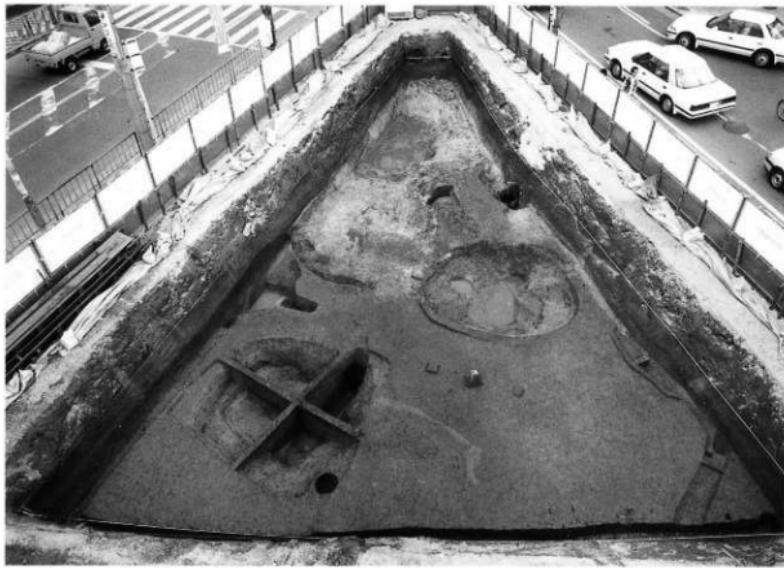
1区第1次面（北から）



S E 101 (東から)



S D 101 (西から)



1区第2次面（北から）



3区第2次面（北から）